藤之宮遺跡Ⅱ

二〇二一

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第42集

藤之宮遺跡Ⅱ

－熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書ⅩⅢ－

2021
埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第42集

藤之宮遺跡 Ⅱ

－熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書ⅩⅢ－

2021

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富み、肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。こうした自然環境のもと、市内には先人たちによって多くの文化財が営々と引き継がれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

さて、熊谷市では市民が暮らしやすく、生活環境の豊かさを実感できる土地利用を図ることを目的に土地区画整理事業を進めており、市内上之を中心とした地区で進めている上之土地区画整理事業もその一つであります。事業地内には事前の試掘調査により、原始・古代から近世に至るおびただしい遺跡が確認されました。熊谷市教育委員会では遺跡の重要性に鑑み、関係部局と保存に向けて協議を行ってまいりましたが、土地区画整理事業上やむを得ず計画等の変更ができない街路築造工事等に関しては、発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることとなりました。

本書は、平成25年度に発掘調査を行った藤之宮遺跡について報告するものでございます。藤之宮遺跡では、過去に実施した発掘調査により古墳時代前期から平安時代までの集落が広がっていることが確認されておりましたが、今回も同様の成果を得ることができ、このあたり一帯が住む場所として適した環境にあったことを再確認することができました。これらの成果は、当地域の歴史を明らかにする上で大変貴重なものと言えます。

今後、本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護の趣旨を尊重され、御理解・御協力を賜りました熊谷市都市整備部都市計画課、土地区画整理事務所、並びに地元関係者に厚くお礼申し上げます。

令和３年３月

熊谷市教育委員会
教育長　**野原　晃**

例　言

1　本書は、埼玉県熊谷市上之2022番地４地先他に所在する藤之宮遺跡（埼玉県遺跡番号59－093）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。

3　本事業の組織は、第Ⅰ章３のとおりである。

4　発掘調査期間は、平成25年５月13日から９月20日まで、整理・報告書作成期間は、令和２年４月20日から令和３年３月19日まで実施した。

5　発掘調査及び本書の執筆・編集は、松田　哲が行った。

6　発掘調査における写真撮影及び遺物の写真撮影は、松田が行った。

7　本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。

8　本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げます。（敬称略、五十音順）

青木克尚　井上尚明　柿沼幹夫　金子正之　小林　高　澤口和正　菅谷浩之　知久裕昭
富田和夫　平田重之　村松　篤
埼玉県教育局文化資源課　公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

凡　例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

1　遺構挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものについては、個別に示した。

調査区全体図…1／500　　調査区全測図…1／200

住居跡・掘立柱建物跡・溝跡断面図・土坑…1／60　　溝跡平面図…1／100

2　遺構挿図中のトーン等は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

＝地山　 ＝焼土

3　遺構挿図中、断面図に添えてある数値は、標高を示している。

4　遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

土器類・石器・石製品…1／4　　土製品・鉄製品・石製品・玉類…1／2

5　遺物実測図の表現方法は、以下のとおりであるが、それ以外のものについては、個別に示した。

弥生土器・土師器・磁器・陶器・瓦質土器・埴輪・石器・石製品・玉類断面：白抜き

須恵器断面：黒塗り　　灰釉陶器断面： 　　赤彩：

6　遺物拓影図のうち、左右あるものは向かって左に外面、右に内面、左のみのものは外面を示した。

7　遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

法量の単位は、cm、gである。（）が付されるものは推定値、現存値を表す。

胎土は、土器に含まれる鉱物などを以下の記号で示した。

A：白色粒子　　B：黒色粒子　　C：赤色粒子　　D：褐色粒子　　E：赤褐色粒子

F：白色針状物質　　G：長石　　H：石英　　I：白雲母　　J：黒雲母

K：角閃石　　L：片岩　　M：砂粒　　N：礫

8　写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

9　土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖36版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、日本色研事業株式会社発行　2014）を参考にした。

目　次

序
例　言
凡　例
目　次

Ⅰ　発掘調査の概要……1
　1　調査に至る経過……1
　2　発掘調査・報告書作成の経過……1
　3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織……2
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
Ⅲ　遺跡の概要……8
　1　調査の方法……8
　2　検出された遺構と遺物……8
Ⅳ　遺構と遺物……16
　1　住居跡……16
　2　掘立柱建物跡……49
　3　溝跡……54
　4　土坑……70
　5　ピット……79
　6　遺構外出土遺物……82
Ⅴ　調査のまとめ……88

挿図目次

第1図　埼玉県の地形……3
第2図　周辺遺跡分布図……5
第3図　調査地点位置図……9
第4図　調査区全体図……10
第5図　第1区全測図……11
第6図　第2区全測図……12
第7図　第3区全測図（1）……13
第8図　第3区全測図（2）……14
第9図　第1・2号住居跡……16
第10図　第1号住居跡出土遺物……18
第11図　第2号住居跡出土遺物……18
第12図　第3・4号住居跡……20
第13図　第3号住居跡出土遺物……20
第14図　第5号住居跡・出土遺物……22
第15図　第6号住居跡・出土遺物……22
第16図　第7号住居跡……24
第17図　第8号住居跡（1）……25
第18図　第8号住居跡（2）……26
第19図　第8号住居跡出土遺物（1）……27
第20図　第8号住居跡出土遺物（2）……28
第21図　第9・10号住居跡……30
第22図　第9号住居跡出土遺物（1）……32
第23図　第9号住居跡出土遺物（2）……33
第24図　第10号住居跡出土遺物……33
第25図　第11号住居跡・出土遺物……35
第26図　第12号住居跡……36
第27図　第12号住居跡出土遺物……37
第28図　第13号住居跡……40
第29図　第13号住居跡出土遺物……41
第30図　第14・15号住居跡……42
第31図　第14・15号住居跡出土遺物……43
第32図　第16号住居跡……45
第33図　第16号住居跡出土遺物……46
第34図　第17号住居跡……47

第35図　第17号住居跡出土遺物……48
第36図　第１号掘立柱建物跡……49
第37図　第２号掘立柱建物跡……50
第38図　第３・４号掘立柱建物跡……51
第39図　第５号掘立柱建物跡……53
第40図　第５号掘立柱建物跡出土遺物……54
第41図　第１～３・５・６号溝跡……55
第42図　第４号溝跡……57
第43図　第７～９溝跡……60
第44図　第10～14号溝跡……62
第45図　第15～17号溝跡……63
第46図　溝跡出土遺物（１）……64
第47図　溝跡出土遺物（２）……65
第48図　溝跡出土遺物（３）……66
第49図　溝跡出土遺物（４）……67
第50図　第１～６号土坑……71
第51図　第７～11号土坑……73
第52図　第12～16号土坑……76
第53図　土坑出土遺物（１）……77
第54図　土坑出土遺物（２）……78
第55図　ピット出土遺物……81
第56図　遺構外出土遺物（１）……83
第57図　遺構外出土遺物（２）……84
第58図　遺構外出土遺物（３）……85

挿表目次

第１表　周辺遺跡一覧表……６
第２表　第１号住居跡出土遺物観察表……19
第３表　第２号住居跡出土遺物観察表……19
第４表　第３号住居跡出土遺物観察表……21
第５表　第５号住居跡出土遺物観察表……23
第６表　第６号住居跡出土遺物観察表……23
第７表　第８号住居跡出土遺物観察表……29
第８表　第９号住居跡出土遺物観察表……33
第９表　第10号住居跡出土遺物観察表……33
第10表　第11号住居跡出土遺物観察表……35
第11表　第12号住居跡出土遺物観察表……38
第12表　第13号住居跡出土遺物観察表……41
第13表　第14号住居跡出土遺物観察表……43
第14表　第15号住居跡出土遺物観察表……43
第15表　第16号住居跡出土遺物観察表……46
第16表　第17号住居跡出土遺物観察表……48
第17表　第５号掘立柱建物跡出土遺物観察表‥54
第18表　溝跡出土遺物観察表……68
第19表　土坑出土遺物観察表……78
第20表　ピット計測表……80
第21表　ピット出土遺物観察表……82
第22表　遺構外出土遺物観察表……86

図版目次

図版１　第１区全景（南から）
　　第２区全景（西から）
図版２　第２区全景（西から）
　　第２区全景（東から）
　　第３区全景（東から）
遺構
図版３　第１・２号住居跡
　　第１号住居跡遺物出土状況
　　第３・４号住居跡
　　第３号住居跡遺物出土状況
　　第５号住居跡
　　第６・14号住居跡
　　第７・15号住居跡
　　第８号住居跡

図版４　第８号住居跡カマド
第８号住居跡遺物出土状況
第９号住居跡
第９号住居跡遺物出土状況１
第９号住居跡遺物出土状況２
第10号住居跡
第11号住居跡
第12号住居跡
図版５　第12号住居跡カマド
第12号住居跡遺物出土状況１
第12号住居跡遺物出土状況２
第12号住居跡遺物出土状況３
第13号住居跡
第13号住居跡遺物出土状況
第16号住居跡
第16号住居跡カマド
図版６　第17号住居跡
第17号住居跡カマド
第17号住居跡遺物出土状況
第１号掘立柱建物跡
第２号掘立柱建物跡
第３号掘立柱建物跡
第４号掘立柱建物跡
第５号掘立柱建物跡
図版７　第１号溝跡
第２号溝跡
第３号溝跡
第４号溝跡
図版８　第４号溝跡遺物出土状況１
第４号溝跡遺物出土状況２
第４号溝跡遺物出土状況３
第４号溝跡板敷出土状況（北から）
第４号溝跡板敷出土状況（真上から）
第４号溝跡板敷出土状況（東から）
第５・６号溝跡
図版９　第７号溝跡
第８号溝跡
第８号溝跡遺物出土状況１
第８号溝跡遺物出土状況２
第９号溝跡
図版10　第10号溝跡
第11・12・14号溝跡
第13号溝跡
第15・16号溝跡
図版11　第17号溝跡
第１号土坑
第２号土坑
第３号土坑
第４号土坑
第４号土坑遺物出土状況
第５号土坑
図版12　第５号土坑遺物出土状況
第６号土坑
第７号土坑
第８号土坑
第９号土坑
第10号土坑
第11号土坑
第12号土坑
図版13　第13号土坑
第14号土坑
第15・16号土坑
ピット14～16
ピット154遺物出土状況
72－87グリッド遺物出土状況
82－87グリッド遺物出土状況
作業風景
遺物
土師器（古墳時代初頭～前期）
図版14　第１号住居跡　第10図１・２
第２号住居跡　第11図１・２
第３号住居跡　第13図１・２

第５号住居跡　第14図１
第６号住居跡　第15図１・２
第９号住居跡　第23図26
図版15　第13号住居跡　第29図14・15
第15号住居跡　第31図15－７
第10号土坑　第53図10－１
第12号土坑　第54図12－３
遺構外　第56図２～６

土師器・須恵器（古墳時代後期）

図版16　第２号住居跡　第11図８
第８号住居跡　第19図１～４・11～16
図版17　第８号住居跡　第19図17
第20図18～22・24
第９号住居跡　第22図６～13
図版18　第９号住居跡　第22図14～24
図版19　第10号住居跡　第24図１
第12号住居跡　第27図２～12
図版20　第12号住居跡　第27図13～21
第13号住居跡　第29図１～６
図版21　第13号住居跡　第29図７～12
第14号住居跡　第31図14－１
第15号住居跡　第31図15－１～４
第16号住居跡　第33図７
第４号溝跡　第46図４－２
第47図４－42・42内面・43
図版22　第４号溝跡　第47図４－44
第48図４－45
第６号溝跡　第48図６－１
第７号溝跡　第48図７－１・２
第８号溝跡　第48図８－１～６
図版23　第８号溝跡　第48図８－７
第49図８－８～11
第12号溝跡　第49図12－３
第13号溝跡　第49図13－１
第４号土坑　第53図４－２
第５号土坑　第53図５－１～３
図版24　第８号土坑　第53図８－１
ピット98　第55図２
ピット154　第55図３
遺構外　第57図46～53
第58図54

土師器・須恵器（奈良・平安時代）

図版25　第１号住居跡　第10図８
第10号住居跡　第24図３
第16号住居跡　第33図１～３・５・６・11～13
第17号住居跡　第35図１
図版26　第17号住居跡　第35図２～４
第４号溝跡　第46図４－１・３～10
図版27　第13号溝跡　第49図13－２
第16号溝跡　第49図16－２
第17号溝跡　第49図17－１・２
ピット159　第55図４
遺構外　第56図16・17・21・22
第58図60・61

弥生土器（弥生時代中期）

図版28　第１号住居跡　第10図６・７
第２号住居跡　第11図５～７
第３号住居跡　第13図５
第８号住居跡　第20図27
第12号住居跡　第27図23・24
第15号住居跡　第31図15－５・６
第５号掘立柱建物跡　第40図５～７
遺構外　第56図１

須恵器（古墳時代後期以降）

図版28　第２号住居跡　第11図３・４
第３号住居跡　第13図３・４
第８号住居跡　第20図28
第10号土坑　第53図２・３
第54図４・５
遺構外　第56図７～15
第８号住居跡　第19図５～10・29

第９号住居跡　第22図１～５
第10号住居跡　第24図２
第12号住居跡　第27図１
第16号住居跡　第33図８・９
第17号住居跡　第35図５・６
図版29　第17号住居跡　第35図７～10
第５号掘立柱建物跡　第40図４
第４号溝跡　第46図４－11～23
第47図４－24～41
第５号溝跡　第48図５－１
第12号溝跡　第49図12－１・２
第16号溝跡　第49図16－３
第４号土坑　第53図４－１
第12号土坑　第54図12－１・２
第14号土坑　第54図14－１
第15号土坑　第54図15－１
ピット71　第55図１
遺構外　第56図23～27
第57図28～31
図版30　遺構外　第57図32～45

磨石
図版30　第１号住居跡　第10図９～12
第15号土坑　第54図15－２

砥石
図版30　第８号住居跡　第20図25
第５号土坑　第53図５－５
ピット208　第55図５

管玉
図版30　第13号住居跡　第29図16

編み物石
図版31　第８号住居跡　第20図26
第12号住居跡　第27図22

土錘
図版31　第４号溝跡　第48図４－46
第３号土坑　第53図３－１

獣骨片
図版31　第４号住居跡

形象埴輪
図版31　第４号溝跡　第48図４－47

鉄製品
図版31　第９号住居跡　第23図25

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至る経過

昭和61年６月６日付け61熊都発第148号で、熊谷市長より上之第一土地区画整理事業（現上之土地区画整理事業）地内の埋蔵文化財の所在及び取り扱いに関する照会が提出された。これを受け、熊谷市教育委員会は、事業地内全域に弥生時代から平安時代の遺跡が所在する地域であり、工事に先立って発掘調査を実施する必要がある旨を回答し、平成７年11月13日から平成８年１月19日にかけて遺跡の所在確認調査を実施した。その結果、弥生時代から近世にかけての集落跡及び墓が広範囲に分布することが確認された。この結果を踏まえて、平成８年２月９日付け熊教社発第865号で熊谷市教育委員会教育長から熊谷都市計画事業上之区画整理事業代表者熊谷市長あてに次のように通知した。

事業地内には、埋蔵文化財包蔵地（前中西遺跡、藤之宮遺跡、諏訪木遺跡、箱田氏館跡、上之古墳群）が所在する。当該地は現状保存するか、または埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい。やむを得ず埋蔵文化財に影響を及ぼす場合は、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること、なお、発掘調査の実施については、教育委員会と協議すること。

その後、保存について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。文化財保護法第94条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知は、代表者熊谷市長より平成25年４月18日付けで提出された。発掘調査は、平成25年５月から熊谷市教育委員会により実施された。発掘調査に関わる熊谷市教育委員会及び埼玉県教育委員会からの通知は、以下のとおりである。

平成25年５月16日付け熊教社発第1075号・平成25年５月15日付け教生文第４－76号

2　発掘調査・報告書作成の経過

（1）　発掘調査

発掘調査は、調査区が３つに分かれることから西側を第１区、中央を第２区、東側を第３区とした。調査期間は、平成25年５月13日から９月20日までである。調査面積は、第１区が120㎡、第２区が380㎡、第３区が600㎡の計1,100㎡である。

調査は、第１区と第２区から着手した。まず重機で表土を掘削した後、作業員を導入して遺構確認作業を行った。そして、遺構の発掘、土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行い、これらの作業が終了した７月初旬に重機による埋め戻しを行った。第３区の表土掘削は、７月中旬に行い、以後は第１・２区と同様の作業を順次行った。そして、９月中旬に埋め戻しを行い、現場におけるすべての作業を終了した。

（2）　整理・報告書作成

整理・報告書作成作業は、令和２年４月から令和３年３月まで実施した。作業は、４月から８月中旬まで遺物の洗浄、注記、接合、復元作業などを行い、併行して遺構の図面整理を行った。８月下旬から

11月下旬までは、遺物の実測・拓本・トレース及び遺構のデジタルトレースを行い、12月上旬に遺構・遺物の版組を作成した。12月中旬から翌年１月中旬までは、遺物の写真撮影、写真図版の割付け、原稿執筆、編集作業を行った。そして、１月末に印刷業者選定の後、印刷に入り、数回の校正を行い、３月中旬に報告書を刊行した。

3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者　熊谷市教育委員会

（1）　発掘調査

教育長	野原　晃
教育次長	鯨井　勝
社会教育課長	岩上　精純
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	根岸　敏彦
社会教育課副課長兼文化財保護係長	森田　安彦
主幹	吉野　健
文化財保護係主査	杉浦　朗子
主査	松田　哲
主任	蔵持　俊輔
主任	山下　祐樹
主任	腰塚　博隆
発掘調査員	原野　真祐

（2）　整理・報告書作成事業

教育長	野原　晃
教育次長	田島　斉
社会教育課長	三友　孝二
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	吉野　健
社会教育課主幹兼文化財保護係長	松田　哲
社会教育課文化財保護係主査	星　祥子
主査	小島　洋一
主任	山下　祐樹
主任	腰塚　博隆
主任	新井　端
主事	山川愛希子
主事	山川　守男
主事	大野美知子
発掘調査員	磯崎　一

Ⅱ　遺跡の立地と環境

熊谷市は、埼玉県北部に位置する総面積159.82㎢の市であり、県北最大の人口を有する。市の北側には利根川、南側には荒川がそれぞれ西から南東方向に流れており、両河川が最も近接する地域にある。地形的には、西側に櫛挽台地、荒川を挟んで南側には江南台地、北側及び東側には妻沼低地が広がっているが、市の大半は妻沼低地上にある（第１図）。

櫛挽台地は、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称であり、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東はJR高崎線籠原駅から北へ約２kmの西別府付近にまで延びている。標高は約36 ～ 54mを測り、妻沼低地に向って緩やかに下る。櫛挽台地の東側には、沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新期荒川扇状地が広がる。新期荒川扇状地は、熊谷市の南西に位置する深谷市菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。

今回報告する藤之宮遺跡は、その新期荒川扇状地の扇端部、標高24m前後に立地している。遺跡は、熊谷市上之に所在し、JR高崎線熊谷駅からは北東へ約２km、荒川からは北へ約３km、利根川からは南へ約６kmの距離にある。

次に藤之宮遺跡周辺の歴史的環境について概観する（第２図）。

本遺跡周辺では、縄文時代後期から遺跡が確認されている。東に隣接する諏訪木遺跡（２）では、過去に行われた熊谷市遺跡調査会による調査（熊谷市遺跡調査会2001）、埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002･2007）において後期中葉の加曽利Ｂ式期から晩期中葉の安行３ｄ式までの遺構･遺物が確認されている。特に後者の調査では、遺構に伴って大量の遺物が出土し、集落跡の存在が明らかとなっている。また、西約１kmに所在する中西遺跡（４）でも、後期中葉の加曽利Ｂ式期から晩期中葉の安行３ｄ式までの遺構・遺物が確認されており、北東約２kmに所在する古宮遺跡（11）では、晩期前葉から中葉までに限定された遺物包含層が確認されている。当段階の遺跡は、こ

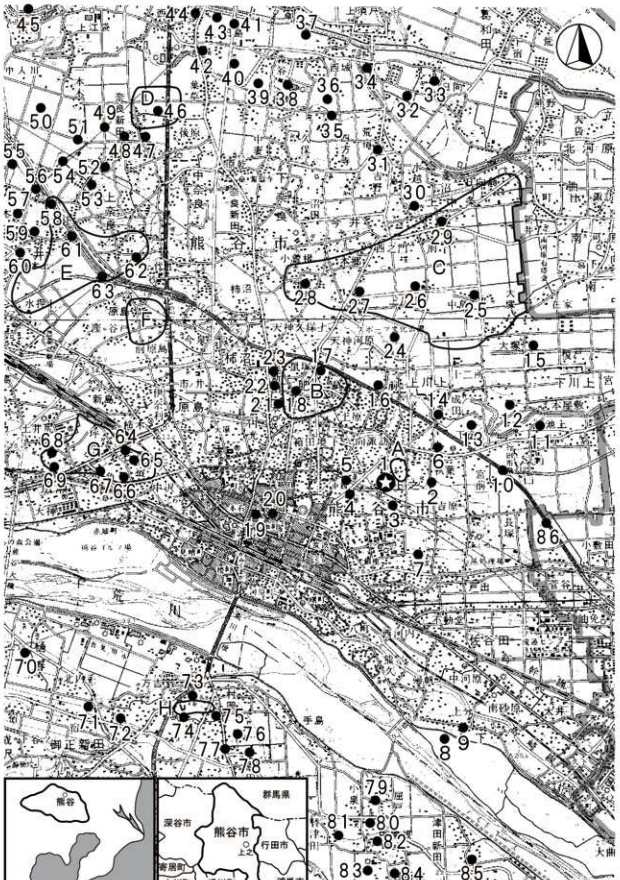
第１図　埼玉県の地形

の他にも市北部の妻沼低地上に西城切通遺跡（37）、場違ヶ谷戸遺跡（42）などがある。晩期中葉以降は、遺跡が途絶えてしまうが、櫛挽台地北端に立地する深谷市上敷免遺跡（地図未掲載）では、晩期最終末の浮線文土器が多数検出されている。遺構からの検出ではなかったが、次代へのつながりがみてとれる資料である。

弥生時代は、まず初期段階の前期末から中期前半は、本遺跡の平成14年度に実施した調査で土器片が若干検出されているが、遺構は確認されていない。当段階の遺跡は、櫛挽台地直下、ないし妻沼低地北部の低地上に集中し、横間栗遺跡、飯塚遺跡、飯塚南遺跡、先の深谷市上敷免遺跡（いずれも地図未掲載）などで再葬墓が確認されているにすぎない。なお、上敷免遺跡では包含層からであるが、県内初の遠賀川式土器の壺の胴部片が出土している。

中期中葉になると、これまでの状況と一変して集落が本遺跡周辺に集中して出現する。東日本でも最古段階の環濠集落である池上遺跡（10）、その墓域とされ、最古段階の方形周溝墓が検出された行田市小敷田遺跡（86）、後期前半まで長期間続く前中西遺跡（３）などが出現し、本格的な農耕集落が展開される。中期後半は、前段階に続いて営まれる前中西遺跡の他に諏訪木遺跡や北島遺跡（24）などが出現する。特に前中西遺跡は、これまでの成果から当地域における拠点集落であることが判明しており、中期後半以降、長野県北部を中心とする栗林式土器文化圏の影響を強く受けるようになり、長野県外では初の事例となった礫床木棺墓や大阪湾型銅戈を忠実に模倣した全国初の石戈などが確認されている。北島遺跡では、大規模集落の他に水田や水路、堰などの生産域も確認されており、前中西遺跡とともに東日本屈指の遺跡として注目されている。後期以降については、遺跡数が急激に減少し、前中西遺跡以外確認例がなく、遺跡は台地や丘陵へと移っていく傾向にある。

古墳時代になると、再度低地上への進出が活発化し、前期の遺跡は、近年確認例が増加している。本遺跡以外にも周辺では、前代に続いて前中西遺跡、北島遺跡で集落跡が確認されており、方形周溝墓による墓域も確認されている。また、中西遺跡では、方形周溝墓の他に前方後方型周溝墓も確認されている。埼玉県埋蔵文化財調査事業団により行われた諏訪木遺跡の調査では、河川跡から大量の木製品が出土しており、注目すべきは板倉造り建物の「樋部倉剔」と呼ばれる特殊な加工が施された壁板材が検出されたことが挙げられる（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2008）。中条遺跡（29）では、木製の農具が検出されており、行田市小敷田遺跡では畿内や東海地方の外来系土器が多数出土している。この他にも古墳時代前期は、たくさん確認例があるが、遺跡は主に利根川流域沿いの自然堤防上に分布する傾向にある。中期は確認例が少ないが、前段階に続いて前中西遺跡や中条遺跡などで集落跡が確認されている。また、５世紀末頃の鎧塚古墳や女塚１号墳（C：中条古墳群）、市指定史跡の横塚山古墳（D：奈良古墳群）などの古墳も築造されている。鎧塚古墳は、全長43.8mの帆立貝式前方後円墳であり、墓前祭祀跡２箇所から須恵器高坏型器台（県指定文化財）が出土している。女塚１号墳も帆立貝式前方後円墳であり、全長46mを測る。二重周溝を持ち、盾持武人埴輪などの人物埴輪が出土している。横塚山古墳はB種横刷毛の埴輪を持つ帆立貝式前方後円墳であるが、後円部は一部欠損している。後期になると、遺跡数が爆発的に増加する。集落は規模が大小あるが、多数営まれる。そして、これらは奈良・平安時代へと継続するものが多い。古墳は群として形成され、多数の古墳群が台地及び低地上に築造され始める。低地上では、本遺跡北東に隣接する上之古墳群（A）のほかに、肥塚古墳群（B）、中条古墳群、奈良



第２図　周辺遺跡分布図

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代
	橿原市	
1	藤之宮遺跡	弥生中、古墳、奈良・平安、中世
2	源訪木遺跡	縄文後・晩、弥生中・後、古墳、奈良・平安、中・近世
3	前中西遺跡	弥生中・後、古墳、奈良・平安、中・近世
4	中西遺跡	縄文後・晩、弥生中、古墳前
5	箱田氏館跡	平安末～中世
6	成田氏館跡	中世
7	平戸遺跡	弥生中、古墳後、平安、中・近世
8	久下氏館跡	中世
9	市田氏館跡	中世
10	池上遺跡	弥生中、古墳、平安
11	古宮遺跡	縄文晩、弥生中、古墳前、奈良・平安、中・近世
12	上河原遺跡	奈良・平安、中・近世
13	宮の裏遺跡	古墳後
14	成田遺跡	古墳後
15	中条条里遺跡	古墳前・中、奈良・平安
16	河上氏館跡	中世
17	八幡山遺跡	古墳
18	出口下遺跡	古墳後
19	熊谷氏館跡	中世
20	宮町遺跡	奈良・平安、中世
21	肥塚館跡	中世
22	出口上遺跡	奈良・平安、中・近世
23	肥塚中島遺跡	奈良・平安、近世
24	北島遺跡	弥生中、古墳、奈良・平安、中世
25	中島遺跡	古墳後、奈良・平安
26	女塚遺跡	古墳後、奈良・平安、中世
27	赤城遺跡	古墳、奈良・平安
28	東浦遺跡	古墳前、平安
29	中条遺跡	古墳、奈良・平安、中世
30	中条氏館跡	中世
31	光原敬遺跡	古墳後、奈良、中・近世
32	先栽場遺跡	古墳後、奈良
33	八幡岡遺跡	古墳後、奈良
34	東城館跡	平安
35	民安寺遺跡	古墳後、奈良・平安
36	西城館跡	平安
37	西城切通遺跡	縄文後・晩
38	鵜森遺跡	弥生後、古墳後、奈良・平安
39	森谷遺跡	古墳後、奈良・平安
40	鷺ヶ谷戸東遺跡	古墳後、奈良・平安
41	山ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
42	場違ヶ谷戸遺跡	縄文後
43	宮前遺跡	奈良・平安
44	実盛館	平安
45	道ヶ谷戸条里遺跡	縄文後、奈良
46	横塚遺跡	古墳前、平安
47	東通遺跡	古墳後
48	西通遺跡	古墳後
49	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安
50	別府条里遺跡	奈良・平安
51	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安、中世、近世
52	土用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
53	奈良氏館跡	平安末～中世
54	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安
55	寺東遺跡	縄文前～後
56	稲荷東遺跡	古墳後、奈良・平安
57	玉井陣屋跡	平安末～中世
58	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
59	水押下遺跡	古墳後
60	稲荷木上遺跡	古墳後
61	下河原中遺跡	奈良・平安
62	本代遺跡	古墳後、近世
63	下河原上遺跡	近世
64	天神前遺跡	古墳中・後、中世
65	兵部裏屋敷跡	中世
66	御蔵場跡	近世
67	田角遺跡	平安
68	高根遺跡	縄文、古墳後、平安、中・近世
69	不二ノ腰遺跡	奈良・平安
70	宮前遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
71	宿遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
72	万古西浦遺跡	縄文中、古墳、平安、近世
73	村岡館跡	平安末
74	村岡北西原遺跡	平安
75	北西原遺跡	奈良・平安
76	塚本遺跡	古墳、奈良・平安
77	西浦遺跡	奈良・平安
78	腰廻遺跡	奈良・平安
79	北方遺跡	奈良・平安
80	宮前遺跡	奈良・平安
81	西浦町遺跡	奈良・平安
82	宮前町遺跡	奈良・平安
83	宮町遺跡	奈良・平安
84	仲町遺跡	奈良・平安
85	旭町遺跡	奈良・平安
	行田市	
86	小敷田遺跡	弥生中、古墳、奈良・平安
	古墳群	
	橿原市	
A	上之古墳群	古墳後～末
B	肥塚古墳群	古墳後～末
C	中条古墳群	古墳中期末～後
D	奈良古墳群	古墳中期後～末
E	玉井古墳群	古墳後
F	原島古墳群	古墳後
G	石原古墳群	古墳後
H	村岡古墳群	古墳後

古墳群（D）、玉井古墳群（E）、原島古墳群（F）、石原古墳群（G）などがある。これらは概ね６世紀から７世紀末、ないし８世紀初頭にかけて築造された古墳群である。市内の古墳群で特筆すべきことは、利根川流域に近い古墳群（中条古墳群など）では埋葬施設に角閃石安山岩、荒川流域に近い古墳群では川原石を使用しており、肥塚古墳群ではその両者が混在することが挙げられる。

奈良・平安時代は、前述のとおり、古墳時代後期以降引き続き営まれる遺跡が多い。規模は大小あるが、概ね大規模なものが多くみられ、通常の集落とは思えない遺跡がいくつか存在する。その筆頭が北島遺跡である。第19地点の調査では、二重の堀が巡る台形区画内から建物跡が検出されており、他地点でも軸の揃った掘立柱建物跡が多数確認されている。また、遺物では「篦」の文字が刻まれた緑釉陶器

をはじめ、多くの施釉陶器が検出されており、有力者層を想定させる遺物が数多く出土している。北島遺跡以外では、池上遺跡で整然と配置された9世紀代の大形掘立柱建物跡が確認されたこと、小敷田遺跡では「出挙」の文字が書かれた木簡が検出されたこと、諏訪木遺跡では区画溝内に四面庇の付いた大形掘立建物跡や軸の揃った掘立柱建物跡が多数検出されたことや旧河川跡で土器や木製品、玉類などを使った水辺の祭祀が行われたことなどが挙げられ、官衙を彷彿とさせる遺跡が集中する。

集落以外では、北島遺跡や池上遺跡の東側に中条条里遺跡（15）、行田市南河原条里遺跡（地図未掲載）などの条里遺跡が広がっている。ほぼ東西南北に区割されており、現在もその痕跡が残る。

平安時代末から中世にかけては、武蔵七党やその他在地武士団が台頭してくる時期であり、市内でも館跡が多数みられる。成田氏館跡（6）、久下氏館跡（8）、市田氏館跡（9）、河上氏館跡（16）、熊谷氏館跡（19）、肥塚館跡（21）、中条氏館跡（30）などがある。このうち、本遺跡に最も近い成田氏館跡は、平安時代末の成田助高から親泰が15世紀後半に行田市忍城を構えるまでの居館とされており、隣接する諏訪木遺跡で行われた過去の調査では、成田氏関連と思われる遺構や遺物が相次いで確認されている。県事業団による平成13年度の調査では、館跡から南に約300mの所で中世の居館と思われる変形方形区画が検出されており、『新編武蔵風土記稿』に成田氏の一族がこの地に居を構えたという記述と合わせて成田氏に関連する館跡との見解が示されている（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002）。同じく県事業団による平成14年度の調査では、井戸枠に器高70cmを超える常滑大甕を使用した井戸跡が確認されており、常滑大甕は13世紀中頃のものと推定されている（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2008）。そして、熊谷市教育委員会による平成20年度の調査では、埴輪を持つ6世紀代の古墳の周溝が埋没した後に掘削された長方形の土坑から大量の埋蔵銭が検出されている。埋蔵銭は、15世紀前半を上限とし、枚数が膨大であることから成田氏に関連するものであることは間違いない。

中世段階については、諏訪木遺跡において成田氏を想定させる遺構群や出土遺物などからその一端が明らかになりつつあるが、全体像を把握するには、まだ資料が不足している。また、近世段階についても中世と同様であり、諏訪木遺跡をはじめとしていくつか確認例があるが、不明な点が多いというのが実状である。

Ⅲ　遺跡の概要

1　調査の方法

今回報告する藤之宮遺跡の調査は、平成25年度に実施された。本報告地点は、調査箇所が東西に長く、3つに分かれることから西側の調査区を第1区、中央を第2区、東側を第3区とした。面積は、第1区が120㎡、第2区が380㎡、第3区が600㎡の計1,100㎡である。なお、第2区は、78・79－86～88グリッド及び79・80－86～88グリッド付近に埋設管があったため、調査区が3つに分断されている。本報告地点の東側には、平成14年度に発掘調査を行い、平成19年度に報告を行った調査地点が隣接する。

調査は、すべての調査区において、まず遺構確認面まで重機で掘削し、その後人力による手掘り作業を行った。手掘り作業終了後は、遺構ごとに実測、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行った。実測作業にあたっては、あらかじめ区画整理地内全体を網羅するように設定された一辺5mのグリッド方式に従い、交点を基準に水糸で1m間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。

今回報告する調査地点のグリッドは、東西が67から87まで、南北は85から89までが該当する。区画整理地内全体のグリッド図については、過去に刊行した同区画整理地内に所在する前中西遺跡の報告（熊谷市教育委員会2002・2003）に記載されていることから、本報告では省略した。

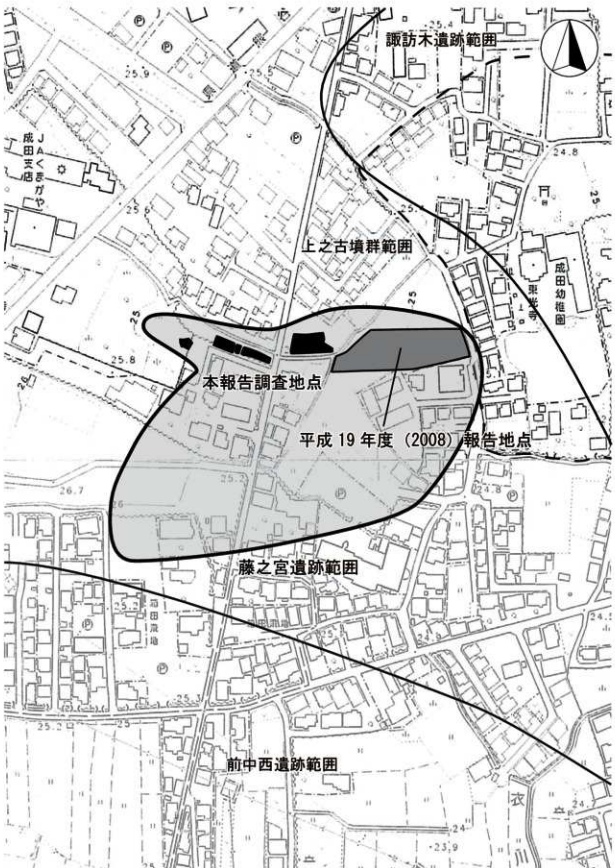
2　検出された遺構と遺物

今回報告する調査地点は、遺跡範囲北西部にあたる（第3図）。検出された遺構は、住居跡17軒、掘立柱建物跡5棟、溝跡17条、土坑16基、ピット224基である（第4～8図）。各調査区の遺構検出数は、第1区が溝跡1条、ピット3基、第2区は掘立柱建物跡2棟、溝跡13条、土坑9基、ピット54基、第3区は住居跡17軒、掘立柱建物跡3棟、溝跡3条、土坑7基、ピット167基である。主に第2区は溝跡、第3区は住居跡が密集しており、他の遺構も含め重複が激しい。

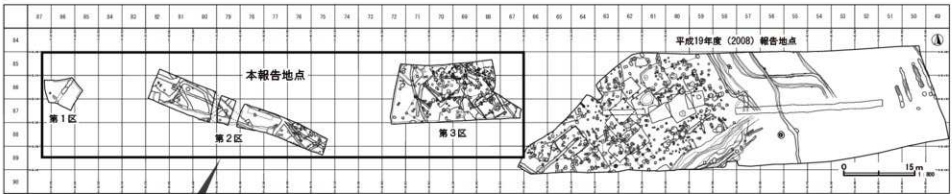
住居跡は、17軒検出された。時期は、古墳時代初頭～前期が7軒、古墳時代後期～末が8軒、奈良・平安時代が2軒である。すべて第3区からの検出である。住居跡同士での重複が激しいが、残存状態が比較的良好なものが多い。全形を検出したものは少ないが、平面プランは古墳時代初頭が隅丸長方形、前期以降は方形、ないし長方形を呈する。検出された住居跡で最も大きいのは、方形を呈する古墳時代後期の8号である。出土遺物は、古墳時代初頭～前期の土師器、石器、古墳時代後期以降の須恵器・土師器・灰釉陶器、鉄製品、石製品、玉類などがあり、流れ込みの弥生土器もみられた。

掘立柱建物跡は、第2区で2棟（1・2号）、第3区で3棟（3～5号）の計5棟が検出された。時期は、古墳時代後期が4棟（1～4号）、平安時代が1棟（5号）である。古墳時代後期の建物跡は、重複し、軸が異なることから時期差を持つ。2号のみ総柱建物跡、その他は側柱建物跡である。また、側柱建物跡には、布掘り工法によるもの（4号）や大型で南に庇を持つもの（5号）がみられた。出土遺物は少ないが、図示不可能なものも含め、弥生土器、古墳時代後期の土師器、奈良時代の須恵器があるが、そのほとんどは流れ込みと思われる。

溝跡は、17条検出された。時期を具体的に特定できるものは少ないが、古墳時代後期が11条、奈良・平安時代が6条である。全調査区から検出されたが、第2区からの検出が多く、かつ重複しているもの

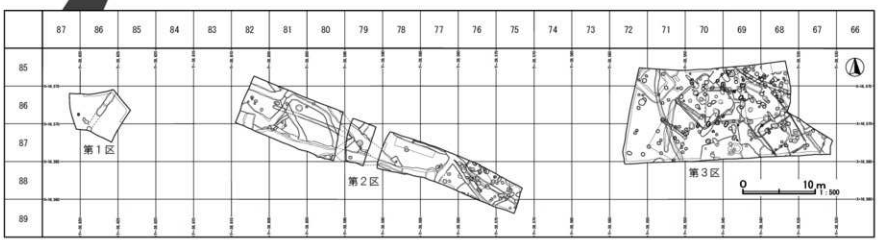

諏訪木遺跡範囲
上之古墳群範囲
本報告調査地点
平成 19 年度（2008）報告地点
藤之宮遺跡範囲
前中西遺跡範囲
成田幼稚園
東光寺
JAくまがや
成田支店

第３図　調査地点位置図

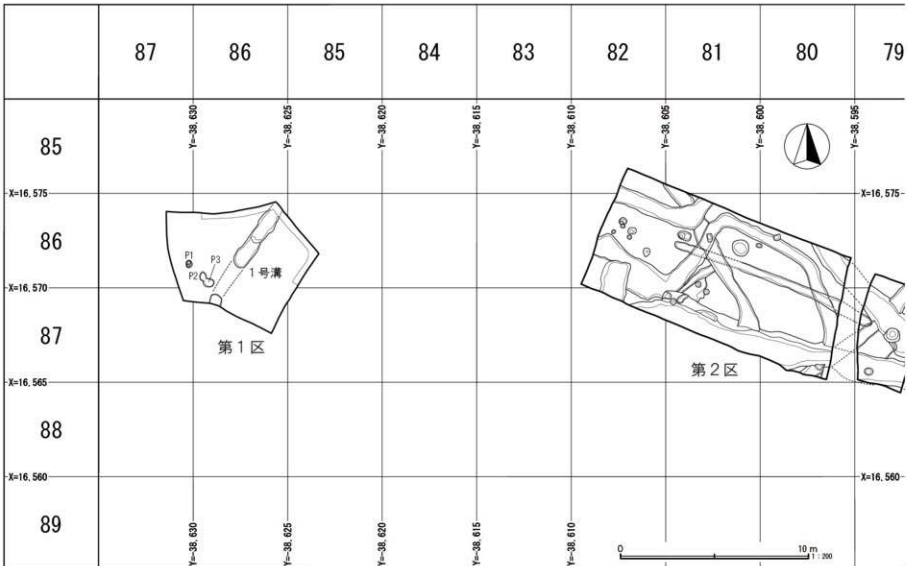


平成 19 年度（2008）報告地点検出遺構

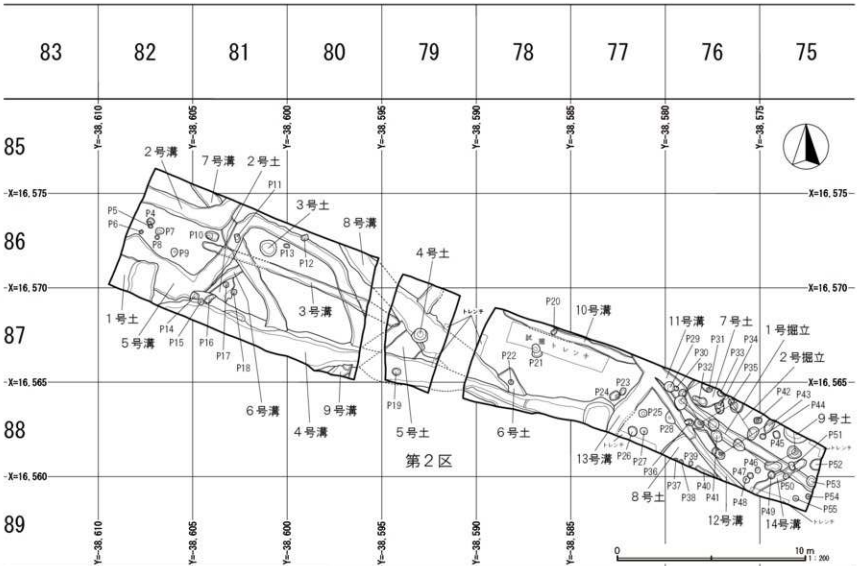
弥生時代中期後半　方形周溝墓１基
弥生時代末～古墳時代初頭　住居跡２軒
古墳時代前期　住居跡７軒、溝跡１条
古墳時代中期～後期　住居跡１軒
古墳時代後期～末　住居跡６軒、掘立柱建物跡３棟、溝跡 11 条、土坑 11 基
奈良・平安時代　住居跡５軒、掘立柱建物跡３棟、溝跡６条、土坑５基、井戸跡３基
中世　火葬跡２基
時期不明　溝跡１条、土坑 13 基、井戸跡１基、ピット群



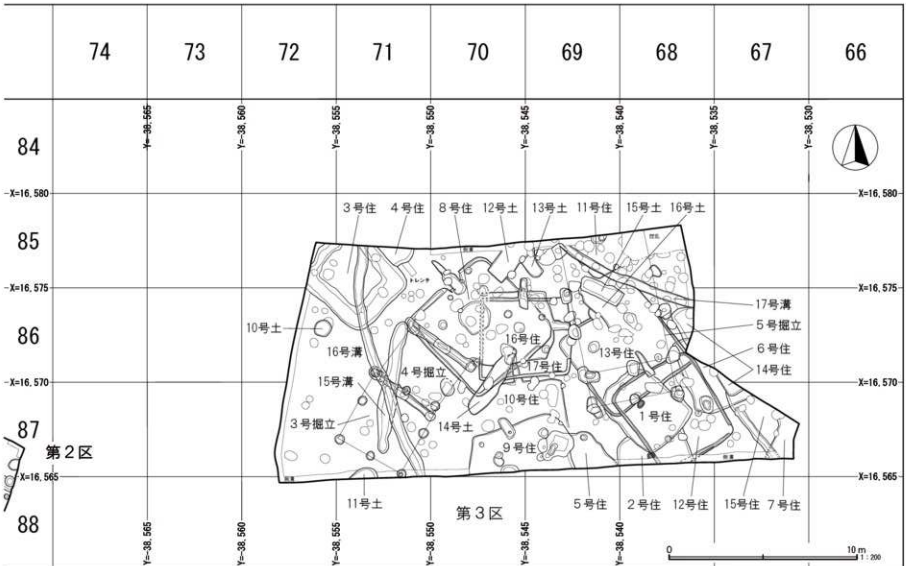
第４図　調査区全体図


87
86
85
84
83
82
81
80
79
85
86
87
88
89
X=16,575
X=16,570
X=16,565
X=16,560
Y=-38,630
Y=-38,625
Y=-38,620
Y=-38,615
Y=-38,610
Y=-38,605
Y=-38,600
Y=-38,595
P1
P2
P3
1号溝
第1区
第2区
0
10 m
1:200

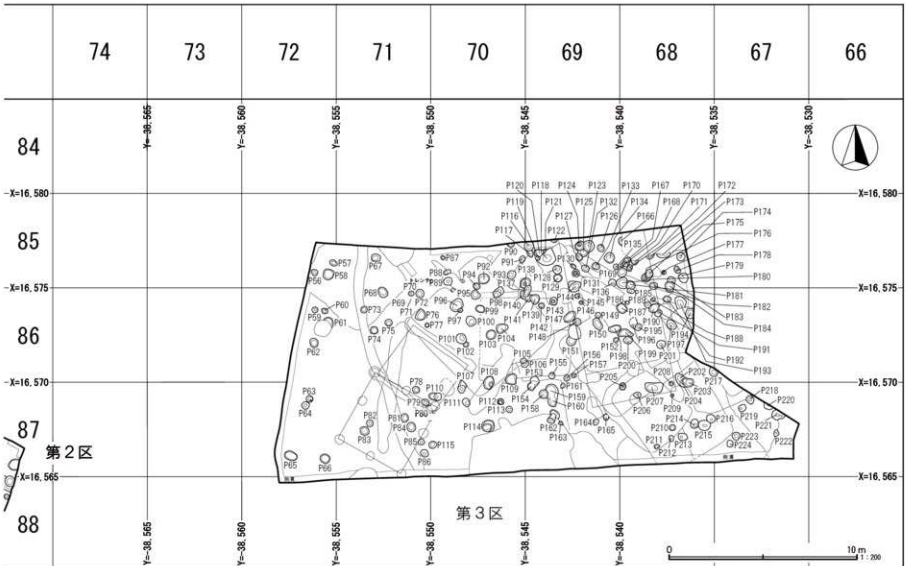
第5図　第1区全測図


83
82
81
80
79
78
77
76
75
85
86
87
88
89
X=16,575
X=16,570
X=16,565
X=16,560
Y=-38,610
Y=-38,605
Y=-38,600
Y=-38,595
Y=-38,590
Y=-38,585
Y=-38,580
Y=-38,575
2号溝
7号溝
2号土
3号土
8号溝
4号土
1号土
5号溝
3号溝
6号溝
9号溝
4号溝
5号土
6号土
10号溝
11号溝
7号土
1号掘立
2号掘立
9号土
13号溝
8号土
12号溝
14号溝
第２区
トレンチ
0
10 m
1：200

第６図　第２区全測図


74
73
72
71
70
69
68
67
66
84
85
86
87
88
X=16,580
X=16,575
X=16,570
X=16,565
Y=-38,565
Y=-38,560
Y=-38,555
Y=-38,550
Y=-38,545
Y=-38,540
Y=-38,535
Y=-38,530
第２区
第３区
3号住
4号住
8号住
12号土
13号土
11号住
15号土
16号土
17号溝
5号掘立
6号住
14号住
10号土
16号溝
16号住
13号住
17号住
4号掘立
15号溝
10号住
1号住
3号掘立
14号土
9号住
11号土
5号住
2号住
12号住
15号住
7号住
0
10m
1:200

第７図　第３区全測図（１）


74
73
72
71
70
69
68
67
66
84
85
86
87
88
X=16,580
X=16,575
X=16,570
X=16,565
Y=-38,565
Y=-38,560
Y=-38,555
Y=-38,550
Y=-38,545
Y=-38,540
Y=-38,535
Y=-38,530
第２区
第３区
0
10 m
1 : 200

第8図　第3区全測図（2）

が多い。北西から南東方向、北東から南西方向、南北方向に走るものがあり、蛇行するものもみられたが、北西から南東方向に走るものが多い。出土遺物は、古墳時代後期以降の須恵器・土師器、土製品、形象埴輪などがある。

土坑は、16基検出された。時期は、古墳時代前期が１基、古墳時代後期が７基、奈良･平安時代が２基、不明が６基であり、古墳時代後期が多い。第１区以外の調査区ほぼ全面に点在するが、第２区での検出が多い。平面プランは、円・楕円・長方形を呈する。出土遺物は、古墳時代前期の土師器、石器、古墳時代後期以降の須恵器・土師器、石製品がある。

ピットは、224基と多数検出された。各調査区全面に分布するが、第２区75～77－88・89グリッド、第３区67～70－85～87グリッドに集中する。これらのピットの中には、柱筋を捉えきれなかった掘立柱建物跡や柵列跡になる可能性もある。時期を特定できるものは少ないが、概ね確認された遺構の年代幅に収まると思われる。出土遺物は少ないが、図示不可能なものも含め、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期以降の土師器、須恵器、石製品がある。

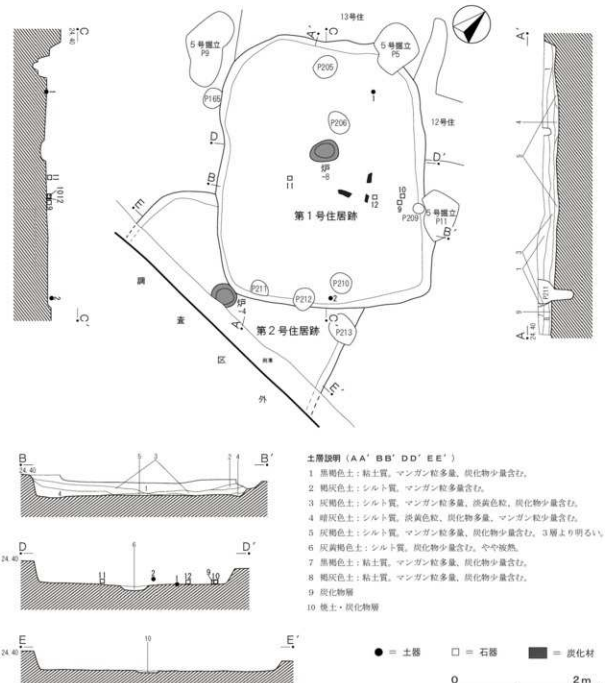
遺構外出土遺物は、弥生時代中期後半の弥生土器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期以降の須恵器・土師器、近世の磁器・陶器・瓦質土器がある。本報告で遺構が確認されていない弥生時代と近世を除くと、検出された遺構の時代・時期と合致する。最も多く検出されたのは、古墳時代後期以降の遺物であり、出土位置は第３区からの検出が多い。

Ⅳ　遺構と遺物

1　住居跡

第１号住居跡（第９図）

第３区68・69－86・87グリッドに位置する。北側で第12・13号住居跡と重複するが、上位をやや切られていただけであり、残存状態は比較的良好であった。北東隅と東壁中央よりやや南側を第５号掘立柱建物跡に切られており、南西部で第２号住居跡を切っている。また、所々で単独ピットと重複するが、すべてのピットが本住居跡より新しい。



第９図　第１・２号住居跡

規模は、長軸4.28m、短軸3.28mを測る。平面プランは、隅丸長方形を呈する。主軸方向は、N－46°－Wを指す。確認面からの深さは、最大0.36mを測る。床面は、やや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。床面中央からやや南東側では、建築材と思われる炭化材が3箇所確認された。覆土は、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。上層のみ粘土質であったが、以下はシルト質であった。掘り方はみられなかった。

炉跡は、床面中央からやや北寄りに設けられていた。長軸0.46m、短軸0.33m、深さ0.08mを測り、平面プランはいびつな楕円形を呈する。覆土は灰黄褐色土による単一層であり、被熱していた。

壁溝・ピット・貯蔵穴は、確認されなかった。

出土遺物（第10図）は、土師器鉢（1・3～5）、台付甕（2）、敲石兼磨石（9）磨石（10～12）がある。1は北東部、2は南壁沿い中央、9～12は炉跡南側の床面直上、3～5は1が出土した箇所付近の覆土から出土した。この他にも流れ込みで弥生時代中期後半の壺（6）、甕（7）、平安時代の須恵器高台付椀（8）も覆土から出土した。

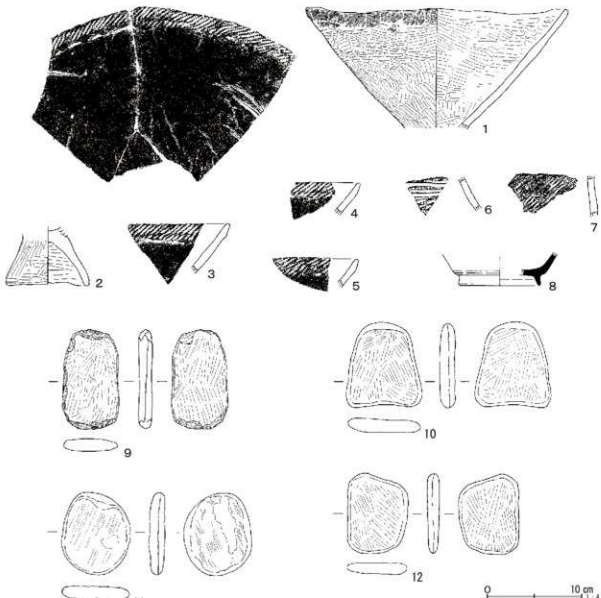
1・3～5は、同一個体の土師器鉢である。当初は壺の口縁部から頸部にかけての部位と思われたが、下端がすぼまり径が小さいこと、また図では分かりづらいが、やや肥厚していたことから鉢と判断した。1は底部を欠く。3～5は口縁部片である。口縁部から体部がやや内湾しながら立ち上がる。口縁部がやや肥厚しており、外面にＬＲ単節縄文が施文されている。内面は所々摩耗していたが、縄文施文部以下の外面と内面に丁寧なヘラミガキが施されている。外面の縄文施文部とヘラミガキ調整の境に輪積痕が一部残る。2は、土師器台付甕の接合部から台部にかけての部位である。台部はやや内湾している。調整は、内外面ともにヘラミガキであるが、外面は丁寧であるのに対し、内面は粗く施されている。9～12は磨石であるが、9は周縁に敲打痕がみられたことから敲石も兼ねる。いずれも扁平であり、ほぼ同一の法量を測るが、平面形態は様々である。すべて完形である。11のみ片岩、その他は砂岩である。6・7は、弥生土器である。6は壺の肩部、7は甕の頸部から胴上部にかけの破片である。6は、外面にＬＲ単節縄文地に2本一単位の平行沈線が二条巡る。7は、全面にＬＲ単節縄文が施文されている。内面の調整は、いずれも斜・横位のヘラナデである。8は、須恵器高台付椀の体部から高台部までの部位である。体部が直線的に開き、高台部はハの字を呈する。調整は、内外面ともにロクロナデであり、底面は大半を欠くため定かではないが、高台貼付後、全面ヘラ削りが施されていると思われる。酸化焔焼成であり、橙色を呈する。産地は不明である。

本住居跡の時期は、古墳時代初頭と思われる。

第2号住居跡（第9図）

第3区の68－69－87グリッドに位置する。北側半分の検出であり、南側半分は調査区外にある。東側で第12号住居跡と重複するが、上位をやや切られていただけであり、残存状態は比較的良好であった。北側中央から北東隅にかけて第1号住居跡に切られている。また、西側では第5号住居跡が隣接しており、直接重複しないが、出土遺物の内容から本住居跡が古い。北東隅付近では単独ピットと重複するが、すべてのピットが本住居跡より新しい。

正確な規模は不明であるが、検出された南北が1.5～1.85m、東西は3.28mを測る。平面プランは、隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方向は、N－14°－Wを指す。確認面からの深さは、最大0.29mを測る。



第10図　第１号住居跡出土遺物

第11図　第２号住居跡出土遺物

床面は、やや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。覆土は、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。掘り方はみられなかった。

炉跡は、床面中央よりやや北側に位置すると思われる。南北の立ち上がりを欠くが、径0.25m前後の円形を呈すると思われる。深さは0.04mと浅く、覆土に焼土と炭化物を含んでいた。

第２表　第１号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	土師器　鉢	(27.8)	(12.8)	－	ABCHIKN	にぶい黄橙色	B	口～体30%	内面所々摩耗。№３～５同一個体。
2	土師器台付甕	－	(6.2)	8.8	ABDHN	にぶい黄橙色	B	提～台100%	
3	土師器　鉢	－	－	－	ABCDHIKN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	№１・４・５同一個体。
4	土師器　鉢	－	－	－	ABCDHIKN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	№１・３・５同一個体。
5	土師器　鉢	－	－	－	ABCDHIKN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	№１・３・４同一個体。
6	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIK	暗褐色	B	肩部片	中期後。
7	弥生土器　甕	－	－	－	ABIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	中期後。
8	須恵器高台椀	－	(3.5)	(8.7)	ABCHK	橙色	B	体～高20%	平安。産地不明。酸化焔焼成。
9	磨石・敲石	最大長10.5cm、最大幅6.0cm、最大厚2.0cm。重量151.0g。完形。砂岩。							
10	磨　石	最大長9.0cm、最大幅8.1cm、最大厚1.65cm。重量167.0g。完形。砂岩。							
11	磨　石	最大長8.7cm、最大幅7.2cm、最大厚1.7cm。重量157.0g。完形。片岩。							
12	磨　石	最大長8.5cm、最大幅6.3cm、最大厚1.3cm。重量109.0g。完形。砂岩。							

第３表　第２号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	土師器　壺	－	(2.15)	3.5	ABEHIKN	黒褐色	B	胴～底100%	
2	土師器台付甕	－	(4.6)	－	ABHIKN	暗赤褐色	B	提～台50%	
3	土師器台付甕	－	－	－	ABDEHN	にぶい赤褐色	B	口～頸部片	
4	土師器台付甕	－	－	－	ABDHKN	褐色	B	胴下部片	
5	弥生土器　壺	－	－	－	ABHI	灰黄褐色	B	肩部片	中期後。
6	弥生土器　壺	－	－	－	ABIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	中期後。内外面摩耗顕著。
7	弥生土器　壺	－	－	－	ABDIKN	浅黄色	B	胴中段片	中期後。
8	土師器　坏	(13.6)	(3.55)	－	ABCHIKN	橙色	B	20%	古墳後。

壁溝・ピット・貯蔵穴は、確認されなかった。

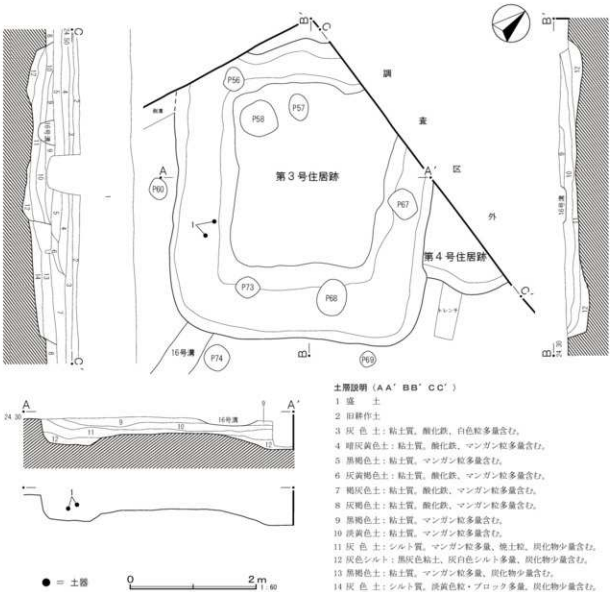
出土遺物（第11図）は、土師器壺（１）、台付甕（２～４）がある。この他にも流れ込みで弥生時代中期後半の壺（５～７）、古墳時代後期の土師器坏（８）も出土した。すべて覆土からの出土である。

１は、土師器小型壺の胴下部から底部までの部位である。底部が円柱状を呈し、突出している。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。２～４は、土師器台付甕である。２は接合部から台部までの部位であるが、裾部を欠く。３は口縁部から頸部まで、４は胴下部の破片である。２は、台部が裾に向かってやや外反する。器壁が薄い。調整は、内外面ともに粗いヘラミガキである。３は断面形がくの字状を呈し、口唇部に刻みが施されている。調整は、口縁部外面上位及び内面は横ナデが施されているが、内面は横位のハケメが一部残る。口縁部下位から頸部までの外面は縦位、頸部内面は横位のハケメが施されている。４は外面が斜位、内面は斜・横位のハケメ調整が施されている。５～７は、弥生土器壺である。５は肩部、６は胴上部、７は胴部中段の破片である。５は外面上位に３本一単位の櫛歯状工具による重四角文と思われる文様が描かれており、区画内に同一工具で斜位の沈線が走る。下位は同一工具による緩い波状文が複数巡る。内面の調整は、横位のヘラナデである。６は摩耗が著しいため定かではないが、外面上下に平行沈線が複数巡り、間にＬＲ単節縄文が施文されている。内面の調整は、斜位のヘラナデである。７は外面に重三角文が描かれており、間にＬＲ単節縄文が充填されている。外面無文部の調整は、斜位のヘラミガキである。内面の調整は、横位のヘラナデである。８は、土師器坏蓋模倣坏である。口縁部がやや外反し、体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部を欠くが、丸底と思われる。調整は、口縁部から体部の内外面が横ナデ、底部外面はヘラ削りである。

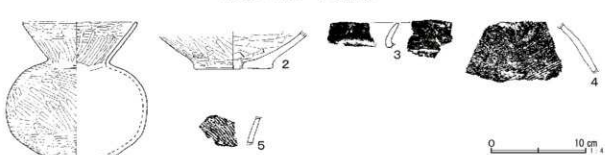
本住居跡の時期は、重複する第１号住居跡より古い古墳時代初頭と思われる。

第３号住居跡（第12図）

第３区の71・72－85・86グリッドに位置する。本住居跡の中央付近を第16号溝跡が南北に走るが、上位をやや切られていただけであり、残存状状態は比較的良好であった。東側で第４号住居跡を切ってお



第12図　第３・４号住居跡



第13図　第３号住居跡出土遺物

り、北西隅及び北東隅が調査区外にある。また、所々で単独ピットと重複するが、すべてのピットが本住居跡より新しい。

規模は、長軸4.76m、短軸4.06mを測る。平面プランは、方形に近い。主軸方向は、N－45°－Wを指す。確認面からの深さは、最大0.27mを測る。床面は、やや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。覆土は、

第４表　第３号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	土師器　壺	(122)	15.3	5.0	ABDEHIKN	にぶい橙色	B	85%	
2	土師器　壺	－	(4.05)	(8.4)	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	胴～底30%	底面殻類圧痕？有。
3	土師器台付甕	－	－	－	ABDHKN	明赤褐色	B	口～頸部片	頸部内面輪積痕有。
4	土師器台付甕	－	－	－	ABEHIN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面やや摩耗。
5	弥生土器　甕	－	－	－	ABEIN	にぶい黄橙色	B	頸部片	中期後。

レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。上層は粘土質であったが、下層はシルト質及びシルトであった。掘り方はみられなかった。

壁溝は、未検出の北西及び北東隅も含め、全周すると思われる。幅は、北壁及び東壁沿いが0.8m前後、南壁及び西壁沿いが0.9～1.21m前後と全体的に広い。床面からの深さは、0.15m前後を測る。

炉跡・ピット・貯蔵穴は、確認されなかった。

出土遺物（第13図）は少なく、土師器壺（１・２）、台付甕（３・４）がある。この他にも流れ込みで弥生時代中期後半の甕の破片（５）も出土した。１は、西側壁溝中央よりやや南側の覆土中層から出土した。その他は流れ込み遺物も含め、主に覆土上層からの出土である。

１・２は、土師器壺である。１は全形の分かる個体、２は胴下部から底部にかけての部位である。１は、口縁部がほぼ直線的に立ち上がり、頸部がすぼまる。胴部は算盤玉状を呈し、底部は平底に近い。最大径を胴部中段に持つ。調整は、口縁部から頸部までの内外面と胴下部を除く外面はヘラミガキであり、頸部内面は放射状暗文状に施されている。胴下部外面はヘラナデ、胴部内面は計測不可能であったが、上位が横位のヘラナデ、下位から底部には横・斜位のハケメが施されている。２の底部は、やや上げ底である。調整は、外面全面にヘラミガキが施されているが、下位はヘラミガキ前に施されたハケメと輪積痕が一部残る。内面はヘラナデである。なお、底面には雑穀と思われる圧痕が多数みられた。３・４は、土師器台付甕である。３は口縁部から頸部まで、４は胴上部の破片である。３は断面形がくの字状を呈する。調整は、口縁部上位の内外面が横ナデ、頸部の内外面はハケメであるが、外面は縦・斜位、内面は横位に施されている。頸部内面に輪積痕が残る。４は外面が斜位のハケメ、内面は斜位のヘラナデ調整が施されている。器壁がやや厚い。５は、弥生土器甕の頸部片である。外面にＲＬ単節縄文が施文されている。内面の調整は、横位のヘラナデである。

本住居跡の時期は、古墳時代前期と思われる。

第４号住居跡（第12図）

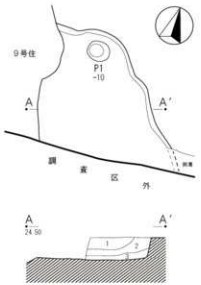
第３区の71－85グリッドに位置する。南側一部のみの検出である。西側を第３号住居跡に切られており、北側大半は調査区外にある。

正確な規模・平面プラン・主軸方向は不明であるが、検出された南北は最大1.5m、東西は1.3mを測る。確認面からの深さは、最大0.32mを測る。床面は、中央に向かってやや傾斜している。覆土は、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。上層は粘土質であったが、下層はシルト質であった。掘り方はみられなかった。

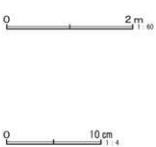
炉跡・壁溝・ピット・貯蔵穴は、確認されなかった。

出土遺物に土器などはなく、写真のみの掲載であるが、獣骨片（図版31）があるだけである。

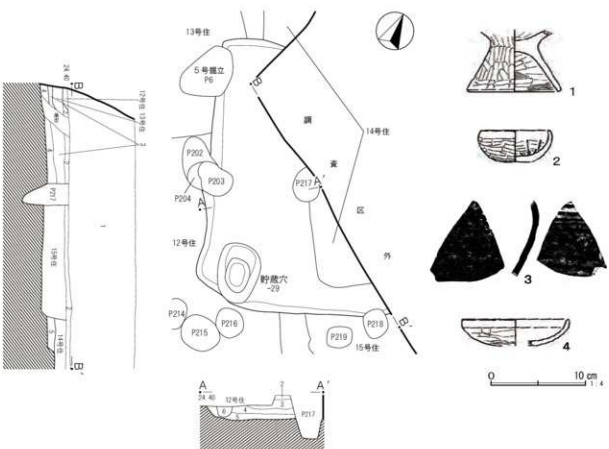
本住居跡の時期は、重複する第３号住居跡との関係から古墳時代初頭か前期と思われる。



土層説明（ＡＡ′）
1 灰褐色土：粘土質。マンガン粒多量。淡黄色粒少量含む。
2 黒褐色土：粘土質。マンガン粒多量。淡黄色粒少量含む。
3 黒褐色土：シルト質。淡黄色シルト多量含む。



第14図　第５号住居跡・出土遺物



土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）
1 盛　土
2 暗灰黄色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
3 黒褐色土：粘土質。マンガン粒多量、淡黄色粒、焼土粒少量含む。
4 暗灰黄色土：シルト質。マンガン粒多量、淡黄色粒少量含む。
5 黄灰色土：シルト質。マンガン粒多量、淡黄色粒少量含む。
6 淡黄色シルト：マンガン粒多量含む。掘立のピット？

第15図　第６号住居跡・出土遺物

第５表　第５号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	土師器台付甕	－	(7.0)	10.4	ABDEHKN	にぶい赤褐色	B	接～台70%	胴部内面、外面所々摩耗顕著。

第６表　第６号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	土師器台付甕	－	(6.6)	(10.0)	ABDHIN	明黄褐色	B	接～台60%	
2	土師器　椀	7.4	3.35	3.6	ABEIKN	明赤褐色	B	ほぼ完形	内面ヘラ刷み有。
3	須恵器　瓶	－	－	－	ABDL	当灰オリーブ　当灰	B	胴中～下片	末野産。外面自然釉付着。
4	土師器　坏	(11.4)	(2.8)	－	ABHKN	橙色	B	20%	

第５号住居跡（第14図）

第３区の69－87グリッドに位置する。北東隅付近のみの検出である。西側を第９号住居跡に切られており、南側は調査区外にある。西側には第２号住居跡が隣接しており、直接重複していないが、出土遺物の内容から本住居跡が新しい。

正確な規模は不明であるが、検出された南北は最大2.2m、東西は1.86mを測る。平面プランは、隅丸長方形か方形を呈し、主軸方向は、Ｎ－33°－Ｗを指すと思われる。確認面からの深さは、最大0.35mを測る。床面は、やや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。覆土は、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。上・中層は粘土質であったが、下層はシルト質であった。掘り方はみられなかった。

北東隅の床面では、ピットが１つ確認された。その位置から主柱穴ではなく、本住居跡に伴わない可能性もある。炉跡・壁溝・貯蔵穴は、確認されなかった。

出土遺物で図示可能なものは、土師器台付甕（１）のみである。出土位置を図示できなかったが、西側で重複する第９号住居跡との境付近の床面直上から出土した。

１は、土師器台付甕の接合部から台部までの部位である。台部がハの字に開き、裾端部が角張る。調整は、外面がヘラナデとハケメ、内面はヘラナデである。

本住居跡の時期は、古墳時代前期と思われる。

第６号住居跡（第15図）

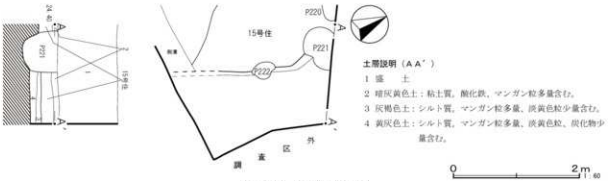
第３区の67・68－86・87グリッドに位置する。西側半分の検出であり、東側は調査区外にある。西側上位を第12・13号住居跡、北西隅を第５号掘立柱建物跡のピット６、調査区との境付近を第14・15号住居跡、また所々を単独ピットに切られている。多くの遺構と重複するが、本住居跡が最も古い。

正確な規模は不明であるが、南北は4.31m、検出された東西は最大2.8mを測る。平面プランは、方形を呈すると思われる。主軸方向は、Ｎ－24°－Ｗを指す。確認面からの深さは、最大0.22mを測る。床面は、やや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。覆土は、ほぼ水平に堆積していたが、自然堆積と思われる。掘り方はみられなかった。

南西隅の床面では、貯蔵穴が確認された。長軸0.84m、短軸0.67m、床面からの深さは0.29mを測る。北側にテラス状の段を持つ。炉跡・壁溝・ピットは、確認されなかった。

出土遺物は少なく、土師器台付甕（１）、椀（２）がある。この他にも流れ込みで古墳時代後期以降の須恵器瓶（３）、土師器坏（４）も出土した。すべて覆土からの出土である。

１は、土師器台付甕の接合部から台部までの部位である。台部がハの字に開き、裾端部が角張る。調整は、外面が粗いヘラミガキ、内面はヘラナデであるが、所々にヘラナデ前に施したハケメが残る。２



第16図　第７号住居跡

は、小振りでほぼ完形の土師器椀である。口縁部が内湾しながら立ち上がり、体部は丸みを持つ。底部は平底に近い。調整は、口縁部内外面が横ナデ、体部内外面はヘラミガキであり、内面は放射状暗文とは異なるヘラによる刻みが縦・斜位に施されている。３は、須恵器瓶の胴部中段から下部にかけての破片である。調整は、内外面ともにロクロナデであり、外面に自然釉が付着している。末野産である。４は、土師器北武蔵型坏である。口縁部がほぼ直立し、体部と底部の境に稜を持つ。底部中央を欠くが、丸底と思われる。調整は、口縁部から体部の内外面が横ナデ、底部外面はヘラ削りである。

本住居跡の時期は、古墳時代前期と思われる。

第７号住居跡（第16図）

第３区の67－87グリッドに位置する。北側一部のみの検出であり、大半は調査区外にある。また、上位を第15号住居跡、所々を単独ピットに切られている。

正確な規模・平面プラン・主軸方向は不明であるが、検出された南北は最大1.4m、東西は2.5mを測る。重複する15号住居跡下から確認した深さは、最大0.17mと浅い。床面はやや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。覆土は、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。掘り方はみられなかった。

炉跡・壁溝・ピット・貯蔵穴は、確認されなかった。

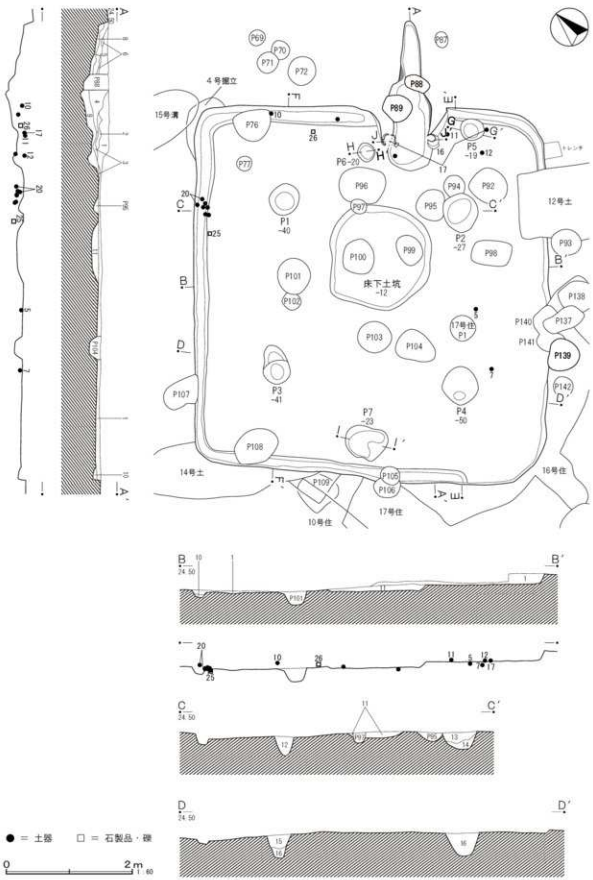
出土遺物はないが、本住居跡の時期は、重複する第15号住居跡との関係から古墳時代初頭か前期と思われる。

第８号住居跡（第17・18図）

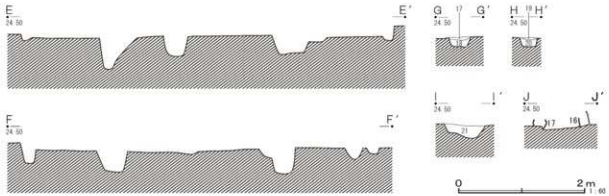
第３区の69～71－85～87グリッドに位置する。北西部で第４号掘立柱建物跡、北東部で第12号土坑、南西部で第14号土坑、南壁中央で第10号住居跡カマド、南東部で第16・17号住居跡と重複するが、第４号掘立柱建物跡のみ本住居跡より古く、その他は新しい。覆土上位のみ切られていることが多かったことから、残存状態は比較的良好であった。また、単独ピットとも多数重複するが、ピット107以外、すべてのピットに切られている。本報告で唯一全形を検出した住居跡である。

一辺5.8m前後の方形を呈し、本報告で最も大きい住居跡である。主軸方向は、N－46°－Eを指す。確認面からの深さは最大0.16mと浅く、西側は確認面で床面が一部露出していた。床面はやや凹凸がみられ、西側にやや傾斜する。覆土は粘土質の黒褐色土が確認されたが、自然堆積と思われる。床面中央を除いた周囲に掘り方を持つ。

カマドは、北壁中央からやや東寄りに設けられていた。両袖とも地山を掘り残しており、先端に補強



第17図　第8号住居跡（1）



土層説明（AA' BB' CC' DD' GG' HH' II' ）

1 黒褐色土：粘土質。マンガン粒多量、淡黄色粒少量含む。
2 焼 土 層
3 灰　　層
4 褐灰色土：粘土質。焼土粒、淡黄色粒・ブロック、マンガン粒多量含む。
5 褐灰色土：粘土質。焼土粒・ブロック、マンガン粒多量含む。
6 黄灰色土：粘土質。灰多量、焼土粒少量含む。
7 灰黄褐色土：粘土質。焼土粒・ブロック少量、炭化物微量含む。
8 黄灰色土：粘土質。灰多量、焼土粒少量含む。
9 暗灰黄色土：粘土質。淡黄色粒・ブロック、マンガン粒多量、焼土粒少量含む。掘り方。
10 黒褐色土：粘土質。淡黄色シルトブロック多量含む。
11 黒褐色土：粘土質。淡黄色粒・ブロック、マンガン粒多量含む。
12 黒褐色土：粘土質。淡黄色粒・ブロック、マンガン粒多量、焼土粒少量含む。
13 黒褐色土：粘土質。マンガン粒多量、焼土粒、淡黄色粒・ブロック少量含む。
14 黒褐色土：粘土質。淡黄色ブロック、マンガン粒多量含む。
15 黒褐色土：粘土質。マンガン粒多量、淡黄色粒・ブロック、炭化物少量含む。
16 黒褐色土：粘土質。淡黄色粒・ブロック、マンガン粒多量含む。
17 黒褐色土：粘土質。焼土粒・ブロック多量、灰少量含む。
18 黒褐色土：粘土質。淡黄色粒・ブロック多量、焼土粒、炭化物少量含む。
19 灰　　層：焼土粒少量含む。
20 黒褐色土：粘土質。淡黄色粒、マンガン粒少量含む。
21 黒褐色土：粘土質。マンガン粒多量、焼土粒、淡黄色粒・ブロック少量含む。

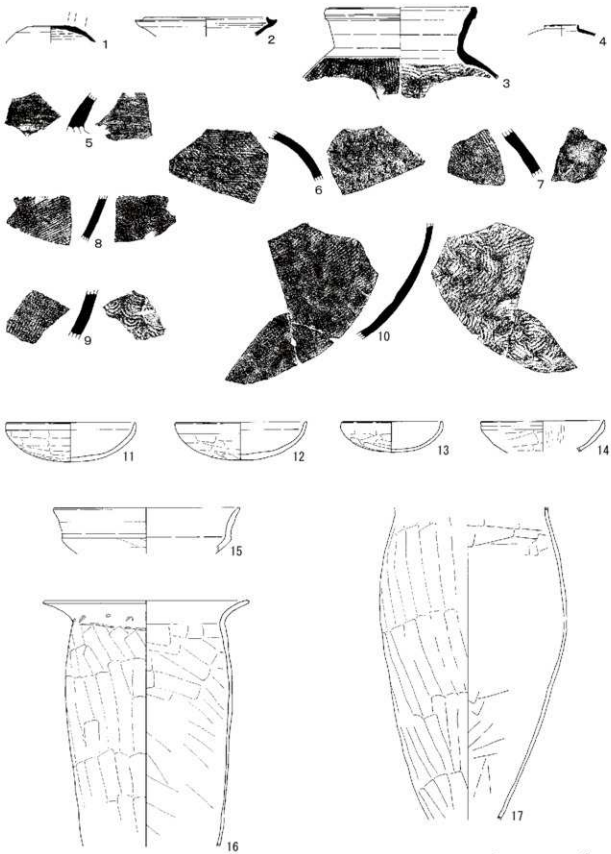
第18図　第８号住居跡（２）

材として長胴甕が逆位で設置されていた。焚口部から燃焼部は、土坑状の掘り込みになっており、煙道部は先端に向かって緩やかに立ち上がる。壁外への張り出しは、1.36mと長い。燃焼部東壁及び燃焼部と煙道部の境付近の西壁に被熱痕がみられた。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、上・中層に焼土や灰などを含む層、下層に掘り方が確認された。

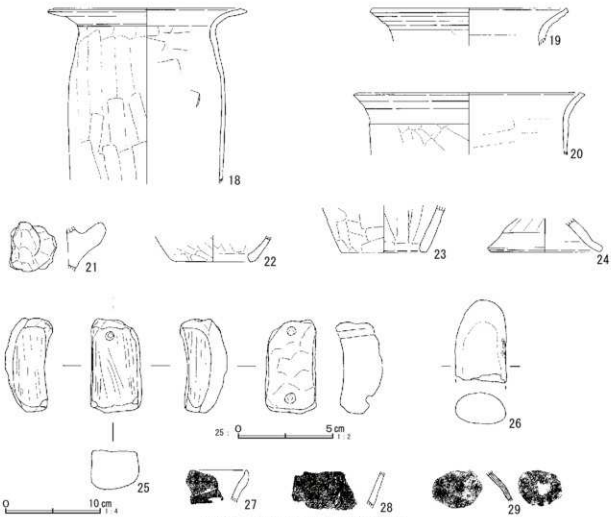
壁溝は、南東隅から東壁中央付近まで途切れるが、その他は全周する。幅は、狭い所で0.12m、広い所で0.32mを測る。床面からの深さは0.05m前後である。ピットは、７つ検出された。ピット１～４は主柱穴、ピット５・６はカマドに付随する灰溜め用、ピット７は出入口に伴うものと思われる。床面中央からやや北側では、床下土坑が検出された。径1.6m前後の不整円形を呈し、床面からの深さは0.12mを測る。貯蔵穴は、確認されなかった。

出土遺物（第19・20図）は、須恵器蓋（１）、坏（２）、短頸壺（３）、無頸壺（４）、甕（５～10）、土師器坏（11～15）、甕（16～19）、甑（20～23）、高坏（24）、砥石（25）、編み物石（26）がある。この他にも流れ込みで弥生時代中期後半の甕（27）、古墳時代前期の土師器壺（28）、奈良・平安時代の灰釉陶器瓶（29）も出土した。５・７・11・12・25・26が床面直上、10・20は壁溝上、６・８は掘り方、18・19・24はカマド、その他は流れ込み遺物も含め、覆土からの出土である。16・17は、カマド袖の補強材として使用されたものである。

１～10は、須恵器である。１は、いわゆる坏H蓋の天井部から体部までの部位である。調整は、天井部が手持ちヘラナデ、その周囲は回転ヘラ削り、以下は内面も含め、ロクロナデである。２は、坏Hである。底部を欠く。調整は、内外面ともにロクロナデである。体部外面に自然釉が付着している。３は、



第19図　第８号住居跡出土遺物（１）



第20図　第８号住居跡出土遺物（２）

短頸壺の口縁部から胴上部までの部位である。段を持つ口縁部がやや外反しながら立ち上がり、胴部が膨らむ。調整は、口縁部から頸部までは内外面ともにロクロナデ、胴部は外面がタタキ、内面はあて具痕が残る。４は、小振りの無頸壺の口縁部から肩部までの部位である。短い口縁部が直立し、胴部が膨らむ。調整は、内外面ともにロクロナデである。外面及び口縁部内面に自然釉が付着している。５～10は、甕である。５は頸部、６・７は胴上部、８～10は胴下部の破片である。調整は、５が内外面ともにロクロナデ、６～10は外面がタタキであるが、10はタタキ後に上位の所々を斜位のヘラナデ、下位は一部に回転カキ目が施されている。内面は、あて具痕が残るもの（７・９・10）とヘラナデが施されたもの（６・８）があり、６は所々にあて具痕が残る。５は頸部内外面、６・７は外面に自然釉が付着している。須恵器の産地は、１・２が不明、８のみ南比企産、その他は末野産である。

11～24は、土師器である。11～15は、坏である。11～13は北武蔵型坏、14は暗文坏、15は有段口縁坏である。北武蔵型坏は、13のみ小振りである。いずれも口縁部がほぼ直立し、体部と底部の境に稜を持つ。底部は丸底である。14は、直立する口縁部の中段が凹む。底部を欠くが、丸底と思われる。内面に放射状暗文が描かれている。15は、やや大型で段を持つ口縁部が外反しながら立ち上がり、体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部の大半を欠くが、丸底と思われる。坏の調整は、口縁部から体部の内外面が横ナデ、底部外面はヘラ削りである。16～19は、長胴甕である。16・18は口縁部から胴部中段まで、

第７表　第８号住居跡出土遺物観察表

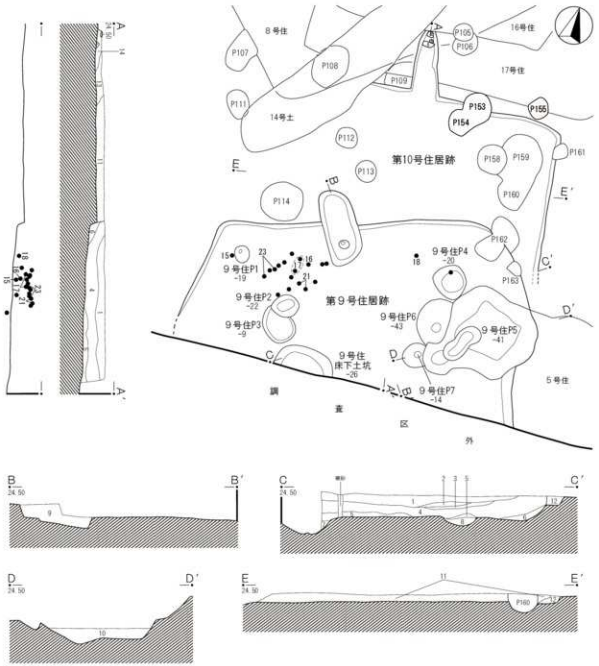
番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	須恵器　蓋	－	(1.85)	(3.6)	AB	灰色	B	天～体40%	産地不明。
2	須恵器　坏	(13.1)	(2.1)	－	AB	灰白色	B	口～体20%	産地不明。体部外面自然釉付着。
3	須恵器短頸壺	16.2	(11.75)	－	ABHLN	灰色	A	口～胴60%	末野産。
4	須恵器無頸壺	(3.6)	(1.2)	－	ABL	灰色	B	口～頸20%	末野産。口縁部内面、外面自然釉付着。
5	須恵器　甕	－	－	－	ABL	灰色	B	頸部片	末野産。内外面自然釉付着。
6	須恵器　甕	－	－	－	ABHLN	灰白色	A	胴上部片	末野産。外面自然釉付着。
7	須恵器　甕	－	－	－	ABL	灰白色	B	胴上部片	末野産。外面自然釉付着。
8	須恵器　甕	－	－	－	ADFN	褐灰色	B	胴下部片	南比企産。
9	須恵器　甕	－	－	－	AHL	灰色	B	胴下部片	末野産。
10	須恵器　甕	－	－	－	ABHLN	黄灰色	A	胴下部片	末野産。
11	土師器　坏	(13.6)	4.2	－	ABKN	橙色	B	50%	内外面やや摩耗。
12	土師器　坏	(14.0)	4.0	－	ABEHIKN	橙色	B	30%	内面摩耗顕著。
13	土師器　坏	10.8	3.3	－	ABHIK	にぶい褐色	B	60%	
14	土師器　坏	(13.2)	(3.3)	－	ABDHKN	橙色	B	口～体15%	内面放射状暗文有。内面摩耗顕著。
15	土師器　坏	(19.8)	(4.85)	－	ABCHK	浅黄橙色	B	口～体10%	
16	土師器　甕	21.8	(26.2)	－	ABDKN	にぶい橙色	B	口～胴70%	口縁部外面ヘラ描刺突有。内面所々摩耗顕著。
17	土師器　甕	－	(33.15)	－	ABEHKN	橙色	B	胴部70%	胴部内面大半摩耗顕著。
18	土師器　甕	(21.2)	(18.65)	－	ABEHKN	赤褐色	A	口～胴30%	胴部内面摩耗顕著。
19	土師器　甕	(20.6)	(4.3)	－	ABDHKN	にぶい黄橙色	B	口～胴25%	
20	土師器　甕	(23.3)	(6.6)	－	ABDHN	にぶい橙色	B	口～胴25%	胴部内面摩耗顕著。
21	土師器　甑	－	－	－	ABCIN	にぶい褐色	B	把手片	
22	土師器　甑	－	(2.8)	(8.0)	ABCDHKN	橙色	B	底部25%	内外面やや摩耗。
23	土師器　甑	－	(5.0)	(9.2)	ABEHKN	にぶい黄橙色	B	底部30%	
24	土師器　高坏	－	(3.6)	12.2	ABHKN	明赤褐色	B	脚部60%	内外面やや摩耗。
25	砥　石	最大長5.0cm、最大幅2.75cm、最大厚2.0cm。重量43.0ｇ。完形。凝灰岩。三面使用。孔有。							
26	編み物石？	最大長(8.8)cm、最大幅(5.45)cm、最大厚(3.3)cm。重量(360.5)ｇ。半分欠。砂岩。							
27	弥生土器　甕	－	－	－	ABCHIKN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	中期後。
28	土師器　壺	－	－	－	ABDHIKN	橙色	B	胴下部片	古墳前。外面赤彩。
29	灰釉陶器　瓶	－	－	－	AB	灰白色	A	胴上部片	奈良・平安。

17は胴上部から下部まで、19は口縁部から胴上部までの部位である。全形の分かるものはないが、最大径を持つ短い口縁部が大きく外反し、18は端部が受け口状を呈する。胴部は中段よりやや上が膨らみ、底部に向かってすぼまると思われる。20～23は、甑である。20は口縁部から胴上部までの部位、21は把手、22・23は底部である。全形の分かるものはないが、最大径を持つ短い口縁部の開きが甕に比べて弱く、胴部は底部に向かって徐々にすぼまると思われる。甕・甑の調整は、口縁部が内外面ともに横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。16は口縁部外面にヘラによる刺突状の刻み、18・19は外面に複数の段を持つ。24は、高坏の脚部である。詰まったハの字状を呈する。調整は、外面上位がヘラ削り、外面下位と内面は横ナデである。25は、小振りの砥石である。完形である。三面に線状痕がみられた。上下端に孔が設けられているが、下位は貫通していない。凝灰岩製である。26は、編み物石か。半分を欠く。砂岩製である。27は、弥生土器甕の口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部が受け口状を呈する。外面にカナムグラによる擬縄文が施文されており、内面は斜位のヘラナデ調整が施されている。28は、土師器壺の胴下部片である。調整は、外面が縦・斜位の粗いヘラミガキ、内面は斜位のヘラナデである。外面に赤彩が施されている。29は灰釉陶器瓶の胴上部片である。外面に灰釉が施釉されている。内面は横位のヘラナデと指オサエが施されている。

本住居跡の時期は、重複する第10号住居跡より古く、第４号掘立柱建物跡より新しい古墳時代後期と思われる。

第９号住居跡（第21図）

第３区の69・70－87グリッドに位置する。北側半分の検出であり、南側は調査区外にある。北側で第10号住居跡、東側で第５号住居跡を切っている。また、北東隅で単独ピットと重複するが、新旧関係は



土層説明（AA′ BB′ CC′ DD′ EE′ ）

1 灰黄褐色土：粘土質。淡黄色粒・ブロック多量。焼土粒、炭化物、マンガン粒少量含む。埋め戻し。
2 暗灰黄色土：粘土質。焼土粒、淡黄色粒少量含む。
3 炭化物層
4 暗褐色土：粘土質。焼土ブロック、淡黄色粒・ブロック、マンガン粒少量含む。
5 黄褐色土：粘土質。マンガン粒少量含む。
6 暗褐色土：粘土質。淡黄色粒・ブロック多量。マンガン粒少量含む。
7 黒 色 土：粘土質。淡黄色粒・ブロック多量含む。埋め戻し。
8 黒褐色土：粘土質。マンガン粒多量。淡黄色粒。炭化物少量含む。
9 黒褐色土：粘土質。マンガン粒多量。焼土粒。淡黄色粒・ブロック。炭化物少量含む。
10 暗灰色土：粘土質。オリーブ色砂、マンガン粒多量含む。
11 黒褐色土：粘土質。淡黄色粒。マンガン粒多量。焼土粒。炭化物少量含む。
12 灰黄褐色土：シルト質。淡黄色粒・ブロック。マンガン粒多量含む。
13 黒褐色土：粘土質。淡黄色粒。マンガン粒多量。焼土粒少量含む。上面に炭化物層が薄く堆積。
14 黒褐色土：粘土質。マンガン粒多量。焼土粒。淡黄色粒少量含む。

● ＝ 土器

0 2m

第21図　第９・10号住居跡

不明である。

正確な規模は不明であるが、検出された南北は最大3.18m、東西は5.57mを測る。平面プランは、長方形か方形を呈すると思われる。主軸方向は、N－19°－Wを指す。確認面からの深さは、最大0.37mを測る。床面は、やや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。重複する第５号住居跡に接して東壁沿いに土坑状の掘り込みがみられたが、掘り方の可能性がある。覆土は、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

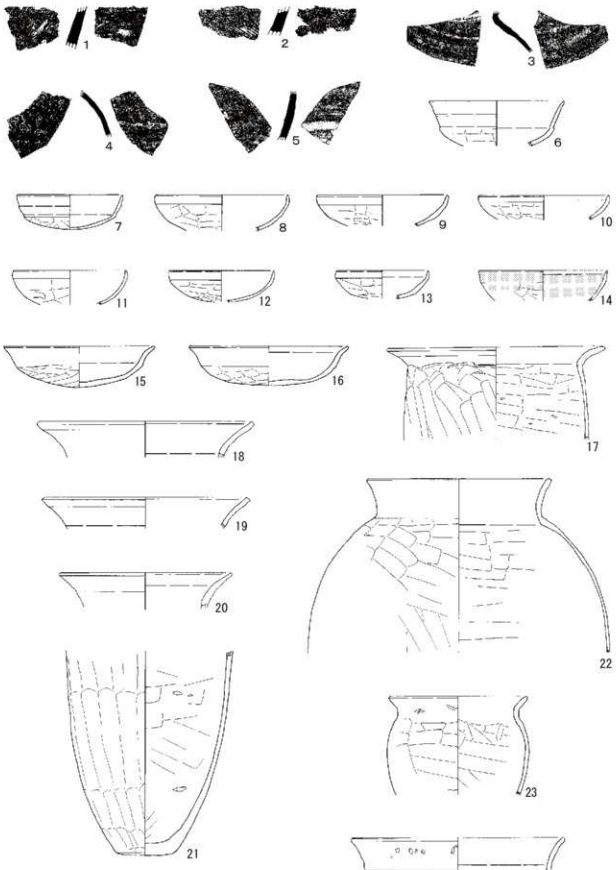
カマドは、北壁中央からやや西寄りに設けられており、袖部は確認されなかった。焚口部から煙道部まで土坑状の掘り込みになっており、壁外への張り出しは、0.54mを測る。燃焼部底面には径0.15m前後、深さ0.2mの円形を呈するピットがみられた。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土や炭化物などを含む層が確認されたにとどまる。

ピットは、７つ検出された。ピット２・４は、その位置から主柱穴と思われるが、その他は性格不明であり、本住居跡に伴わない可能性もある。床面中央付近の調査区との境では、床下土坑が検出された。径0.9m前後、床面からの深さ0.26mを測り、円形を呈すると思われる。壁溝・貯蔵穴は、確認されなかった。

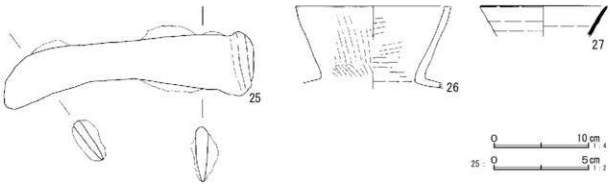
出土遺物（第22･23図）は、須恵器甕（１･２）、瓶（３～５）、土師器坏（６～14）、皿（15･16）、甕（17～23）、鉢（24）、鉄製鎌（25）がある。この他にも流れ込みで古墳時代前期の土師器壺（26）、平安時代の須恵器坏（27）も出土したが、前者は重複する第５号住居跡からの流れ込みと思われる。15～18・21・23が北東部の集中箇所、また出土位置を図示していないが、12・13も北東部の集中箇所、その他は流れ込み遺物も含め、覆土からの出土である。

１～５は、須恵器である。１・２は、甕の胴下部片である。調整は、１の外面がタタキ、内面はヘラナデであるが、あて具痕が一部残る。２は内外面ともにヘラナデであるが、外面の所々にタタキ目が残る。３～５は、瓶である。３は頸部から肩部にかけて、４は胴上部、５は胴下部の破片である。調整は、３・４が内外面ともにロクロナデ、５は外面上位が横位のヘラナデ、下位は回転ヘラ削り、内面はロクロナデである。３・４の外面、５は外面上位の一部に自然釉が付着している。須恵器の産地は、１は南比企産、２・４は末野産、３・５は不明である。

６～24は、土師器である。６～14は、坏である。６・７は有段口縁坏、８～13は北武蔵型坏、14は比企型坏である。有段口縁坏は、６が深身で段を持つ口縁部がやや外反しながら立ち上がるが、７はやや浅身で段を持つ口縁部がほぼ直線的に立ち上がる。いずれも体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は６が中央を欠くが、７とともに丸底と思われる。北武蔵型坏は、12・13が小振りであるが、その他はほぼ同じ法量を測り、扁平化したものが多い。口縁部は、直立するもの（８～10･12）と内傾するもの（11･13）があり、体部と底部の境にある稜が弱いものが目立つ。底部は欠くものもあるが、すべて丸底と思われる。14の比企型坏は、口縁部がほぼ直立し、端部内面に段を持つ。体部と底部の境にある稜が弱く、底部の大半を欠くが、丸底と思われる。内面及び外面上位に赤彩が施されている。15･16は、皿である。器形が坏蓋模倣坏に似るが、やや大型で扁平化していることから皿とした。いずれも口縁部が大きく外反し、体部と底部の境に弱い稜を持つ。底部は15が丸底、16は平底に近い。坏・皿の調整は、口縁部から体部の内外面は横ナデ、底部外面はヘラ削りである。17～23は、甕である。17～21は、長胴甕である。17は口縁部から胴部中段までの部位、18～20は口縁部、21は胴部中段から底部までの部位である。全形



第22図　第９号住居跡出土遺物（１）



第23図　第９号住居跡出土遺物（２）

第24図　第10号住居跡出土遺物

第８表　第９号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	須恵器　甕	−	−	−	AF	黄灰色	B	胴下部片	南比企産。
2	須恵器　甕	−	−	−	ABDL	褐灰色	B	胴下部片	末野産。
3	須恵器　瓶	−	−	−	AB	黄灰色	B	頸～肩部片	産地不明。外面自然釉付着。
4	須恵器　瓶	−	−	−	AB	灰色	B	胴上部片	末野産。外面自然釉付着。
5	須恵器　瓶	−	−	−	ABN	灰白色	B	胴下部片	産地不明。外面上位一部自然釉付着。
6	土師器　坏	(14.7)	(4.8)	−	ABDHIN	淡橙色	B	25%	
7	土師器　坏	11.3	3.7	−	ABEHIKN	橙色	B	90%	内外面摩耗顕著。
8	土師器　坏	(14.2)	(3.8)	−	ABDHIKN	明黄褐色	B	20%	内外面やや摩耗。
9	土師器　坏	(14.0)	(3.3)	−	ABEHIKN	明赤褐色	B	20%	内外面摩耗顕著。
10	土師器　坏	(13.8)	(2.6)	−	ABHKN	橙色	B	20%	内外面やや摩耗。
11	土師器　坏	(11.8)	(3.65)	−	ABHK	橙色	B	15%	外面やや摩耗。
12	土師器　坏	(11.2)	(3.3)	−	ABEHIKN	にぶい黄橙色	B	25%	
13	土師器　坏	(9.8)	(2.9)	−	ABIKN	橙色	B	20%	
14	土師器　坏	(13.6)	(3.25)	−	ABHN	暗赤色	B	10%	内面-外面上位赤彩。
15	土師器　皿	16.0	4.3	−	ABHIKN	橙色	B	75%	
16	土師器　皿	(16.8)	4.15	−	ABHKN	明赤褐色	B	35%	内外面やや摩耗。
17	土師器　甕	23.1	(9.9)	−	ABDHIKMN	にぶい赤褐色	B	口～胴60%	胴部内面輪積痕有。内外面やや摩耗。
18	土師器　甕	(22.4)	(3.8)	−	ABEHIKN	にぶい橙色	B	口縁部20%	
19	土師器　甕	(21.0)	(3.3)	−	ABEHIKN	にぶい黄橙色	B	口縁部20%	
20	土師器　甕	(18.2)	(3.9)	−	ABCHIKN	にぶい黄橙色	B	口縁部25%	
21	土師器　甕	−	(21.7)	(6.0)	ABDHIKN	橙色	B	胴～底80%	内面輪積痕有。内面-外面上位摩耗顕著。
22	土師器　甕	(19.5)	(18.4)	−	ABCDHIKN	橙色	B	口～胴40%%	外面やや摩耗。
23	土師器　甕	(14.6)	(10.45)	−	ABEHIKN	橙色	B	口～胴45%	口縁部外面輪積痕有。外面やや摩耗。
24	土師器　鉢	(22.4)	(4.9)	−	ABIKN	赤褐色	B	口～体20%	口縁部外面明瞭横ナデ。内外面摩耗顕著。
25	鉄製品　鎌	最大長(3.4)cm、最大幅(13.25)cm、最大厚(0.65)cm、重量(75.5)ｇ。ほぼ完形。							
26	土師器　壺	(16.3)	(8.75)	−	ABEHN	褐灰色	B	口～胴15%	内外面摩耗顕著。
27	須恵器　坏	(13.4)	(3.25)	−	ABIL	灰色	B	口～体20%	末野産。

第９表　第10号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	土師器　坏	(10.2)	(3.1)	−	ABDEH	明黄褐色	B	20%	内面やや摩耗。
2	灰釉陶器　瓶	−	−	−	AB	灰オリーブ色	B	胴中～下片	産地不明。
3	土師器　甕	(24.0)	(5.8)	−	ABDHIK	橙色	B	口～胴15%	口縁部外面輪積痕有。内面摩耗顕著。

の分かるものはないが、いずれも口縁部外面に段を持ち、17は短い口縁部が外反するが、その他は受け口状を呈する。胴部は中段よりやや上が膨らみ、下位に向かってすぼまる。底部は平底である。22・23は、丸胴甕の口縁部から胴部中段までの部位である。22は、口縁部の開きが小さく、胴部が大きく膨らむ。23は、小振りで口縁部と胴部最大径がほぼ同じである。甕の調整は、口縁部が内外面ともに横ナデ、

胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。17・21の胴部内面の所々、23の口縁部外面の一部に輪積痕が残る。24は、鉢の口縁部から体部までの部位である。口縁部がやや外反し、体部は下位に向かってすぼまる。調整は、口縁部の内外面と体部内面は横ナデ、体部外面はヘラ削りである。口縁部外面にヘラによる刺突状の刻みが複数みられた。25は、鉄製鎌である。ほぼ完形である。26は、土師器壺の口縁部から肩部までの部位である。口縁部がやや受け口状を呈し、端部が角張る。胎土が粗く、器壁が厚い。調整は磨耗が著しいが、内外面ともにヘラミガキである。27は、やや深身の須恵器坏である。口縁部から体部までの部位であり、ほぼ直線的に立ち上がる。調整は、内外面ともにロクロナデである。末野産である。

本住居跡の時期は、古墳時代後期末と思われる。

第10号住居跡（第21図）

第3区の69・70－86・87グリッドに位置する。北側半分の検出である。カマド煙道部で第8号住居跡を切っており、同所を第16・17号住居跡、北西部を第14号土坑、南側半分を第9号住居跡に切られている。また、所々で単独ピットと多数重複しており、ピット154は出土遺物から本住居跡が新しいことが判明しているが、その他の新旧関係は不明である。なお、西壁は確認面の都合から検出できなかった。

正確な規模は不明であるが、検出された南北は最大2.3m、東西はカマドを北壁中央と想定すると4.5m程になる。平面プランは、長方形か方形を呈すると思われる。主軸方向は、N－7°－Wを指す。確認面からの深さは、最大0.13mと浅い。床面は、やや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。覆土は黒褐色土による単一層であったが、自然堆積と思われる。掘り方はみられなかった。

カマドは、北壁中央付近に設けられていたと思われる。袖部は確認されなかった。焚口部から煙道部までほぼ平坦であり、煙道部の先端を第16号住居跡、上位を第17号住居跡に切られている。壁外への張り出しは、0.97mを測る。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土や炭化物などを含む層が確認されたにとどまる。煙道部先端付近では、礫が検出されたが、煙出しに関連するものであろうか。

壁溝・ピット・貯蔵穴は、確認されなかった。

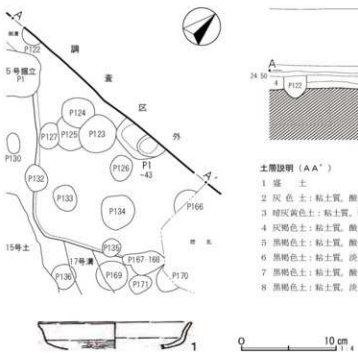
出土遺物（第24図）は少なく、本住居跡に伴う図示可能なものは、土師器坏（1）のみである。この他にも流れ込みで奈良・平安時代の灰釉陶器瓶（2）、土師器甕（3）も出土した。

1は、小振りでやや深身の土師器有段口縁坏である。中段付近に段を持つ口縁部がやや外反し、体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は大半を欠くが、丸底と思われる。調整は、口縁部から体部の内外面が横ナデ,底部の外面はヘラ削りである。2は,灰釉陶器瓶の胴部中段から下部にかけての破片である。調整は、内外面ともにロクロナデであるが、外面下位は回転ヘラ削りが施されている。産地は不明である。3は、土師器甕の口縁部から胴上部までの部位である。口縁部の断面形がくの字状を呈する。器壁が薄い。調整は、口縁部が内外面ともに横ナデ、胴上部外面はヘラ削り、内面はヘラナデである。口縁部外面に輪積痕が残る。

本住居跡の時期は、重複する第9号住居跡より古く、第8号住居跡より新しい古墳時代後期と思われる。

第11号住居跡（第25図）

第3区の68・69－85グリッドに位置する。南西部のみの検出であり、大半は調査区外にある。南西隅



第25図　第11号住居跡・出土遺物

第10表　第11号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	土師器　皿	(16.2)	(2.8)	－	ABHKN	橙色	B	10%	

付近から西壁の上位を第17号溝跡、西壁北側の調査区との境付近では第５号掘立柱建物跡のピット１に切られている。、東側は、現代の撹乱により欠く。また、多くの単独ピットと重複するが、すべてのピットが本住居跡より新しいと思われる。

正確な規模は不明であるが、検出された南北は最大3.07m、東西は2.6mを測る。平面プランは、長方形か方形を呈すると思われる。主軸方向は、N－41°－Wを指すと思われる。確認面からの深さは、最大0.25mを測る。床面はやや凹凸がみられ、東側にやや傾斜する。覆土は、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。掘り方はみられなかった。

本住居跡に伴うピットは、調査区との境で１つ検出された。その位置から主柱穴と思われる。

カマド・壁溝・貯蔵穴は、確認されなかった。

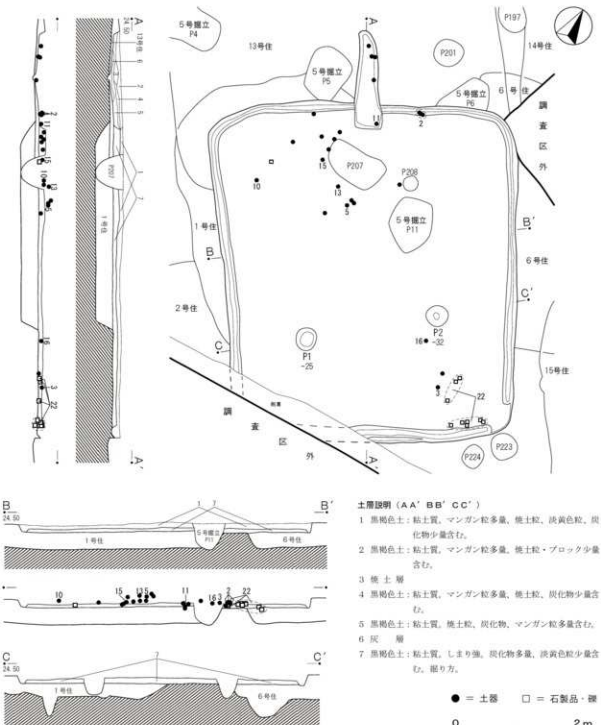
出土遺物は少なく、図示可能なものは、土師器皿（１）のみである。この他にも図示不可能であったが、土師器有段口縁坏や甕の破片も若干出土した。

１は器形が坏蓋模倣坏に似るが、やや大型で扁平化していることから皿とした。口縁部がやや外反し、体部と底部の境に稜を持つ。底部は大半を欠くが、平底に近いと思われる。調整は、口縁部から体部の内外面は横ナデ、底部外面はヘラ削りである。

本住居跡の時期は、古墳時代後期と思われる。

第12号住居跡（第26図）

第３区の67～69－86・87グリッドに位置する。ほぼ全形検出されたが、南西隅のみ調査区外にある。北側で第13号住居跡、西側で第１・２号住居跡、東側で第６号住居跡を切っている。また、北側で第５

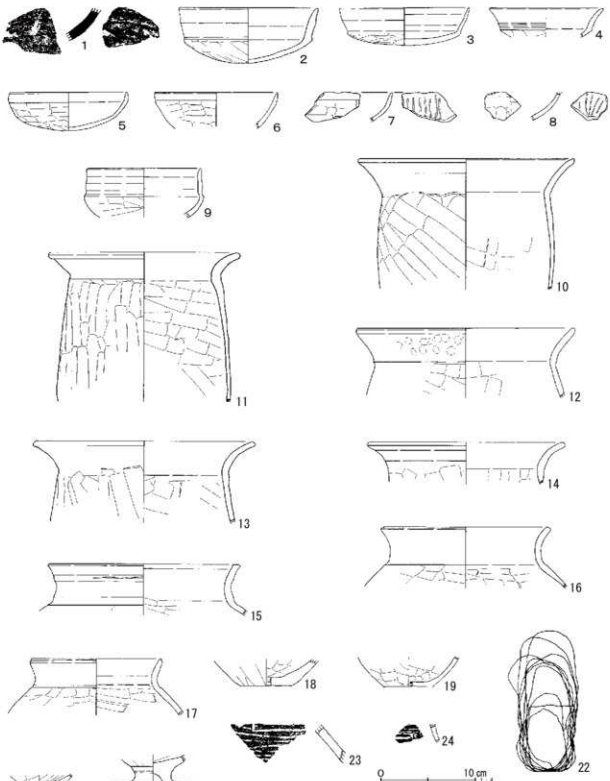


第26図　第12号住居跡

号掘立柱建物跡と単独ピットに切られているが，残存状態は比較的良好であった。

規模は長軸5.35m、短軸4.87mを測る。平面プランは，長方形を呈する。主軸方向は、N－31°－Wを指す。確認面からの深さは，最大0.08mと浅い。床面は，やや凹凸がみられたが，概ね平坦であった。覆土は黒褐色土による単一層であったが，自然堆積と思われる。掘り方を持つ。

カマドは，北壁中央に設けられており，袖部は確認されなかった。焚口部から煙道部まで土坑状の掘り込みになっており，壁外への張り出しは，1.16mを測る。カマド覆土に天井部崩落土はみられず，中



第27図　第12号住居跡出土遺物

層に焼土層、下層に灰層が確認された。

壁溝は、調査区外にある南西隅は定かではないが、南東隅が途切れる以外は全周する。幅は0.15m、床面からの深さは0.05m前後を測る。ピットは、2つ検出された。ピット1・2ともに、その位置から南側の主柱穴と思われるが、北側は確認されなかった。貯蔵穴は、確認されなかった。

第11表　第12号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	須恵器短頸壺	－	－	－	ABEHN	灰白色	B	胴下部片	産地不明。
2	土師器　坏	(14.8)	5.95	－	ABEHK	黒褐色	B	40%	
3	土師器　坏	(13.8)	4.0	－	ABCDKN	橙色	B	40%	
4	土師器　坏	(12.2)	(3.1)	－	ABCHKN	橙色	B	20%	
5	土師器　坏	12.4	4.05	－	ABHKN	にぶい橙色	B	60%	内外面やや摩耗。
6	土師器　坏	(13.0)	(3.9)	－	ABEHIKN	橙色	B	口～体20%	内面摩耗、剥離著。
7	土師器　坏	－	－	－	ABDIK	橙色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。
8	土師器　坏	－	－	－	ABEHIK	橙色	B	体部片	内面放射状暗文有。内面やや摩耗。
9	土師器　椀	(12.2)	(5.2)	－	ABCDHK	浅黄橙色	B	20%	
10	土師器　甕	(23.0)	(13.9)	－	ABCDHKN	橙色	B	口～胴30%	胴部内面摩耗顕著。
11	土師器　甕	19.75	(15.8)	－	ABEHIKN	褐色	B	口～胴60%	胴部内面一部輪積痕有。
12	土師器　甕	(23.2)	(7.4)	－	ABCEHIKN	橙色	B	口～胴15%	口縁部外面輪積痕有。内面やや摩耗。
13	土師器　甕	23.6	(8.7)	－	ABDEHN	橙色	B	口～胴70%	胴部内面やや摩耗。
14	土師器　甕	(21.0)	(4.5)	－	ABCDGHIKN	にぶい橙色	B	口～胴20%	
15	土師器　甕	(20.4)	(5.4)	－	ABDIN	にぶい褐色	B	口～胴40%	口縁部外面輪積痕有。
16	土師器　甕	(18.0)	(6.5)	－	ABDHKN	灰黄色	B	口～胴20%	
17	土師器　甕	(14.0)	(6.05)	－	ABDHIN	灰黄色	B	口～胴30%	
18	土師器　甕	－	(2.8)	(5.3)	ABEHIN	橙色	B	底部25%	
19	土師器　甕	－	(3.2)	(5.4)	ABCIKN	黒褐色	B	底部25%	
20	土師器　甕	－	(1.65)	3.0	ABHIN	黒褐色	B	底部45%	
21	土師器　高坏	－	(3.8)	(8.5)	ABEHIKN	赤褐色	B	接～脚20%	
23	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDHIK	にぶい黄橙色	B	胴上部片	中期前。
24	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	中期後。

出土遺物（第27図）は、須恵器短頸壺（1）、土師器坏（2～8）、椀（9）、甕（10～20）、高坏（21）、編み物石（22）がある。この他にも流れ込みで弥生時代中期前半の弥生土器壺（23）、中期後半の甕（24）も出土した。2は北壁溝、11はカマド、5・10・13・15は北西部、3・16・22は南東部の床面直上、12・24は掘り方、その他は流れ込み遺物も含め、覆土からの出土である。

1は、須恵器短頸壺の胴下部片である。調整は、外面が回転カキ目、内面はロクロナデである。産地は不明である。

2～21は、土師器である。2～8は、坏である。2～4は有段口縁坏、5は北武蔵型坏、6～8は可能性のあるものも含め、暗文坏である。有段口縁坏は、法量・器形が様々である。2は大型で器壁が厚い。深身で口縁部の開きが小さい。3は器壁が薄く、浅身で扁平化している。2と同じく口縁部の開きが小さいが、受け口状を呈する。4は、小振りで口縁部が大きく外反する。いずれも体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は4が大半を欠くが、2とともに丸底と思われ、3は平底に近い。5の北武蔵型坏は、口縁部が内傾し、体部と底部の境にある稜が弱い。底部は丸底である。暗文坏のうち、6は内面が摩耗・剥離しているため定かではないが、その器形からおそらく放射状暗文が施文されていたと思われる。口縁部は6がほぼ直立、7はやや外反し、体部と底部の境に弱い稜を持つ。すべて底部を欠くが、丸底と思われる。9は、椀である。複数の段を持つ口縁部がやや内傾し、体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は大半を欠くが、丸底と思われる。坏・椀の調整は、口縁部から体部の内外面が横ナデ、底部の外面はヘラ削りである。10～20は、甕である。10～14・20は、長胴甕である。10～14は口縁部から胴部中段までに収まる部位、20は底部である。全形の分かるものはないが、最大径を持つ口縁部が外反し、10・14は口縁部外面に段を持つ。胴部は膨らみが小さく、下位に向かってすぼまると思われる。底部は平底である。15～19は、丸胴甕である。15～17は口縁部から胴上部までの部位、18・19は底部である。丸胴甕も全形の分かるものはないが、口縁部の開きが小さく、端部に凹みが巡る。胴部は大きく膨らむと思われる。底部は平底である。15は、口縁部外面に段を持ち、輪積痕が残る。甕の調整は、口縁部が

内外面ともに横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。12は、口縁部外面に指オサエもみられた。21は、高坏の接合部から脚部までの部位である。脚部が低く、裾部は大きく外反する。調整は、接合部の外面がヘラ削り、内面はヘラナデ、脚部は内外面ともに横ナデである。

22は、床面南東隅付近から計９点まとまって出土したことから、編み物石とした。半分欠くものもあるが、長さ11～15cm、幅４～６cm、重さ295～580ｇに収まり、ほぼ同一の法量を測る。石材は、すべて砂岩である。

23・24は、弥生土器である。23は壺、24は甕の胴上部片である。23は外面上位に縦位の幅広沈線が垂下し、以下に同一工具による複数の平行沈線が巡る。内面の調整は、斜位のヘラナデである。器壁が厚い。本報告で最も古い遺物である。24は、外面にコの字重ね文が描かれている。内面の調整は、横位のヘラナデである。

本住居跡の時期は、重複する第13号住居跡より新しい古墳時代後期と思われる。

第13号住居跡（第28図）

第３区の68・69－86・87グリッドに位置する。ほぼ全形検出されたが、北東隅以西の北壁は確認面の都合から検出できなかった。南東隅の一部は調査区外にある。多くの遺構と重複関係にあり、南側で第１号住居跡、南東部で第６号住居跡を切っており、南側は第12号住居跡、北西隅は第17号住居跡、北東部は第17号溝跡と第15・16号土坑に切られている。また、所々を第５号掘立柱建物跡と単独ピットに切られている。

一辺5.25m前後の方形を呈する。主軸方向は、Ｎ－37°－Ｗを指す。確認面からの深さは、最大0.13mと浅い。床面はやや凹凸がみられたが、中央付近が高くなっており、周囲に掘り方を持つ。覆土は黒褐色土による単一層であったが、自然堆積と思われる。

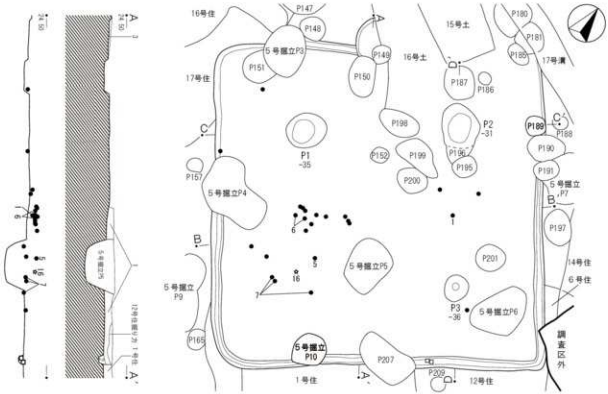
カマドは、北壁中央に設けられていたが、東側半分と焚口部を欠く。袖部は確認されなかった。焚口部から煙道部までほぼ平坦であり、壁外への張り出しは、0.45mと短い。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土や炭化物を含む黒褐色土が確認されたにとどまる。

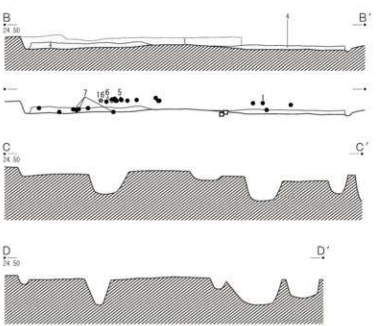
壁溝は、南側半分とカマド西側に巡る。幅は0.15m前後、床面からの深さは0.08mを測る。ピットは、３つ検出された。いずれもその位置から主柱穴と思われるが、南西部の主柱穴は確認されなかった。

貯蔵穴は、確認されなかった。

出土遺物（第29図）は、土師器坏（１～３）、鉢（４・５）、甕（６～９）、甑（10～12）、管玉（16）がある。この他にも流れ込みで弥生時代中期後半の弥生土器壺（13）、古墳時代前期の土師器壺（14・15）も出土した。１は中央からやや東、５～７・16は南西部の床面からやや浮いた状態で出土し、７は床面直上から出土した。また、４はピット１、流れ込みの14・15は掘り方からの出土である。その他は流れ込み遺物も含め、覆土上層からの出土である。

１～12は、土師器である。１～３は、坏である。１は坏蓋模倣坏、２は比企型坏、３は暗文坏である。すべて底部を欠く。１は小振りで口縁部がほぼ直立し、体部と底部の境に稜を持つ。底部は平底に近いと思われる。２は口縁部から体部がＳ字状に屈曲し、口縁端部内面に段、体部外面に明確な稜を持つ。体部外面下位以外、全面に赤彩が施されている。３は内面の摩耗が著しいため、放射状暗文が不鮮明である。短い口縁部がやや外反し、体部と底部の境にある稜が弱い。２・３ともに底部を欠くが、丸底と





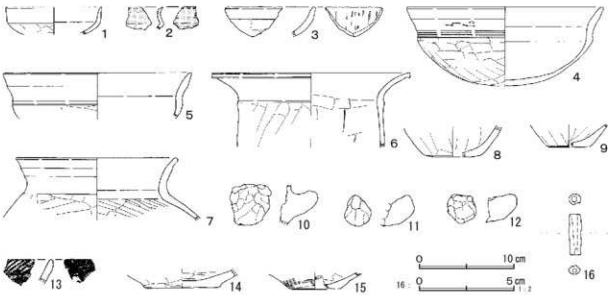
土層説明（AA′ BB′）
1 黒褐色土：粘土質。マンガン粒多量、渋黄色粒少量含む。
2 黒褐色土：粘土質。渋黄色粒・ブロック、マンガン粒少量含む。
3 黒褐色土：マンガン粒多量、焼土、炭化物少量含む。
4 黒褐色土：粘土質。しまり強。渋黄色粒・ブロック、マンガン粒多量含む。掘り方。

● ＝ 土器　□ ＝ 礫　☆ ＝ 管玉

0　2m

第28図　第13号住居跡

思われる。4・5は、鉢である。4のみ全形の分かる個体、5は底部を欠く。段を持つ口縁部の開きが小さい。体部と底部の境に明確な稜を持つ。坏・鉢の調整は、口縁部から体部の内外面が横ナデ、底部の外面はヘラ削りである。4は口縁部外面に輪積痕が一部残る。6～9は、甕である。6・8・9は、長胴甕である。6は口縁部から胴上部までの部位、8・9は底部である。全形の分かるものはないが、最大径を持つ短い口縁部が大きく外反し、端部が角張る。胴部は膨らみが小さく、下位に向かってすぼまると思われる。底部は平底である。7は、丸胴甕の口縁部から胴上部までの部位である。口縁部の開



第29図　第13号住居跡出土遺物

第12表　第13号住居跡出土遺物観察表

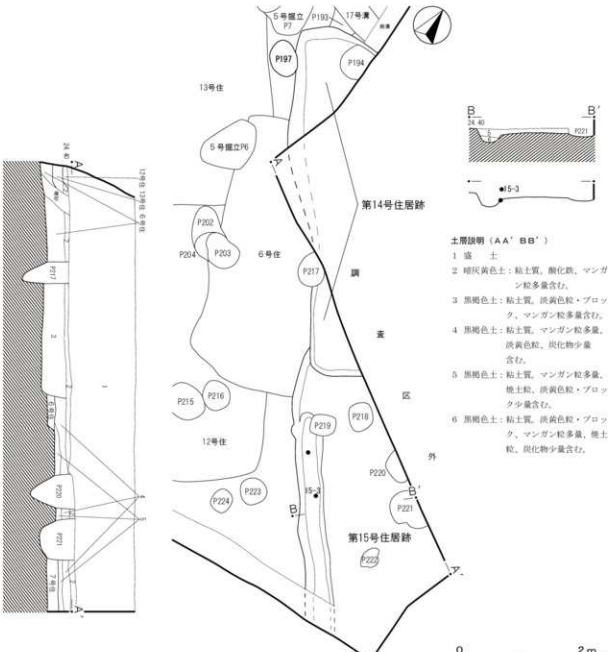
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器　坏	(10.2)	(2.9)	−	ABEHIKN	明赤褐色	B	25%	内外面調整顕著。
2	土師器　坏	−	−	−	ABHN	赤色　橙色	B	口～体部片	内面、口縁部外面赤彩。
3	土師器　坏	−	−	−	ABDHIK	橙色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。内面摩耗顕著。
4	土師器　鉢	(20.8)	8.4	−	ABEHIKN	明褐色	B	45%	口縁部外面一部輪積痕有。
5	土師器　鉢	(20.0)	(4.9)	−	ABEHIK	褐色	B	口～体20%	
6	土師器　甕	(21.0)	(7.9)	−	ABCDIN	浅黄橙色	B	口～胴20%	
7	土師器　甕	17.2	(6.65)	−	ABCDHKN	橙色	B	口～胴60%	
8	土師器　甕	−	(3.3)	(5.8)	ABCDHIKN	黒褐色	B	底部40%	外面やや摩耗。
9	土師器　甕	−	(2.4)	(4.6)	ABEHIKN	橙色	B	底部40%	
10	土師器　甑	−	−	−	ABEIKN	橙色	B	把手片	
11	土師器　甑	−	−	−	ABDIN	にぶい橙色	B	把手片	
12	土師器　甑	−	−	−	ABDEHIKN	にぶい橙色	B	把手片	
13	弥生土器　壺	−	−	−	ABCDHIKN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	中期後。内外面摩耗顕著。
14	土師器　壺	−	(2.05)	(8.0)	ABCDHIKN	にぶい黄橙色	B	底部30%	古墳前。外面やや摩耗。
15	土師器　壺	−	(1.8)	(5.6)	ABDIN	灰黄褐色	B	底部30%	古墳前。
16	管玉	最大長2.15cm、最大幅(0.65)cm、孔径0.15～0.3cm。重量(0.9)g。緑色凝灰岩製。							

きが小さく、外面に複数の段を持つ。胴部は大きく膨らむと思われる。甕の調整は、口縁部が内外面ともに横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。10～12は、甑の把手である。調整は、外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。16は、管玉である。縦方向に約1/2を欠く。片側穿孔であるが、中心からズレて側面に孔が開いている。黒色を呈するが、緑色凝灰岩と思われる。13は、弥生土器壺の口縁部片である。外面にＬＲ単節縄文が施文されているが、以下は内面も含めて摩耗が著しいため、調整不明である。なお、内面には雑穀圧痕の可能性がある円形の凹みがみられた。14・15は、土師器壺の底部である。いずれもやや上げ底である。調整は、14が内外面ともにヘラナデ、15は外面がハケメ主体であるが、ヘラナデも一部みられた。内面はヘラナデ主体であるが、ハケメも一部みられた。

本住居跡の時期は、重複する第12号住居跡より古い古墳時代後期と思われる。

第14号住居跡（第30図）

第３区の67・68－86・87グリッドに位置する。南西部と北西部の隅付近のみの検出であり、大半が調査区外にある。南西部で第６号住居跡、南側で第15号住居跡を切っている。また、所々で単独ピットと重複しており、ピット193は新旧関係が不明であるが、その他は本住居跡が切られている。西側に第



第30図　第14・15号住居跡

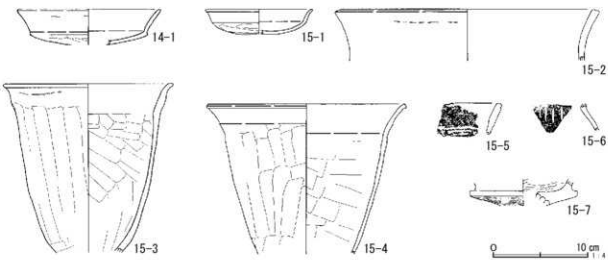
12・13号住居跡が隣接するが、出土遺物の内容から本住居跡が新しいと思われる。

正確な規模は不明であるが、南北は5.54m、検出された東西は最大1.3mを測る。平面プランは、長方形か方形を呈し、主軸方向は、N－38°－Eを指すと思われる。確認面からの深さは、最大0.38mを測る。床面は、やや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。覆土はブロックを多量含んだ黒褐色土による単一層が厚く堆積しており、埋め戻されたと思われる。掘り方はみられなかった。

カマド・壁溝・ピット・貯蔵穴は、確認されなかった。

出土遺物（第31図）は少なく、図示可能なものは、土師器皿（14－1）のみである。

1は、器形が坏蓋模倣坏に似るが、やや大型で扁平化していることから皿とした。口縁部が外反し、体部と底部の境に稜を持つ。底部は中央を欠くが、平底に近いと思われる。調整は、口縁部から体部の



第31図　第14・15号住居跡出土遺物

第13表　第14号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
14-1	土師器　皿	(15.2)	(3.75)	－	ABCGN	暗赤褐色	B	20%	外面一部輪積痕有。

第14表　第15号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
15-1	土師器　坏	11.4	2.7	－	ABHKN	橙色	B	60%	
15-2	土師器　甕	(28.0)	(5.5)	－	ABDIN	にぶい黄橙色	B	口縁部30%	口縁部外面輪積痕有。内外面摩耗顕著。
15-3	土師器　甑	(18.0)	(18.0)	－	ABDEHN	にぶい橙色	B	口～胴20%	口縁部外面輪積痕有。
15-4	土師器　甑	(21.0)	(15.9)	－	ABEHKN	橙色	B	口～胴20%	胴部内面やや摩耗。
15-5	弥生土器　甕	－	－	－	ABDIN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	中期後。内外面摩耗顕著。
15-6	弥生土器　甕	－	－	－	ABEIKN	にぶい褐色	B	頸～胴上片	中期後。
15-7	土師器特殊器台	－	(2.85)	－	ABCHKN	橙色	B	接合部40%	古墳前。

内外面は横ナデ、底部外面はヘラ削りである。口縁部外面に輪積痕が一部残る。

本住居跡の時期は、隣接する第12・13号住居跡より新しい古墳時代後期と思われる。

第15号住居跡（第30図）

第３区の67－87グリッドに位置する。西壁付近のみの検出であり、大半が調査区外にある。北側を第14号住居跡に切られており、北側で第６号住居跡、南側で第７号住居跡を切っている。また、所々を単独ピットに切られている。西側に第12号住居跡が隣接するが、出土遺物の内容から本住居跡がやや古いと思われる。

正確な規模は不明であるが、検出された南北は最大4.45m、東西は2.3mを測る。平面プランは、長方形か方形を呈し、主軸方向は、N－40°－Eを指すと思われる。確認面からの深さは、最大0.08mと浅い。床面はやや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。覆土はほぼ水平に堆積していたが、自然堆積と思われる。掘り方はみられなかった。

壁溝は、西壁中央付近から南側に巡る。幅は0.4m前後、床面からの深さは0.12mを測る。

カマド・ピット・貯蔵穴は、確認されなかった。

出土遺物（第31図）は、土師器坏（15－１）、甕（15－２）、甑（15－３・４）がある。この他にも流れ込みで弥生時代中期後半の弥生土器甕（15－５・６）、古墳時代前期の土師器特殊器台（７）も出土した。15－３は西側壁溝上の覆土上層、その他は出土位置を図示できなかったが、同じく覆土上層からの出土

である。

15－１は、土師器坏蓋模倣坏である。浅身で扁平化している。口縁部が外反し、体部と底部の境に弱い稜を持つ。底部は平底に近い。調整は、口縁部から体部の内外面が横ナデ、底部の外面はヘラ削りである。15－２は、土師器丸胴甕の口縁部である。口縁部の開きが小さく、端部に凹みが巡る。調整は、内外面ともに横ナデである。口縁部外面に輪積痕が一部残る。15－３・４は、土師器甑である。いずれも底部付近を欠く。口縁部が外反し、胴部は膨らむことなく、下位に向かってすぼまる。15－４は口縁端部に凹みが巡る。調整は、口縁部が内外面ともに横ナデ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。15－３は口縁部外面に輪積痕が残る。15－５・６は、弥生土器の甕である。15－５は口縁部から頸部にかけて、15－６は頸部から胴上部にかけての破片である。15－５は、内外面ともに摩耗が著しいため定かではないが、外面端部に沈線が一条巡り、ＬＲ単節縄文と思われる縄文帯を挟んで頸部に簾状文と思われる文様が施文されている。内面の調整は、横位のヘラナデか。15－６は、斜位のハケメ調整後、頸部付近に縦位の短沈線が複数垂下する。内面の調整は、横位のヘラナデである。15－７は、土師器特殊器台の接合部であり、稜が突出している。調整は、稜より上の外面が横ナデ、以下は内面も含め、丁寧なヘラミガキが施されている。

本住居跡の時期は、重複する第14号住居跡、隣接する第12号住居跡より古い古墳時代後期と思われる。

第16号住居跡（第32図）

第３区の69・70－86グリッドに位置する。西側は確認面の都合から検出できなかった。多くの遺構と重複関係にあり、ほぼ全面上位を第17号住居跡、カマド煙道部先端を第５号掘立柱建物跡のピット３、南壁中央から西寄りを第14号住居跡に切られており、西側で第８号住居跡の上位、南壁中央付近で第10号住居跡のカマドを切っている。また、北東部で単独ピット139・142と重複するが、これらのピットは覆土が埋め戻されていたことから本住居跡が新しいと思われる。

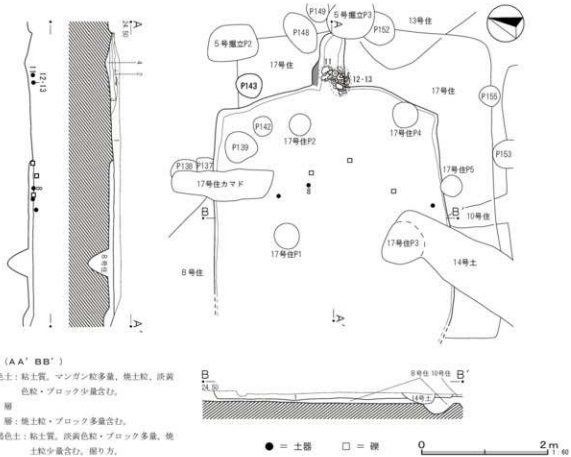
正確な規模は不明であるが、南北は3.72m、検出された東西は3.62mを測る。平面プランは、長方形を呈すると思われる。主軸方向は、Ｎ－71°－Ｅを指す。確認面からの深さは、最大0.13mと浅い。床面はやや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。覆土は黒褐色土による単一層であったが、自然堆積と思われる。掘り方はみられなかった。

カマドは、東壁中央に設けられており、袖部は確認されなかった。焚口部から燃焼部はやや凹み、煙道部は先端に向かって緩やかに立ち上がる。壁外への張り出しは、0.83mを測る。燃焼部北壁に被熱痕がみられた。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土層下に灰層、最下層に掘り方が確認された。

壁溝・ピット・貯蔵穴は、確認されなかった。

出土遺物（第33図）は、須恵器蓋（１）、坏（２～７）、甕（８）、瓶（９）、土師器坏（10）、甕（11・12）、台付甕（13）がある。このうち、３・７・10は確実に流れ込みであるが、その他にも須恵器には流れ込みのものがあるかもしれない。８は中央の床面直上、11～13と出土位置を図示していない２は、カマドから出土した。その他は、覆土からの出土である。

１～９は、須恵器である。１は、その法量から椀蓋と思われる。つまみを含む天井部中央を欠く。調整は、内外面ともにロクロナデ後、外面天井部付近に回転ヘラ削りが施されている。２～７は、坏である。本住居跡に伴う遺物で全形の分かるものは２のみであるが、口縁部は端部がやや外反し、体部は内



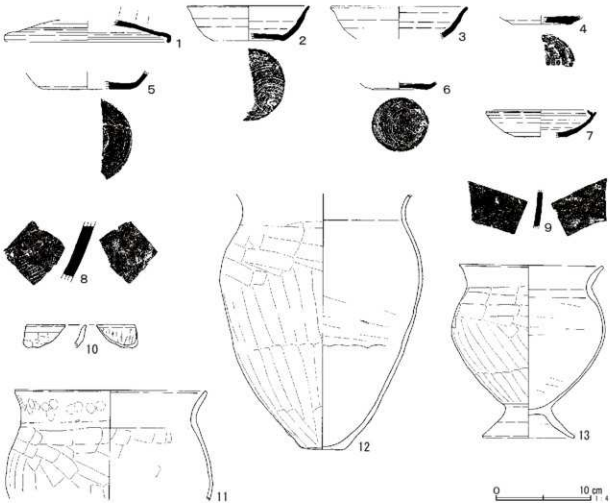
土層説明（A A' B B'）

1 黒褐色土：粘土質。マンガン粒多量、焼土粒、炭黄色粒・ブロック少量含む。
2 焼 土 層
3 灰　　層：焼土粒・ブロック多量含む。
4 灰黄褐色土：粘土質。炭黄色粒・ブロック多量、焼土粒少量含む。掘り方。

第32図　第16号住居跡

湾する。底部はやや上げ底である。調整は、内外面ともにロクロナデである。底面は、2・4・6が回転糸切痕を残し、6はヘラによる×印が刻まれている。底径のやや大きい5は坏としたが、椀の可能性もある。底面は全面回転ヘラ削りが施されている。流れ込みの7は、いわゆる坏Hである。重複する第8号住居跡からの流れ込みと思われる。8は、甕の胴下部片である。調整は、内外面ともにヘラナデであるが、外面は斜位、内面は横・斜位に施されており、外面はヘラナデ前のタタキ目が残る。9は、瓶の胴部中段の破片である。調整は、内外面ともにヘラナデであるが、外面は斜・横位、内面は横位に施されている。須恵器の産地は、1・5・6・9が南比企産、流れ込みの7は不明、その他は末野産である。3のみ酸化焔焼成である。

10～13は、土師器である。10は暗文坏であるが、第8号住居跡からの流れ込みと思われる。11・12は、長胴甕である。11は口縁部から胴部中段までの部位、12は口縁端部を欠く。全形の分かるものはないが、口縁部は断面形がくの字状、胴部は倒卵形を呈し、最大径を中段より上に持つ。底部は平底である。調整は、口縁部が内外面ともに横ナデであるが、11は指オサエもみられた。胴部はいずれも外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。11は口縁部外面下位、12は胴部内面の中段付近に輪積痕が残る。また、12は底部に近い胴下部外面の周囲に重ね焼きの影響と思われる別個体の器面が付着していた。13は、やや小振りでほぼ完形の台付甕である。器形は、長胴甕に似るが、胴部が詰まっており、下にハの字に外反する低い台部が付く。調整も長胴甕と同じであるが、台部は内外面ともに横ナデが施されている。



第33図　第16号住居跡出土遺物

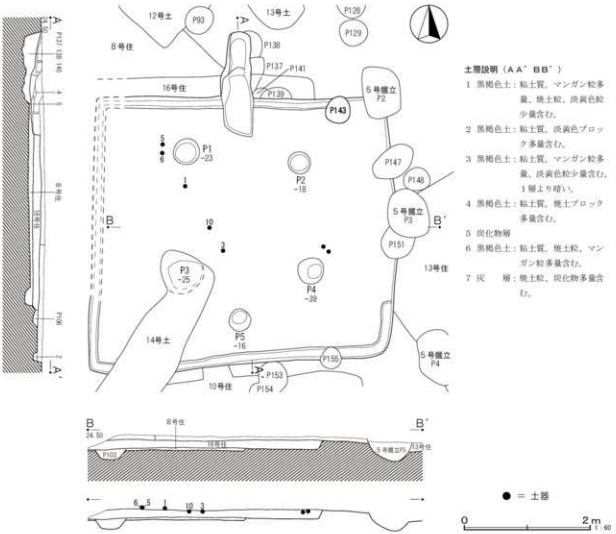
第15表　第16号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器　蓋	(17.5)	(2.35)	－	AFHN	灰白色	B	20%	南比企産。
2	須恵器　坏	(13.0)	3.75	7.5	ABHKL	褐灰色	B	20%	末野産。
3	須恵器　坏	(14.5)	(3.5)	－	ABDHLN	橙色	B	口～体20%	末野産。酸化焔焼成。
4	須恵器　坏	－	(1.0)	(6.2)	ABLN	灰色	B	底部25%	末野産。
5	須恵器　坏	－	(1.95)	(9.2)	ABFHKN	灰白色	B	体～底30%	南比企産。
6	須恵器　坏	－	(0.85)	6.0	ABFH	灰白色	B	底部100%	南比企産。底面ヘラ描×印有。
7	須恵器　坏	(10.1)	(2.9)	(5.6)	AB	灰白色	B	20%	産地不明。
8	須恵器　甕	－	－	－	ABL	灰色	B	胴下部片	末野産。
9	須恵器　甕	－	－	－	ABDFN	灰黄色	B	胴中段片	南比企産。
10	土師器　坏	－	－	－	ABHKN	橙色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。内面摩耗顕著。
11	土師器　甕	20.4	(11.6)	－	ABHIK	橙色	B	口～胴20%	口縁部外面輪積痕有。胴部内面摩耗顕著。
12	土師器　甕	－	(27.1)	4.6	ABDHK	にぶい褐色	B	胴～底70%	胴部内面輪積痕有、摩耗顕著。
13	土師器台付甕	15.3	18.5	9.8	ABCDHIN	赤褐色	B	ほぼ完形	胴部内面摩耗顕著。

本住居跡の時期は、８世紀後半を中心とする段階と思われる。

第17号住居跡（第34図）

第３区の69・70－85・86グリッドに位置する。ほぼ全形検出されたが、西壁中央から北西隅は、確認面の都合から検出できなかった。多くの遺構と重複関係にあり、南壁及び東壁沿いを除くほぼ全面で第８・16号住居跡、東壁中央付近で第13号住居跡、南壁中央付近で第10号住居跡のカマドを切っており、南西部を第14号土坑に切られている。また、カマド東側と東壁沿いを中心に第５号掘立柱建物跡と単独



第34図　第17号住居跡

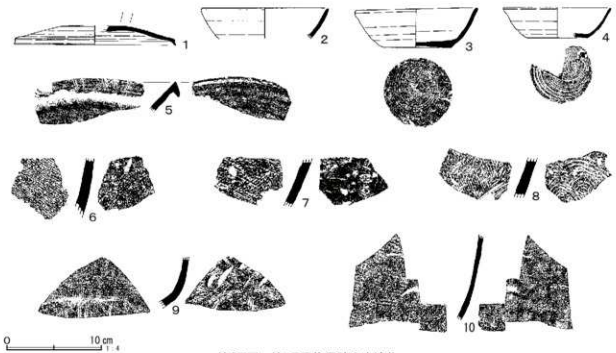
ピットが多数重複するが、第５号掘立柱建物跡と単独ピット137～139・141は本住居跡より古い。その他の新旧関係は不明である。

一辺4.5m前後の方形を呈する。主軸方向は、N－1°－Wを指し、ほぼ東西南北に軸が合っている。確認面からの深さは、最大0.07mと浅い。床面はやや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。覆土は黒褐色土による単一層であったが、自然堆積と思われる。掘り方はみられなかった。

カマドは、北壁中央に設けられており、袖部は確認されなかった。焚口部から燃焼部は、土坑状の掘り込みになっており、煙道部は先端に向かって緩やかに立ち上がる。壁外への張り出しは、1.03mを測る。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、中層に焼土を含む層、焚口部下層に炭化物層、燃焼部から煙道部の下層に灰層が確認された。

壁溝は、北東隅付近から東壁沿いの南東隅手前までを除き、全周すると思われる。幅は0.15m前後、床面からの深さは0.05mを測る。ピットは、５つ検出された。ピット１～４はその位置から主柱穴、ピット５は出入口に伴うものと思われる。貯蔵穴は、確認されなかった。

出土遺物（第35図）は、すべて須恵器であり、蓋（１）、坏（２～４）、甕（５～９）、瓶（10）がある。



第35図　第17号住居跡出土遺物

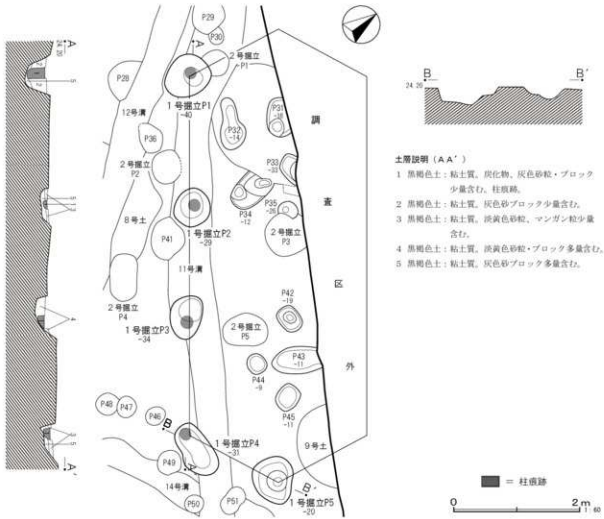
第16表　第17号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器 蓋	(17.2)	(2.05)	−	ABFN	灰色	B	25%	南比企産。
2	須恵器 坏	(13.4)	(3.2)	−	ABHLN	黄灰色	B	口～体15%	末野産。
3	須恵器 坏	13.0	4.3	7.4	ABEHKN	灰白色	B	75%	産地不明。
4	須恵器 坏	(11.4)	3.2	6.4	AFN	灰色	B	50%	南比企産。
5	須恵器 甕	−	−	−	ABF	灰色	B	口縁部片	南比企産。外面自然釉付着。
6	須恵器 甕	−	−	−	ABL	灰色	B	胴中段片	末野産。外面自然釉付着。
7	須恵器 甕	−	−	−	ABHL	灰白色	B	胴下部片	末野産。
8	須恵器 甕	−	−	−	ALN	灰色	B	胴下部片	末野産。
9	須恵器 甕	−	−	−	AF	灰色	B	胴下～底片	南比企産。
10	須恵器 瓶	−	−	−	ABFHN	褐灰色	B	胴下部片	南比企産。

1・5・6が北西部のピット1周辺、3・10は中央付近の床面直上、4はカマド、9はピット2、その他は覆土から出土した。

1は、その法量から椀蓋と思われる。つまみを欠く。調整は、内外面ともにロクロナデ後、外面天井部付近に回転ヘラ削りが施されている。2～4は、坏である。2が底部を欠くが、いずれも口縁部が直線的に立ち上がり、体部はやや内湾する。底部はやや上げ底である。調整は、内外面ともにロクロナデであり、底面に回転糸切痕を残す。5～9は、甕である。5は口縁部、6は胴部中段、7・8は胴下部、9は胴下部から底部にかけての破片である。調整は、5が内外面ともにロクロナデ、6・7は外面がタタキ、内面は6が斜位のヘラナデ、7は横・斜位のヘラナデである。8は外面がタタキ後、斜位のヘラナデが施され、内面はあて具痕が残る。9は外面がタタキ後、横・斜位のヘラナデが施され、内面は胴下部にあて具痕が残る。底部は横位のヘラナデが施されている。5・6は外面に自然釉が付着している。10は、瓶の胴下部片である。器壁が薄い。調整は、外面がタタキ後、ロクロナデと一部に斜位のヘラナデが施されている。内面はロクロナデであるが、あて具痕が一部残る。須恵器の産地は、2・6～8が末野産、3は不明、その他は南比企産である。

本住居跡の時期は、9世紀初頭を中心とする段階と思われる。



第36図　第１号掘立柱建物跡

2　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第36図）

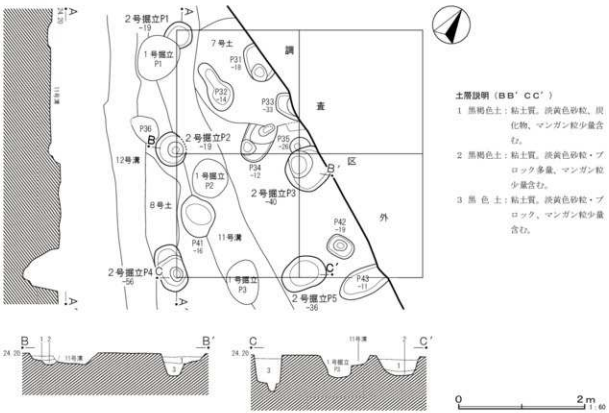
第２区の75・76－88グリッドに位置する。多くの遺構と重複しており、第２号掘立柱建物跡と第11号溝跡を切っていることは確認されたが、本建物跡内に位置し、直接切り合い関係のない第７・９号土坑との新旧関係は、不明と言わざるを得ない。また、多くの単独ピットとも重複するが、新旧関係及び本建物跡に伴うものか不明である。東側の桁は、調査区外にある。

２×３間の南北棟の側柱建物跡と思われる。ピットは、５つ検出された。規模は、桁行5.7m、梁行は推定で2.7mを測る。主軸方向は、N－54°－Wを指す。ピット５以外は柱痕跡が確認されたが、柱間とピットの法量・形態が一定でない。

出土遺物はないが、本建物跡の時期は、重複する第２号掘立柱建物跡と第11号溝跡より新しい古墳時代後期と思われる。

第２号掘立柱建物跡（第37図）

第２区の76－88グリッドに位置する。第１号掘立柱建物跡とほぼ同所に位置し、多くの遺構と重複する。第１号掘立柱建物跡に切られており、第11・12号溝跡と第８号土坑を切っていることは確認された



第37図　第２号掘立柱建物跡

が、本建物跡内に位置し、直接切り合い関係のない第７号土坑との新旧関係は、不明と言わざるを得ない。また、多くの単独ピットとも重複するが、新旧関係及び本建物跡に伴うものか不明である。北東部は、調査区外にある。

２×２間の総柱建物跡と思われる。ピットは、５つ検出された。規模は、桁・梁行ともに3.9mを測ると思われる。主軸方向は、N－33°－Wを指す。いずれのピットからも柱痕跡は認められなかったが、柱間は1.95m前後を測ると思われる。ピットの法量・形態は、第１号掘立柱建物跡と同じく一定でない。

出土遺物はないが、本建物跡の時期は、重複する第１号掘立柱建物跡より古く、第11・12号溝跡と第８号土坑より新しい古墳時代後期と思われる。

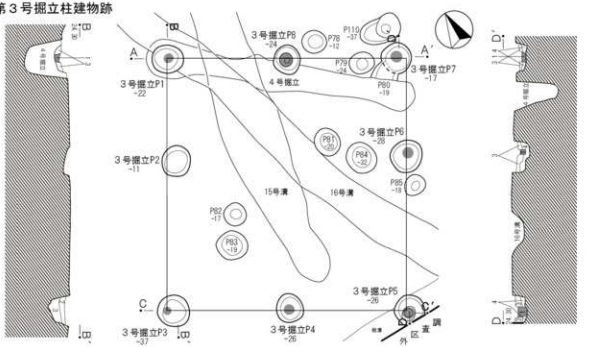
第３号掘立柱建物跡（第38図）

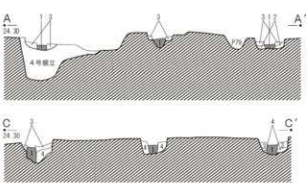
第３区の70～72－86～88グリッドに位置する。ほぼ全形検出されたが、ピット５の南側立ち上がりが調査区外にある。南東から北西部にかけて第16号溝跡、ほぼ中央を第15号溝跡に切られており、北側で第４号掘立柱建物跡の南側布掘りを切っている。また、本建物跡内に単独ピットがあるが、新旧関係及び本建物跡に伴うものか不明である。

２×２間の南北棟の側柱建物跡である。ピットは、８つ検出された。ピット２以外は柱痕跡が確認された。規模は、桁行4m、梁行3.8mを測る。主軸方向は、N－28°－Eを指す。柱間は、桁行の北側が1.5m、南側は2.5mを測る。梁行は、すべて1.9mである。確認面からの深さは一定でないが、すべて径0.5m前後の円形を呈する。

出土遺物に図示可能なものはないが、ピット１・８から古墳時代後期の甕、ピット２・４から土師器

第３号掘立柱建物跡



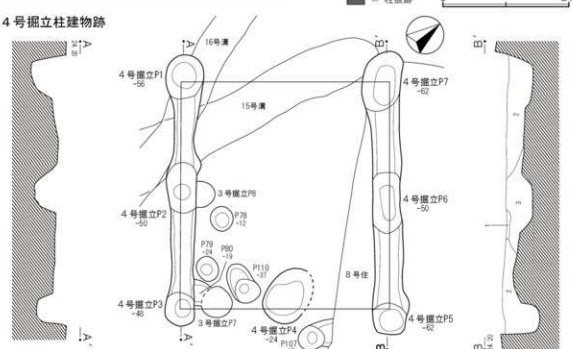


第３号掘立柱建物跡
土層説明（AA' BB' CC' DD'）
1 黒 色 土：粘土質，淡黄色粒少量含む，柱痕跡。
2 黒褐色土：粘土質，淡黄色粒・ブロック少量含む。
3 黒褐色土：粘土質，淡黄色粒・ブロック多量含む。
4 黒褐色土：粘土質，灰白色砂ブロック多量含む。

第４号掘立柱建物跡
土層説明（BB'）
1 黒褐色土：粘土質，マンガン粒多量，淡黄色粒微量含む。
2 黒褐色土：粘土質，マンガン粒多量，淡黄色粒・ブロック少量含む。
3 黒褐色土：粘土質，淡黄色粒・ブロック，マンガン粒多量含む。

＝ 柱痕跡　0　2m　1:60

第４号掘立柱建物跡



第38図　第３・４号掘立柱建物跡

有段口縁坏、ピット３からは土師器有段口縁坏と坏蓋模倣坏の小片が出土している。

本建物跡の時期は、重複する第４号掘立柱建物跡より新しい古墳時代時代後期と思われる。

第４号掘立柱建物跡（第38図）

第３区の70・71－86・87グリッドに位置する。本報告で全形が検出された唯一の掘立柱建物跡である。本建物跡は、基礎に布掘り工法が採用されており、南側布掘りの西側で第15・16号溝跡、ほぼ全面で第３号掘立柱建物跡、北側布掘りは西端で第15号溝跡、ほぼ全面で第８号住居跡と重複するが、すべて上位を切られていたのみであり、残存状態は比較的良好であった。また、本建物跡内に位置する単独ピットは、新旧関係が不明であるが、本建物跡に伴うものではないと思われる。

２×２間の南北棟の側柱建物跡である。規模は、桁行3.6m、梁行3.3mを測る。主軸方向は、N－53°－Wを指す。南北の布掘りは、長さ4.4m、幅0.4m前後を測り、計３つのピットがほぼ等間隔に掘り込まれていた。確認面からの深さは、浅いもので0.48m、深いもので0.62mを測り、他の建物跡に比べて深い。南北の布掘り東側中間にあるピット４は、その位置から本建物跡に伴うものと判断したが、対面に同様のピットが確認されなかったことから伴わない可能性もある。南側の布掘りは覆土を図示できなかったが、北側も含め、柱痕跡はみられず、埋め戻されていた。

出土遺物に図示可能なものはないが、ピット１・８から古墳時代後期の土師器甕、ピット２・４から土師器有段口縁坏、ピット３からは土師器有段口縁坏と坏蓋模倣坏の小片が出土している。

本建物跡の時期は、重複する第８号住居跡と第３号掘立柱建物跡より古い古墳時代後期と思われる。

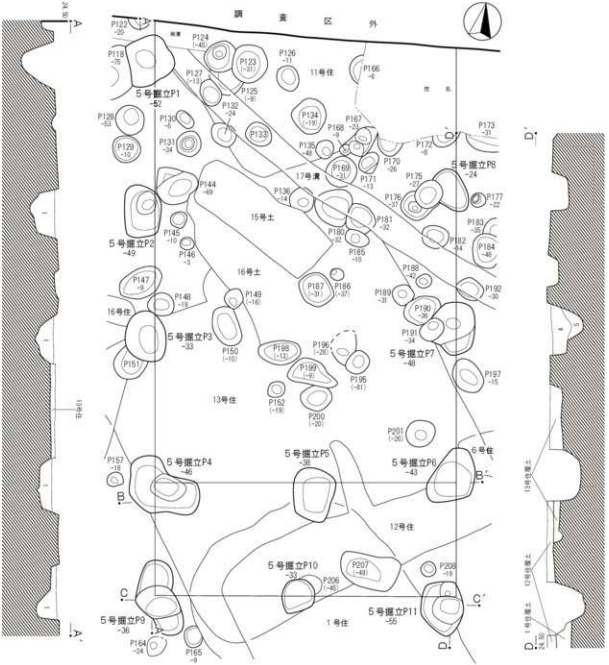
第５号掘立柱建物跡（第39図）

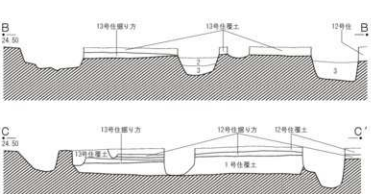
第３区の68・69－85～87グリッドに位置する。多くの遺構と重複するが、直接切り合い関係にある遺構では第17号溝跡にピット１の上位を切られている以外、本建物跡がすべての遺構を切っている。本建物跡内に位置し、直接切り合い関係のない第15・16号土坑との新旧関係は、不明と言わざるを得ない。また、多くの単独ピットとも重複するが、新旧関係及び本建物跡に伴うものがあるか不明である。北側の梁は調査区外にあり、東側桁の北側は撹乱により欠く。

２×３間以上の身舎に南庇が付く南北棟の大型側柱建物跡である。ピットは、11基検出された。ピット１～８が身舎、ピット９～11が庇である。身舎の規模は、桁行が7.4m以上、梁行は4.8mを測る。庇は身舎とは1.8mの距離に設けられている。主軸方向は、N－10°－Wを指し、ほぼ東西南北に軸が合っている。身舎の柱間は、桁行がピット２・３間とピット７・８間が2.1mと短いが、その他は2.4mで等間隔である。梁行は、2.4mで等間隔である。ピットの平面プランは、様々であるが、確認面からの深さは0.4m以上のものが多い。覆土は図示できなかったものもあるが、いずれも柱痕跡はみられず、抜き取られている状況であった。

出土遺物（第40図）は、須恵器坏（１～３）、甕（４）、弥生時代中期後半の弥生土器壺（５・６）、甕（７）があるが、すべて流れ込みと思われる。１・４はピット４、２はピット６、３はピット７、流れ込みの５～７はピット５から出土した。

１～３は、須恵器坏の体部から底部までに収まる部位である。調整は、内外面ともにロクロナデである。底面は１が回転糸切痕を残し、２・３は大半を欠くが、その底径の大きさから回転糸切後に外周ヘラ削りが施されていたと思われる。４は、甕の胴下部片である。調整は、外面がタタキ、内面は横・斜





土層説明（AA′ BB′ DD′）

1 褐灰色土：シルト質。マンガン粒多量。焼土粒少量含む。
2 黒褐色土：粘土質。マンガン粒多量。淡黄色粒、炭化物少量含む。
3 黒褐色土：粘土質。マンガン粒多量。淡黄色粒・ブロック少量含む。
4 黒褐色土：粘土質。マンガン粒多量。淡黄色粒・ブロック。炭化物少量含む。
5 黒 色 土：粘土質。淡黄色粒・ブロック。マンガン粒多量含む。

0 2m

第39図　第５号掘立柱建物跡

第40図　第５号掘立柱建物跡出土遺物

第17表　第５号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	須恵器　坏	－	(0.9)	(6.5)	ABF	灰色	B	底部15%	P4出土。南比企産。
2	須恵器　坏	－	(1.05)	(8.8)	ABFN	褐灰色	B	底部15%	P6出土。南比企産。
3	須恵器　坏	－	(1.6)	(8.8)	AFN	灰色	B	体～底10%	P7出土。南比企産。
4	須恵器　甕	－	－	－	ABFN	灰色	B	胴下部片	P4出土。南比企産。内面自然釉付着。
5	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIKN	灰黄褐色	B	口縁部片	P5出土。中期後。内外面摩耗顕著。
6	弥生土器　壺	－	－	－	ABCIN	褐色	B	胴中段片	P5出土。中期後。外面摩耗顕著。
7	弥生土器　甕	－	－	－	ABDIK	黒褐色	B	胴中段片	P5出土。中期後。内外面摩耗顕著。

位のヘラナデである。内面に自然釉が付着している。須恵器の産地は、すべて南比企産である。５～７は、弥生土器である。５は壺の口縁部、６は壺の胴部中段、７は甕の胴部中段の破片である。５は口縁部外面にＬＲ単節縄文が施文され、以下の無文部は縦・斜位、内面は横位のヘラミガキ調整が施されている。６は外面の摩耗が著しいが、重四角文が描かれており、地文にカナムグラと思われる擬縄文が施文されている。以下の無文部は斜位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデ調整が施されている。７は外面にＬＲ単節縄文が施文され、内面は横位のヘラナデ調整が施されている。

本建物跡の時期は、重複する第16・17号住居跡との新旧関係から９世紀初頭以降としか言えない。

3　溝跡

第１号溝跡（第41図）

第１区の86－86・87グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

北東から南西方向に走るが、確認面の都合から南側付近で途切れている。両端は、いずれも調査区外に延びる。正確な規模は不明であるが、検出された長さは、6.25mである。幅は0.8m前後、確認面からの深さは概ね0.05～0.08mと浅いが、北東部の一段下がる箇所は0.16mとやや深い。断面形は逆台形状を呈する箇所が多いが、土層断面を観察した一段下がる箇所は、船底状を呈する。覆土は、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。土層は粘土質、下層は粘土であった。

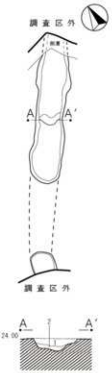
出土遺物はないが、本溝跡の時期は、同方向を走る他の溝跡との関係から古墳時代後期と思われる。

第２号溝跡（第41図）

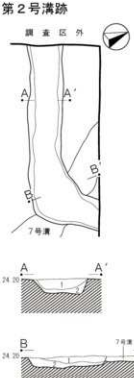
第２区の81・82－85・86グリッドに位置する。東側で第７号溝跡を切っている。

82－85・86グリッドでは北西から南東方向へ走るが、81－86グリッドで北へほぼ直角に曲がる。両端は、いずれも調査区外に延びる。検出された長さは、5.36mである。幅は概ね0.8m前後であるが、屈曲箇所は1.3m程と広い。確認面からの深さは、北西部が0.24mを測るが、屈曲箇所以北は0.15m前後と浅い。断面形は、逆台形状を呈する。覆土は、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

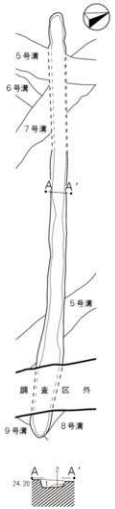
第１号溝跡



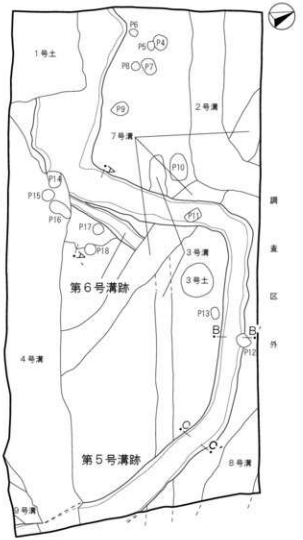
第２号溝跡

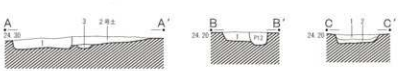


第３号溝跡



第５・６号溝跡





平面図：0　2m　1:100

断面図：0　2m　1:60

第１号溝跡

土層説明（ＡＡ′）

1　灰褐色土：粘土質，マンガン粒多量含む。
2　灰色粘土：灰褐色土，マンガン粒少量含む。

第２号溝跡

土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）

1　黒褐色土：粘土質，マンガン粒多量含む。
2　黒褐色土：粘土質，淡黄色砂粒・ブロック，マンガン粒多量含む。

第３号溝跡

土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）

1　灰 色 土：粘土質，マンガン粒多量，淡黄色砂少量含む。
2　灰 色 土：粘土質，淡黄色砂，マンガン粒多量含む。

第５・６号溝跡

土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′ ＣＣ′）

1　黒褐色土：粘土質，マンガン粒多量，淡黄色砂粒・ブロック，焼化物少量含む。
2　黒褐色土：粘土質，淡黄色砂粒・ブロック多量含む。
3　黒褐色土：粘土質，マンガン粒多量，淡黄色砂粒，焼化物少量含む。

第41図　第１～３・５・６号溝跡

出土遺物はないが、本溝跡の時期は、重複する溝跡との新旧関係などから古墳時代後期と思われる。

第３号溝跡（第41図）

第２区の79～81－86・87グリッドに位置する。多くの溝跡と重複するが、本溝跡が最も新しい。81－86グリッド中央付近では、確認面の都合から一部途切れている。

北西から南東方向へ走る。検出された長さは、11.22mである。幅は概ね0.45m前後を測るが、東側は0.7m程とやや広い。確認面からの深さは、0.1m前後と浅い。断面形は、逆台形状を呈する。覆土は、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物はないが、本溝跡の時期は、重複する遺構との新旧や同方向に走る溝跡との関係などから平安時代と思われる。

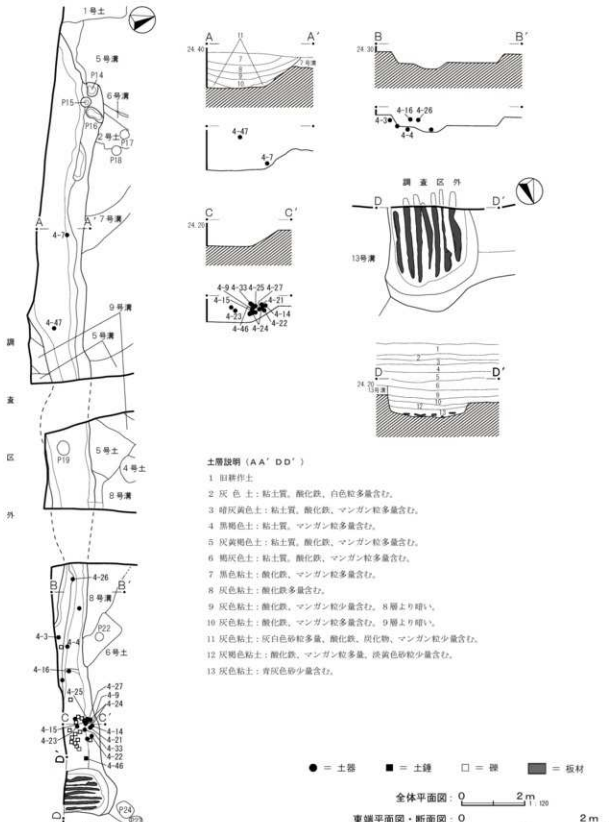
第４号溝跡（第42図）

第２区の77～82－87・88グリッドに位置する。多くの遺構と重複するが、本溝跡が最も新しい。

北西から南東方向へ走り、西端は調査区外の南西方向に延びると思われる。検出された長さは、埋設管のある未調査箇所も含めて31.44mである。幅は検出できた箇所が少ないが、78・79－87・88グリッド境付近が0.71mで狭いが、その他は概ね1.4m前後を測ると思われる。確認面からの深さ及び断面形は、西側が0.5m前後と深く、逆台形状を呈するが、東側は0.2～0.3mと浅くなり、78・79－88グリッドでは南側にテラス状の段を持つ。東端には径1.5m前後の円形を呈すると思われる土坑状の掘り込みが設けられており、底面に細長い板が南北方向に7枚敷かれた状態で確認された。板材の長さは、0.97mから1.38mまでに収まり、厚さはすべて１㎝未満であった。遺存状態が悪いため、取り上げることは困難であった。本施設の性格については、不明と言わざるを得ない。西端の81・82－87グリッド境付近では、立ち上がりにピット14～16があるが、本溝跡に伴う橋脚ピットの可能性もある。覆土は東端の板敷箇所も含め、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

本溝跡では、遺物が大量に出土した。出土遺物（第46～48図）は、須恵器蓋（４－１・２）、坏（４－３～６）、高台付皿（４－７）、高台付椀（４－８）、短頸壺（４－９）、瓶（４－10・41）、甕（４－11～40）、土師器坏（４－42）、甕（４－43～45）、土錘（４－46）、形象埴輪（４－47）がある。このうち、須恵器４－２と土師器、形象埴輪は確実に流れ込んであるが、多数出土した須恵器には流れ込みのものがあるかもしれない。４－７・47は西側、４－３・４・９・14～16・21～27・33・46は東側からの出土である。特に東側は、板敷施設に近い箇所から礫に混じって多数出土した。これらは主に覆土中層からの出土である。なお、出土位置を図示していない遺物は、主に覆土上層からの出土である。

４－１～41は、須恵器である。４－１・２は、蓋である。１は、つまみを含む天井部である。調整は、内外面ともにロクロナデであり、外面はつまみ周囲に回転ヘラ削りが施されている。流れ込みである４－２は、いわゆる坏Hの蓋である。調整は、内外面ともにロクロナデであるが、天井部の外面は回転ヘラ削り、内面はヘラナデが施されている。４－３～６は、坏である。全形の分かるものは４－３のみであるが、口縁端部が外反する。体部は４－３・６が内湾し、４－４・５は直線的に下る。底部はやや上げ底である。４－７は、高台付皿であるが、高台部を欠く。坏と同じく口縁端部が外反し、体部はほぼ直線的に下る。４－８は、高台付椀の体部から高台部までの部位である。短い高台がハの字に開き、端部が凹む。坏・高台付皿・高台付椀の調整は、内外面ともにロクロナデである。底面は、４－５が回転



土層説明（AA′ DD′）

1 旧耕作土
2 灰　色　土：粘土質。酸化鉄、白色粒多量含む。
3 暗灰黄色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
4 黒褐色土：粘土質。マンガン粒多量含む。
5 灰黄褐色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
6 褐灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
7 黒色粘土：酸化鉄、マンガン粒多量含む。
8 灰色粘土：酸化鉄多量含む。
9 灰色粘土：酸化鉄、マンガン粒少量含む。8層より暗い。
10 灰色粘土：酸化鉄、マンガン粒多量含む。9層より暗い。
11 灰色粘土：灰白色砂粒多量、酸化鉄。炭化物、マンガン粒少量含む。
12 灰褐色粘土：酸化鉄、マンガン粒多量。淡黄色砂粒少量含む。
13 灰色粘土：青灰色砂少量含む。

● = 土器　■ = 土錘　□ = 礫　▬ = 板材

全体平面図：0　2m　1:120

東端平面図・断面図：0　2m　1:60

第42図　第４号溝跡

糸切後に外周ヘラ削り、4－8は高台貼付後に全面回転ヘラ削りが施されているが、その他はすべて回転糸切痕を残す。4－5は、その底径の大きさも含め、他よりも古く、流れ込みの可能性が高い。4－3・4は、酸化焔焼成である。4－9は、短頸壺の口縁部から肩部までの部位である。口縁部は開きが小さく、頸部はほぼ直立に近い。肩部以下を欠くが、その器形から大きく膨らむと思われる。調整は、口縁部から頸部が内外面ともにロクロナデ、肩部の外面はタタキ、内面はあて具痕が残る。口縁端部の外面と頸部の内外面に自然釉が付着している。4－10・41は、瓶である。10は底部、41は胴下部片である。10は高台を欠く。調整は内外面ともにロクロナデであるが、41は外面下位に回転カキ目が巡る。4－11～40は、甕である。4－11は口縁部から頸部にかけて、4－12・13は頸部、4－14は頸部から胴上部にかけて、4－15～19は胴上部、4－20・21は胴部中段、4－22・39は胴部中段から下部にかけて、4－23～38・40は胴下部の破片である。4－11～13はロクロナデ調整であり、4－11・12は外面に横位の沈線と波状文が描かれている。胴上部以下の破片で4－14～17・20～30は外面がタタキ、4－18・31～40は外面がヘラナデ、4－19のみ内外面ともにロクロナデ調整である。外面タタキ調整の4－24・27は、回転カキ目が巡る。4－15・21・25・27は、同一個体である。外面タタキ調整の内面は、あて具痕を残すもの（4－14・15・20～27・29）とヘラナデが施されているもの（4－16・17・28・30）がある。ヘラナデは4－16のみ斜位、その他は横・斜位に施されているが、4－17・30はあて具痕が一部残る。外面ヘラナデ調整の内面は、4－40のみあて具痕が残るが、その他はすべて外面と同じくヘラナデである。ヘラナデは、4－18が内外面ともに横位、4－31は外面が横位、内面は横・斜位、4－32・38は外面が横・斜位、内面は斜位、4－33・37は内外面ともに横・斜位、4－34・35・39は外面が横・斜位、内面は横位、4－36は内外面ともに斜位に施されている。4－33・34・36・38～40は外面にタタキ、32・36・38・39は内面にあて具痕が一部残る。11・12の内面、15～18・24・25の外面、35の内外面には、自然釉が付着している。36は、分かりづらいが、内外面下位に木葉痕がみられた。須恵器の産地は、末野産が多いが、1・3・5・10・30・35～39・41は南比企産、12・32・40は不明である。

4－42～45は、古墳時代後期の土師器である。すべて流れ込みである。4－42は、暗文坏である。短い口縁部が外反し、体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は中央を欠くが、丸底と思われる。調整は、口縁部から体部の内外面が横ナデ、底部の外面はヘラ削りである。内面に放射状暗文が描かれている。4－43～45は、丸胴甕の胴部中段から底部までに収まる部位である。底部はほぼ平底である。調整は、摩耗が著しいが、外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。4－46は、中段付近が膨らむ土錘である。片端を欠く。4－47は、流れ込みの形象埴輪片である。その形態から人物埴輪の腕部と思われる。

本溝跡の時期は、9世紀後半を中心とする段階と思われる。

第5号溝跡（第41図）

第2区の80～82－86・87グリッドに位置する。多くの遺構と重複しており、第6・7・9号溝跡とピット11を切っているが、第3・4号溝跡と第1号土坑、ピット12に切られている。

北西から南東方向へ大きく蛇行しながら走る。82－86・87グリッドでは北西から南東方向に走るが、81・82－86・87グリッド境で北東方向へ直角に曲がり、81－86グリッド北側で再度南東方向へ直角に曲がる。そして、80－86グリッド以降は南方向に走る。両端は、いずれも調査区外へ延びる。検出された長さは21.03mである。幅は、82－86・87グリッド付近が1.8m程で広いが、その他は概ね0.7m前後である。

確認面からの深さは、0.15m前後を測る。断面形は、逆台形状を呈する。覆土は単一層の箇所もみられたが、自然堆積と思われる。

出土遺物（第48図）で図示可能なものは、須恵器甕の胴部中段の破片（5－1）のみである。調整は、外面がタタキ後、斜位のヘラナデ、内面はあて具痕が残る。末野産である。

本溝跡の時期は、重複する第6・7・9号溝跡より新しく、第1号土坑より古い古墳時代後期と思われる。

第6号溝跡（第41図）

第2区の81－86・87グリッドに位置する。多くの遺構と重複するが、本溝跡が最も古い。

北東から南西方向へ走る。遺存状態が悪いため、検出された長さは2.18mと短い。幅は北東が0.5m前後で広く、南西は0.3m未満と狭い。第2号土坑底面から確認された深さは、0.06m前後を測る。断面形は、船底状を呈する。覆土は黒褐色土による単一層であったが、自然堆積と思われる。

出土遺物（第48図）で図示可能なものは、土師器坏身模倣坏（6－1）のみである。口縁部が内傾し、体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は大半を欠くが、丸底と思われる。調整は、口縁部から体部の内外面は横ナデ、底部外面はヘラ削りである。

本溝跡の時期は、重複する同時期の遺構で最も古い古墳時代後期と思われる。

第7号溝跡（第43図）

第2区の80～82－85～87グリッドに位置する。多くの溝跡と重複しており、第6号溝跡とピット11を切っているが、第2～5号溝跡に切られている。

北西から南東方向へ走る。北西端は調査区外に延びる。検出された長さは、8.25mである。幅は、81－86・87グリッド境付近が0.5m程と狭いが、その他は概ね0.8m前後である、確認面からの深さは、0.15m前後を測る。断面形は、逆台形状を呈する。覆土は単一層の箇所もみられたが、自然堆積と思われる。

出土遺物（第48図）で図示可能なものは、土師器坏（7－1）、鉢（7－2）がある。

7－1は、土師器有段口縁坏である。複数の段を持つ口縁部がやや受け口状を呈する。体部と底部の境に明確な稜を持ち、底部は平底に近い。調整は、口縁部から体部の内外面は横ナデ、底部外面はヘラ削りである。7－2は、土師器鉢である。最大径を持つ口縁部が外反し、体部はやや内湾する。底部は平底である。調整は、口縁部が内外面ともに横ナデ、体部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。

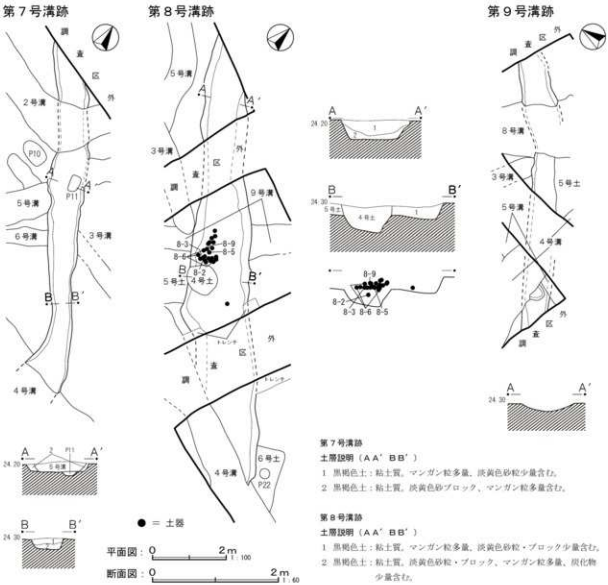
本溝跡の時期は、重複する第2・5号溝跡より古く、第6号溝跡より新しい古墳時代後期と思われる。

第8号溝跡（第43図）

第2区の78～80－86～88グリッドに位置する。多くの遺構と重複しており、第9号溝跡と第5・6号土坑を切っているが、第3・4溝跡と第4号土坑に切られている。

北西から南東方向へ走る。北西端は調査区外に延びる。検出された長さは、埋設管のある未調査箇所も含めて9.61m、幅は北西部が1.1m、南東部は1.6m前後を測り、北西から南東に向かって広くなる。確認面からの深さは北西部が0.3m、南東部は0.16m前後測り、北西から南東に向かって浅くなる。断面形は、逆台形状を呈する。覆土は単一層の箇所もみられたが、自然堆積と思われる。

本溝跡では、遺物が比較的多く出土した。出土遺物（第48・49図）は、すべて土師器であり、坏（8－1～3）、甕（8－4～10）、甑（8－11）がある。8－2・3・5・6・9は、79－87グリッドの第



第43図　第７～９号溝跡

４号土坑との重複箇所北西からまとまって出土した。出土位置を図示していない遺物も同グリッドからの出土である。

８－１～３は、土師器坏である。８－１・２は有段口縁坏、８－３は坏蓋模倣坏である。８－１は、やや大型である。いずれも口縁端部がやや外反し、体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は、８－１が中央を欠くが、おそらく丸底と思われ、８－２・３は平底に近い。調整は、口縁部から体部の内外面が横ナデ、底部の外面はヘラ削りである。８－４～10は、土師器甕である。８－４～８は長胴甕、８－９・10は丸胴甕である。長胴甕は全形の分かるものがなく、すべて口縁部から胴下部までに収まる。８－６のみ器壁が厚く、口縁部が外反するが、その他は短い口縁部が逆ハの字に開く。いずれも口縁部に最大径を持ち、８－５・６は中段に段、端部に凹みを持つ。胴部はほとんど膨らまず、下位に向かってすぼまる。丸胴甕は、やや小振りで口縁部の開きが小さい。球形を呈する胴部中段に最大径を持つ。底部は中央が出っ張る。８－11は、土師器甑である。底部を欠く。最大径を持つ口縁部の開きが小さく、胴部は上位が膨らみ、下位に向かってすぼまる。甕・甑の調整は、口縁部が内外面ともに横ナデ、胴部は外

面がヘラ削り、内面はヘラナデである。なお、8－10は胴部内面の計測が不可能であったが、横位のヘラナデが施されている。8－4・7は口縁部にヘラによる刻みがみられ、8－7は口縁部にもヘラ削りが一部施されている。また、8－7・11は胴部内面に輪積痕が一部残る。

本溝跡の時期は、重複する第9号溝跡と第5号土坑より新しい古墳時代後期と思われる。

第9号溝跡（第43図）

第2区の79・80－86・87グリッドに位置する。多くの遺構と重複するが、本溝跡が最も古い。

北東から南西方向へ走る。両端は、いずれも調査区外に延びる。検出された長さは7.2m、幅は概ね0.7m前後である。確認面からの深さは、北東部が0.13m前後であるが、南西部は0.06mと浅くなる。第4号溝跡との重複箇所ではピット状の掘り込みがみられた。溝底面からの深さは、0.16mを測る。断面形は、船底状を呈する。覆土は図示できなかったが、黒褐色土による単一層であり、自然堆積と思われる。

出土遺物はないが、本溝跡の時期は、重複する遺構との新旧や同方向に走る溝跡との関係などから同時期の遺構で最も古い古墳時代後期と思われる。

第10号溝跡（第44図）

第2区の77・78－87グリッドに位置する。東端で第11・12号溝跡と重複しており、発掘調査段階では新旧関係を把握できなかったが、同方向を走る他の溝跡との関係から本溝跡が新しいと思われる。西端は、北半分が調査区外にあるが、立ち上がると思われる。78－87グリッドでは、南側立ち上がりを試掘調査により欠く。ピット20との新旧関係は、不明である。

北西から南東方向へ走る。検出された長さは7.42m、幅は概ね0.4m前後である。確認面からの深さは、土層断面を観察した箇所では0.12mを測るが、その他の箇所は0.1m未満で浅い。断面形は、船底状を呈する。覆土は、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物はないが、本溝跡の時期は、同方向に走る溝跡との関係などから平安時代と思われる。

第11号溝跡（第44図）

第2区の75～77－87～89グリッドに位置する。第14号溝跡と第7号土坑を切っているが、第1・2号掘立柱建物跡に切られている。77－87・88グリッド境付近では、第13号溝跡と重複するが、同方向を走る他の溝跡との関係から本溝跡が新しいと思われる。また、多くの単独ピットとも重複するが、新旧関係は不明である。

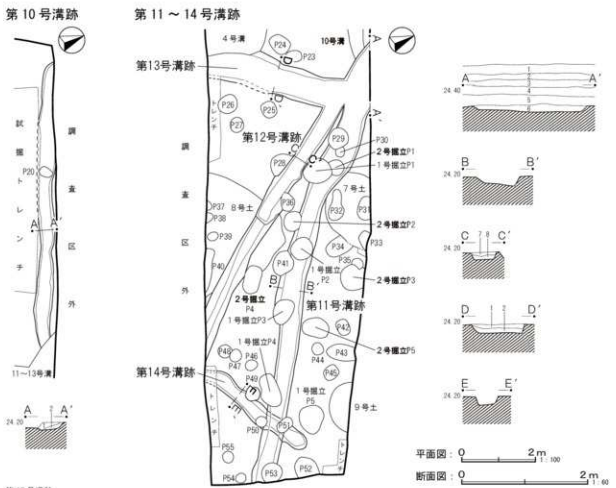
北西から南東方向へ走り、77－87グリッドで南側をほぼ同方向に走る同時期の第12号溝跡に接続する。両端は、いずれも調査区外に延びる。検出された長さは11.04m、幅は概ね0.6m前後である。確認面からの深さは、0.1m前後を測る。断面形は、逆台形状を呈する。覆土は第12号溝跡との接続箇所以外図示できなかったが、黒褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

出土遺物に図示可能なものはないが、古墳時代後期の土師器有段口縁坏や坏蓋模倣坏、北武蔵型坏の小片が出土している。

本溝跡の時期は、重複する第1・2号掘立柱建物跡より古く、第13・14号溝跡と第7号土坑より新しい古墳時代後期と思われる。

第12号溝跡（第44図）

第2区の76・77－87～89グリッドに位置する。第8号土坑を切っているが、第2号掘立柱建物跡に切



第 10 号溝跡
土層説明（A A′）
1 黒褐色土：粘土質。淡黄色粒多量、マンガン粒少量含む。
2 灰色シルト：青灰色砂粒、マンガン粒多量含む。

第 11・12 号溝跡
土層説明（A A′ C C′）
1 耕作土
2 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、白色粒多量含む。
3 暗灰黄色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
4 黒褐色土：粘土質。マンガン粒多量含む。
5 灰黄褐色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
6 黒褐色土：粘土質。酸化鉄、淡黄色砂粒・ブロック、マンガン粒多量含む。
7 黒褐色土：粘土質。酸化鉄、淡黄色砂粒、マンガン粒少量含む。
8 黒褐色土：粘土質。淡黄色砂粒・ブロック多量、酸化鉄、マンガン粒少量含む。

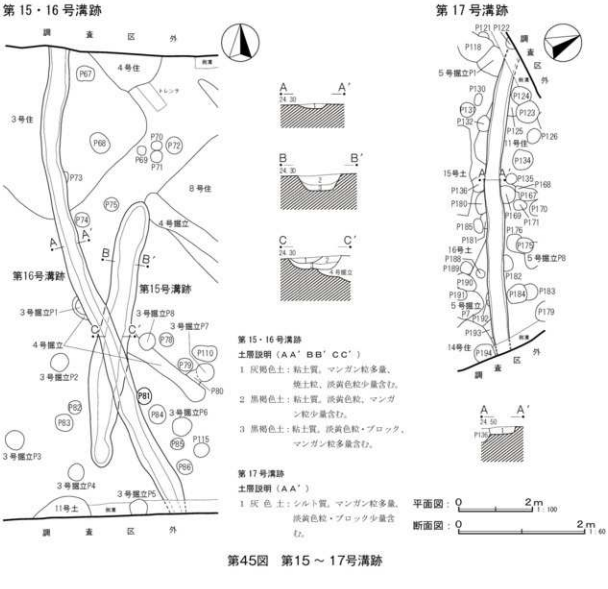
第 13 号溝跡
土層説明（D D′）
1 黒褐色土：粘土質。淡黄色砂粒、マンガン粒少量含む。
2 灰褐色土：粘土質。淡黄色砂粒、マンガン粒少量含む。

第44図　第10 ～ 14号溝跡

られている。第11号溝跡と同じく77－87・88グリッド境付近で第13号溝跡と重複するが、同方向を走る他の溝跡との関係から本溝跡が新しいと思われる。また、いくつかの単独ピットと重複するが、新旧関係は不明である。

北西から南東方向へ走り、77－87グリッドで北側をほぼ同方向に走る同時期の第11号溝跡に接続する。両端は、いずれも調査区外に延びる。検出された長さは8.45m、幅は概ね0.5m前後である。確認面からの深さは、北西部が0.1m、76－88グリッド中央よりやや西寄りの一段下がる箇所で0.22m、南東部は0.2m前後を測る。断面形は、逆台形状を呈する。覆土は第11号溝跡との接続箇所以外、水平に堆積していたが、自然堆積と思われる。

出土遺物（第49図）は少ないが、須恵器甕（12－1）、瓶（12－2）、土師器坏（12－3）がある。この他にも図示不可能であるが、土師器有段口縁坏や北武蔵型坏の小片が出土している。



第45図　第15～17号溝跡

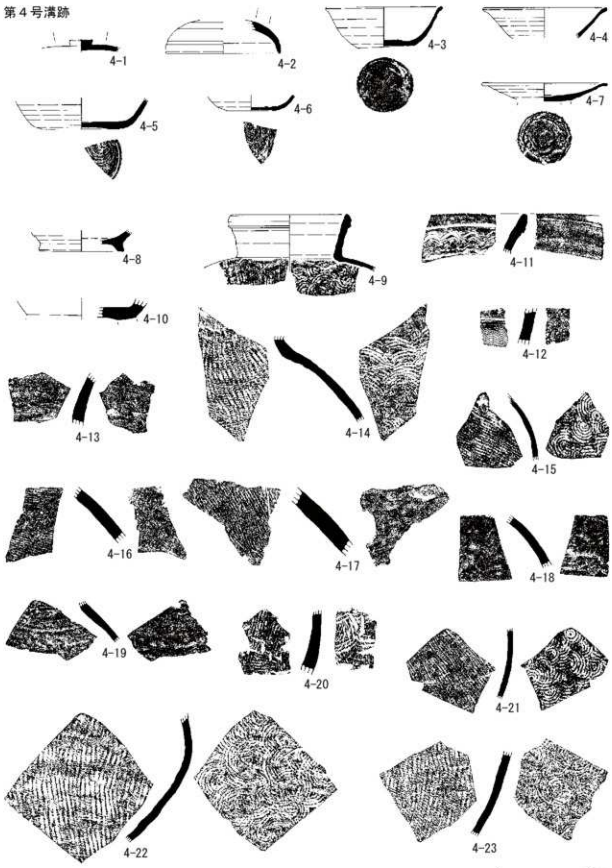
12－1は、須恵器甕の肩部片である。調整は、外面がタタキ、内面は横・斜位のヘラナデである。外面に自然釉が付着している。12－2は、須恵器瓶の胴上部片である。調整は、内外面ともにロクロナデである。須恵器の産地は、12－1が末野産、12－2は不明である。12－3は、土師器北武蔵型坏である。口縁部がほぼ直立し、体部と底部の境に弱い稜を持つ。底部は中央を欠くが、丸底と思われる。調整は、口縁部から体部の内外面が横ナデ、底部の外面はヘラ削りである。

本溝跡の時期は、重複する第2号掘立柱建物跡より古く、第13号溝跡と第8号土坑より新しい古墳時代後期と思われる。

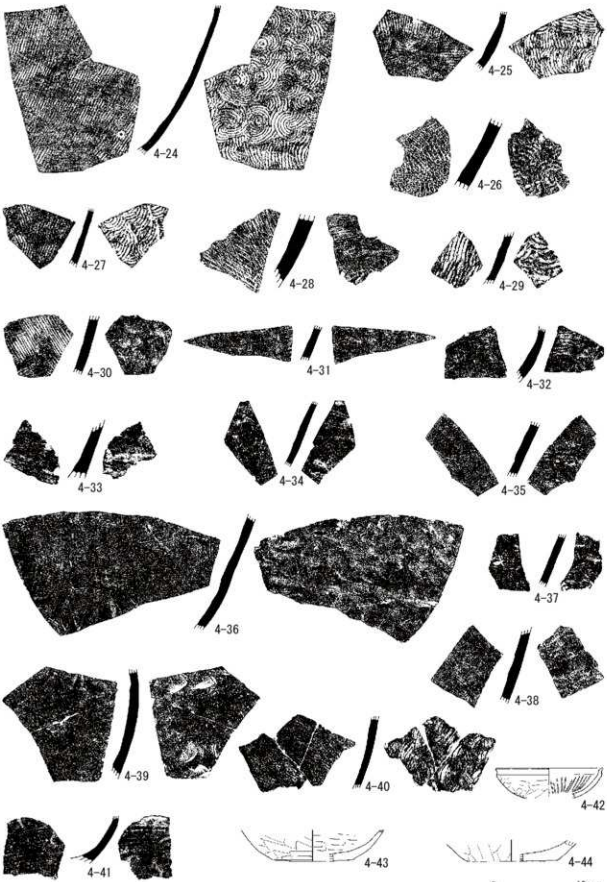
第13号溝跡（第44図）

第2区の77－87・88グリッドに位置する。南西部の立ち上がりを第4号溝跡に切られており、77－87・88グリッド境付近で第11・12号溝跡と重複するが、同方向を走る他の溝跡との関係から本溝跡が古いと思われる。

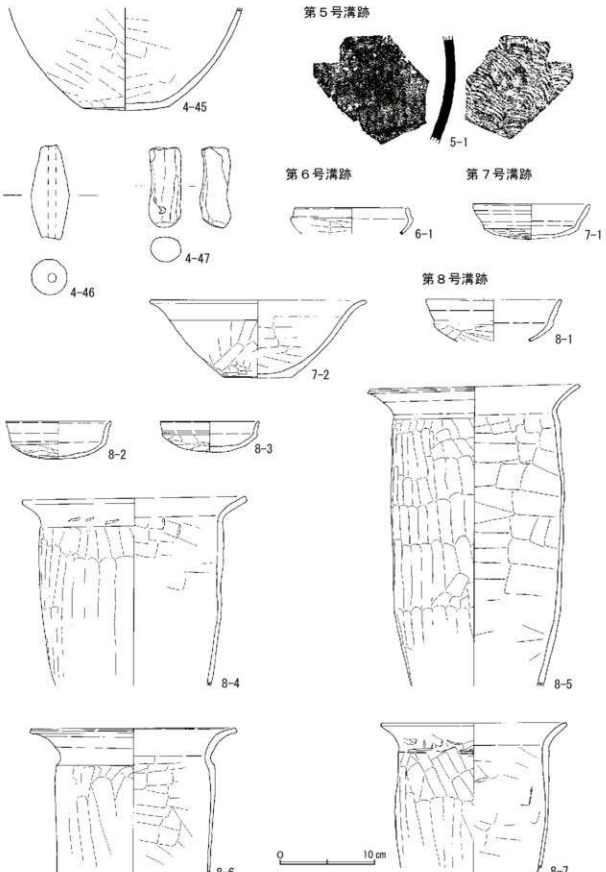
北東から南西方向へ走る。南端は調査区外に延びる。検出された長さは3.39m、幅は概ね0.9m前後である。確認面からの深さは、第11・12号溝跡との重複箇所で0.1m、土層断面を確認した箇所で0.14m、



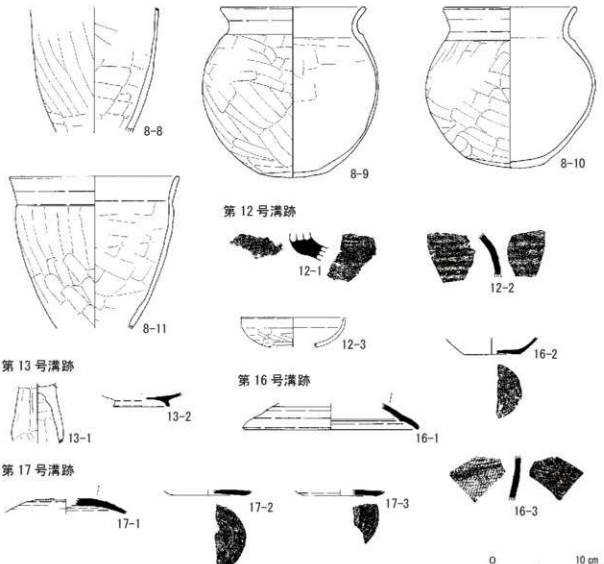
第46図　溝跡出土遺物（１）



第47図　溝跡出土遺物（2）



第48図　溝跡出土遺物（３）



第49図　溝跡出土遺物（４）

南端の調査区との境で0.17mを測る。断面形は、横長の逆台形状を呈する。覆土は、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第49図）は少なく、本溝跡に伴う図示可能なものは土師器高坏（13－１）のみである。また、図示不可能であったが、土師器坏身模倣坏の小片も出土した。この他にも流れ込みで平安時代の須恵器高台付皿（13－２）が出土したが、重複する第４号溝跡からの流れ込みと思われる。

13－１は、土師器高坏の接合部から裾部を欠く脚部までの部位である。脚部が短く、棒状を呈するが、下位がやや膨らむ。調整は、内外面ともにヘラナデである。13－２は、須恵器高台付皿の体部から高台部までの部位である。短い高台がハの字に開く。調整は、内外面ともにロクロナデであり、底面は図示しなかったが、回転糸切痕を残す。末野産である。

本溝跡の時期は、重複する第11・12号溝跡より古い古墳時代後期と思われる。

第14号溝跡（第44図）

第２区の75・76－88・89グリッドに位置する。北東部上位を第11号溝跡に切られており、所々で単独

第18表　溝跡出土遺物観察表

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
4-1	第4号溝跡	須恵器　蓋	－	(1.35)	－	AFHN	灰色	B	天井部100%	南北企蓋。
4-2	第4号溝跡	須恵器　蓋	(12.2)	(3.55)	－	ABDHN	灰白色	B	15%	末野産？
4-3	第4号溝跡	須恵器　坏	(12.4)	4.35	6.1	ABF	灰色	B	60%	南北企蓋。酸化焔焼成。
4-4	第4号溝跡	須恵器　坏	(13.2)	(3.3)	－	ADHKLN	黒褐色	B	口～体30%	末野産。酸化焔焼成。
4-5	第4号溝跡	須恵器　坏	－	(3.25)	(8.1)	ABFN	灰色	B	体～底20%	南北企蓋。
4-6	第4号溝跡	須恵器　坏	－	(1.75)	(5.2)	ABDL	灰白色	B	体～底30%	末野産。
4-7	第4号溝跡	須恵器高台皿	13.4	(1.95)	－	ABHLN	灰白色	B	口～体95%	末野産。
4-8	第4号溝跡	須恵器高台椀	－	(2.3)	(9.0)	ABEL	黄灰色	B	体～高20%	末野産。
4-9	第4号溝跡	須恵器短頸壺	(12.6)	(6.0)	－	ABLN	褐灰色	B	口～肩30%	末野産。口縁端部外面、肩部内外面自然釉付着。
4-10	第4号溝跡	須恵器　瓶	－	(2.35)	－	ABFN	灰色	B	底部20%	南北企蓋。
4-11	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABLN	灰色	B	口～頸部片	末野産。内面自然釉付着。
4-12	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABN	灰色	B	頸部片	産地不明。内面自然釉付着。
4-13	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABLN	灰色	B	頸部片	末野産。
4-14	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABL	灰色	B	頸～胴上片	末野産。
4-15	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABHLN	灰色	B	胴上部片	末野産。外面自然釉付着。№21・25・27同一。
4-16	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABLN	黄灰色	B	胴上部片	末野産。外面自然釉付着。
4-17	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABL	灰色	B	胴上部片	末野産。外面自然釉付着。
4-18	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABLN	灰色	B	胴上部片	末野産。外面自然釉付着。
4-19	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABHLN	灰色	B	胴上部片	末野産。
4-20	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABHLN	灰白色	B	胴中段片	末野産。
4-21	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABHLN	灰色	B	胴中段片	末野産。№15・25・27同一個体。
4-22	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABL	灰色	B	胴中～下片	末野産。
4-23	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABL	灰色	B	胴下部片	末野産。
4-24	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABHL	灰色	B	胴下部片	末野産。外面自然釉付着。
4-25	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABDHL	灰色	B	胴下部片	末野産。外面自然釉付着。№15・21・27同一個体。
4-26	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABHLN	灰色	B	胴下部片	末野産。
4-27	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABHLN	灰色	B	胴下部片	末野産。№15・21・25同一個体。
4-28	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABDL	灰色	B	胴下部片	末野産。
4-29	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	AL	灰色	B	胴下部片	末野産。
4-30	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABFN	灰色	B	胴下部片	南北企蓋。
4-31	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABDEL	褐灰色	B	胴下部片	末野産。
4-32	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABDE	灰白色	B	胴下部片	産地不明。
4-33	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABHLN	灰色	B	胴下部片	末野産。
4-34	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABHLN	灰色	B	胴下部片	末野産。
4-35	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABFN	灰色	B	胴下部片	南北企蓋。内外面自然釉付着。
4-36	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABDFN	灰色	B	胴下部片	南北企蓋。内外面下位木葉痕有。
4-37	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABFHN	灰色	B	胴下部片	南北企蓋。
4-38	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABFN	灰色	B	胴下部片	南北企蓋。
4-39	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABFHN	灰色	B	胴中～下片	南北企蓋。
4-40	第4号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABDN	灰白色	B	胴下部片	産地不明。
4-41	第4号溝跡	須恵器　瓶	－	－	－	ABEFHN	灰黄褐色	B	胴下部片	南北企蓋。
4-42	第4号溝跡	土師器　坏	(11.4)	(3.2)	－	ABEHKN	橙色	B	40%	内面放射状暗文有。
4-43	第4号溝跡	土師器　皿	－	(3.4)	(8.5)	ABDEHIN	にぶい褐色	B	底部30%	内面摩耗顕著。
4-44	第4号溝跡	土師器　皿	－	(2.3)	(9.4)	ABCDHKN	橙色	B	底部30%	内面摩耗顕著。
4-45	第4号溝跡	土師器　甕	－	(10.9)	9.1	ABDN	にぶい黄橙色	B	胴～底40%	内外面摩耗顕著。
4-46	第4号溝跡	土　錘	最大長(5.05)cm、最大幅2.0cm、孔径0.4cm。重量(15.0)g。片端欠。							
4-47	第4号溝跡	形象埴輪	最大長(8.0)cm、最大幅(3.3)cm、最大厚(3.4)cm。胎土:ABHKN。腕部？							
5-1	第5号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABDHKLN	黄灰色	B	胴中段片	末野産。
6-1	第6号溝跡	土師器　坏	(11.9)	(2.8)	－	ABEHIKN	黒褐色	B	20%	
7-1	第7号溝跡	土師器　坏	(12.4)	3.7	－	ABHIK	黒褐色	B	30%	
7-2	第7号溝跡	土師器　鉢	(13.0)	8.25	(7.2)	ABDEHIKN	浅黄色	B	30%	
8-1	第8号溝跡	土師器　坏	(14.4)	(4.5)	－	ABDHIK	にぶい褐色	B	40%	
8-2	第8号溝跡	土師器　坏	11.2	4.0	－	ABCDIKN	にぶい橙色	B	完形	
8-3	第8号溝跡	土師器　坏	10.6	3.25	－	ABDHIKN	明赤褐色	B	口径定形	
8-4	第8号溝跡	土師器　甕	23.8	(20.1)	－	ABDHIKN	にぶい橙色	B	口～胴70%	口縁部外面ヘラ刻み有。胴部内面摩耗顕著。
8-5	第8号溝跡	土師器　甕	(22.4)	(32.0)	－	ABDEHN	にぶい黄橙色	B	口～胴70%	胴下部内面摩耗顕著。
8-6	第8号溝跡	土師器　甕	(22.0)	(15.7)	－	ABDEHKN	にぶい黄橙色	B	口～胴30%	
8-7	第8号溝跡	土師器　甕	19.8	(16.15)	－	ABDIN	にぶい黄橙色	B	口～胴45%	口縁部外面ヘラ刻み有。胴部内面輪積痕有。
8-8	第8号溝跡	土師器　甕	－	(13.3)	－	ABDIN	黒褐色	B	胴下部60%	内面摩耗顕著。
8-9	第8号溝跡	土師器　甕	15.4	18.15	(7.2)	ABCDHIN	灰白色	B	60%	胴部内面摩耗顕著。
8-10	第8号溝跡	土師器　甕	14.2	17.15	8.3	ABCHIN	にぶい黄橙色	B	80%	内外面摩耗顕著。
8-11	第8号溝跡	土師器　甑	(18.0)	(16.1)	－	ABDHKN	灰黄褐色	B	口～胴40%	胴部内面輪積痕有。
12-1	第12号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABL	黄灰色	B	肩部片	末野産。外面自然釉付着。
12-2	第12号溝跡	須恵器　瓶	－	－	－	ABD	黄灰色	B	胴上部片	産地不明
12-3	第12号溝跡	土師器　坏	(11.0)	(3.15)	－	ABDHIKN	橙色	B	30%	
13-1	第13号溝跡	土師器　高坏	－	(6.4)	－	ABDHI	橙色	B	接～脚40%	外面やや摩耗。
13-2	第13号溝跡	須恵器高台皿	－	(1.4)	(6.0)	ABHL	灰白色	B	体～高20%	末野産。
16-1	第16号溝跡	須恵器　蓋	(18.6)	(2.75)	－	ABHL	灰白色	B	口～体10%	末野産。
16-2	第16号溝跡	須恵器　坏	－	(1.8)	(6.0)	ABHL	灰白色	B	体～底45%	末野産。

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
16-3	第16号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABFN	灰色	B	胴中段片	南比企産。
17-1	第17号溝跡	須恵器　蓋	－	(1.65)	(6.6)	ABL	灰色	B	天～体20%	末野産。内面自然釉付着。
17-2	第17号溝跡	須恵器　坏	－	(0.6)	(7.8)	AFHN	灰色	B	底部45%	南比企産。
17-3	第17号溝跡	須恵器　坏	－	(0.65)	(7.8)	ABDFN	にぶい黄褐色	B	底部20%	南比企産。

ピットと重複するが、新旧関係は不明である。

北東から南西方向へやや蛇行しながら走る。南端は、調査区外に延びる。検出された長さは3.28m、幅は概ね0.4m前後である。確認面からの深さは、0.13m前後を測る。断面形は、逆台形状を呈する。覆土は図示できなかったが、黒褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

出土遺物はないが、本溝跡の時期は、重複する遺構との新旧や同方向に走る溝跡との関係などから第11号溝跡より古い古墳時代後期と思われる。

第15号溝跡（第45図）

第３区の71－86・87グリッドに位置する。71－86・87グリッド境付近で第16号溝跡に切られており、同所で第３・４号掘立柱建物跡、北端で第８号住居跡と第４号掘立柱建物跡の上位を切っている。

北端がやや東に傾くが、ほぼ南北方向に走る。検出された長さは、7.12mである。幅は概ね0.7m前後を測るが、第16号溝跡との重複箇所付近は１mと広い。確認面からの深さは、北半分は0.2m前後であるが、南半分は0.13mと浅い。断面形は、逆台形状を呈する。覆土はほぼ水平に堆積しており、下層はブロックを多量含むことから埋め戻された可能性が高い。

出土遺物はないが、本溝跡の時期は、重複する遺構との新旧関係から第16号溝跡より古い奈良・平安時代と思われる。

第16号溝跡（第45図）

第３区の71－84～87グリッドに位置する。いくつかの遺構と重複するが、本溝跡が最も新しい。

北西から南東方向にやや蛇行しながら走る。両端は、調査区外に延びる。検出された長さは12.98m、幅は概ね0.5m前後である。確認面からの深さは、北西部から第15号溝跡との重複箇所付近までは0.1m前後と浅いが、南東部は0.25m程でやや深い。断面形は、船底状を呈する。覆土は灰褐色土による単一層であったが、自然堆積と思われる。

出土遺物（第49図）は少なく、すべて須恵器であるが、本溝跡に確実に伴うものは須恵器坏（16－２）のみである。この他にも奈良時代の須恵器蓋（16－１）、古墳時代後期以降の須恵器甕（16－３）が出土しており、前者は流れ込みであるが、後者は本溝跡に伴う可能性がある。

16－１は、かえりを持つやや大型の蓋である。つまみを含む天井部を欠く。調整は、内外面ともにロクロナデであるが、体部外面上位は回転ヘラ削りが施されている。16－２は、坏の体部から底部までの部位である。体部は逆ハの字に開き、底部はやや上げ底である。器壁が薄い。調整は、内外面ともにロクロナデ、底面は回転糸切痕を残す。16－３は、甕の胴部中段の破片である。調整は、外面がタタキ、内面は横・斜位のヘラナデであるが、あて具痕がやや残る。須恵器の産地は、16－３が南比企産、その他は末野産である。

本溝跡の時期は、重複する遺構との新旧関係から第15号溝跡より新しい平安時代と思われる。

第17号溝跡（第45図）

第３区の68・69－85・86グリッドに位置する。多くの遺構と重複するが、本溝跡が最も新しい。

北西から南東方向に走る。両端は調査区外に延びる。検出された長さは8.09m、幅は概ね0.4m前後である。確認面からの深さは、土層断面を観察した箇所では0.11mを測るが、その他は0.1m未満で浅い。断面形は、逆台形状を呈する。覆土はシルト質の灰色土による単一層であったが、自然堆積と思われる。

出土遺物（第49図）は、須恵器蓋（17－1）、坏（17－2・3）があるが、流れ込みの可能性が高い。17－1は、蓋のつまみを欠く天井部から体部までの部位である。器壁が厚い。調整は、内外面ともにロクロナデであるが、天井部外面は回転ヘラ削りが施されている。内面は自然釉が付着している。17－2・3は、坏の底部である。いずれも器壁が薄く、やや上げ底である。底面は、回転糸切後に外周ヘラ削りが施されている。須恵器の産地は、17－1が末野産、その他は南比企産である。

本溝跡の時期は、重複する遺構との新旧関係から第5号掘立柱建物跡より新しい平安時代と思われる。

4　土坑

第1号土坑（第50図）

第2区の82－86・87グリッドに位置する。北側及び北東部で第5号溝跡を切っている。南側及び西側は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された範囲での南北は最大2.04m、東西は2.41mを測る。平面プランは、方形か長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大0.39mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面は東側が一段下がる。覆土は黒褐色土や灰色土、淡黄色砂による混合層が厚く堆積しており、埋め戻されたと思われる。

出土遺物に図示可能なものはないが、古墳時代後期の土師器坏身模倣坏と長胴甕口縁部の小片が出土していることから、本土坑の時期は第5号溝跡より新しい古墳時代後期と思われる。

第2号土坑（第50図）

第2区の81－86・87グリッドに位置する。第6号溝跡を切っているが、西側を第5号溝跡、南側を第4号溝跡に切られており、遺存状態が悪い。単独ピットとの新旧関係は、不明である。

正確な規模は不明であるが、検出された範囲での長軸は最大1.34m、短軸は1mを測る。平面プランは、楕円形か円形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大0.13mと浅い。立ち上がりは緩やかであり、底面は西側へやや傾斜する。覆土は黒褐色土による単一層であったが、自然堆積と思われる。

出土遺物に図示可能なものはないが、古墳時代後期の土師器坏身模倣坏の小片が出土していることから、本土坑の時期は第5号溝跡より古く、第6号溝跡より新しい古墳時代後期と思われる。

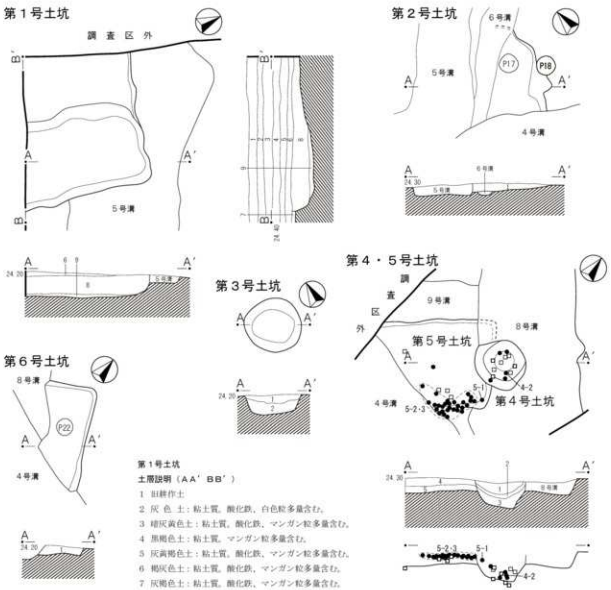
第3号土坑（第50図）

第2区の81－86グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は、みられない。

径0.9m前後の円形を呈する。確認面からの深さは、最大0.31mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面は西側へやや傾斜する。覆土はレンズ状に堆積していたが、ブロックを含んでいたことから埋め戻された可能性が高い。

出土遺物（第53図）で図示可能なものは、土錘（3－1）のみである。半分を欠くが、中段が膨らむ。

出土遺物に時期を特定できるものがないため、本土坑の時期は不明であるが、古墳時代後期か奈良・平安時代のどちらかと思われる。



第２号土坑
土層説明（AA′）
1 黒褐色土：粘土質。淡黄色砂粒、マンガン粒多量含む。

第３号土坑
土層説明（AA′）
1 黒褐色土：粘土質。マンガン粒多量、淡黄色砂粒・ブロック少量含む。
2 黒褐色土：粘土質。淡黄色砂粒・ブロック多量、マンガン粒少量含む。

第４・５号土坑
土層説明（AA′）
1 灰褐色土：粘土質。マンガン粒多量、酸化鉄、淡黄色粒少量含む。
2 淡黄色土：粘土質。マンガン粒多量含む。
3 黒褐色土：粘土質。マンガン粒多量、淡黄色粒少量含む。
4 黒褐色土：粘土質。マンガン粒多量含む。
5 黒褐色土：粘土質。マンガン粒多量、淡黄色砂粒・ブロック少量含む。

第６号土坑
土層説明（AA′）
1 黒褐色土：粘土質。淡黄色砂ブロック、炭化物、マンガン粒少量含む。

● ＝ 土器　□ ＝ 礫　0　2m　60

第50図　第１～６号土坑

第４号土坑（第50図）

第２区の79－87グリッドに位置する。第８号溝跡南側と第５号土坑北側の立ち上がりを切っている。径0.8m前後の円形を呈する。確認面からの深さは、最大0.42mを測る。立ち上がりは鋭角であり、南

側中段付近に稜を持つ。底面は東側へ傾斜する。覆土は、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第53図）は、須恵器長頸瓶（4－1）、土師器甕（4－2・3）があるが、後者は重複する第5号土坑からの流れ込みと思われる。4－2は、覆土下層から礫に混じって出土した。その他は覆土上層からの出土である。

4－1は、須恵器長頸瓶の頸部片である。調整は、内外面ともにロクロナデである。外面に自然釉が付着している。産地不明である。4－2は、土師器丸胴甕の口縁部から胴上部までの部位である。口縁部の開きが小さく、中段に段を持つ。胴部は大きく膨らむと思われる。4－3は、土師器長胴甕の底部である。平底である。甕の調整は、口縁部が内外面ともに横ナデ、胴部と底部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。4－2は口縁部に輪積痕が一部残る。

本土坑の時期は、重複する遺構との新旧関係などから奈良・平安時代と思われる。

第5号土坑（第50図）

第2区の79－87グリッドに位置する。西側で第9号溝跡を切っているが、南側は第4号溝跡、北側は第8号溝跡と第4号土坑に切られている。

正確な規模は不明であるが、検出された範囲での長軸は最大1.63m、短軸は1.39mを測る。平面プランは、長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大0.24mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はやや凹凸がみられた。覆土はほぼ水平に堆積していたが、自然堆積と思われる。

出土遺物（第53図）は、須恵器鉢（5－1）、土師器甕（5－2～4）、砥石（5－5）がある。5－1～3は、南東部の覆土上層からまとまって出土した。その他は北西部からの出土である。

5－1は、須恵器鉢の胴部中段から底部までの部位である。球形を呈し、底部は丸底である。中段に孔を持つが、下端のみ残存する。孔の外面周囲は、器面が剥離している。調整は、内外面ともにロクロナデである。外面に自然釉が付着している。南比企産である。5－2・3は接合関係が認められなかったが、同一個体で大型の土師器丸胴甕である。口縁部は端部が外反し、胴部は大きく膨らみ、上位に最大径を持つ。以下は下位に向かってすぼまる。底部は中央を欠くが、平底である。内外面ともに摩耗が著しく、胴部内面上位は器面が剥離している箇所が目立つ。5－4は、土師器長胴甕の底部である。平底である。甕の調整は、口縁部が内外面ともに横ナデ、胴部と底部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。5－5は、完形の砥石である。二面に線状痕が認められたが、ほぼ全面使用の片面は光沢を帯びるほど平滑である。砂岩製である。

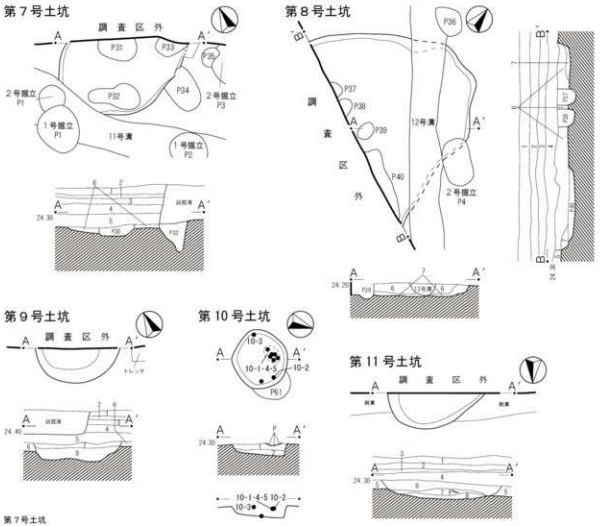
本土坑の時期は、重複する第8号溝跡より古く、第9号溝跡より新しい古墳時代後期と思われる。

第6号土坑（第50図）

第2区の78－87･88グリッドに位置する。南側を第4号溝跡、西側を第8号溝跡に切られている。ピット22との新旧関係は、不明である。

正確な規模は不明であるが、検出された範囲での長軸は最大1.65m、短軸は0.84mを測る。平面プランは、長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大0.15mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はやや凹凸がみられた。覆土は黒褐色土による単一層であったが、自然堆積と思われる。

出土遺物はないが、本土坑の時期は、重複する第8号溝跡より古い古墳時代後期と思われる。



第７号土坑

土層説明（ＡＡ′）

1 旧耕作土
2 灰 色 土：粘土質，酸化鉄，白色粒多量含む。
3 暗灰黄色土：粘土質，酸化鉄，マンガン粒多量含む。
4 黒褐色土：粘土質，マンガン粒多量含む。
5 灰黄褐色土：粘土質，酸化鉄，マンガン粒多量含む。
6 黒褐色土：粘土質，酸化鉄，マンガン粒多量，淡黄色砂粒少量含む。

第８号土坑

土層説明（ＡＡ′ＢＢ′）

1 旧耕作土
2 灰 色 土：粘土質，酸化鉄，白色粒多量含む。
3 暗灰黄色土：粘土質，酸化鉄，マンガン粒多量含む。
4 黒褐色土：粘土質，マンガン粒多量含む。
5 灰黄褐色土：粘土質，酸化鉄，マンガン粒多量含む。
6 黒褐色土：粘土質，マンガン粒多量，酸化鉄，淡黄色砂粒少量含む。
7 灰褐色土：粘土質，マンガン粒多量，淡黄色砂粒多量含む。

第９号土坑

土層説明（ＡＡ′）

1 旧耕作土
2 灰 色 土：粘土質，酸化鉄，白色粒多量含む。
3 暗灰黄色土：粘土質，酸化鉄，マンガン粒多量含む。
4 黒褐色土：粘土質，マンガン粒多量含む。
5 灰黄褐色土：粘土質，酸化鉄，マンガン粒多量含む。
6 灰褐色土：粘土質，酸化鉄，マンガン粒多量含む。
7 黒褐色土：粘土質，マンガン粒多量，焼土粒，淡黄色砂粒少量含む。
8 黒褐色土：粘土質，マンガン粒多量，焼土粒，淡黄色砂ブロック少量含む。

第 10 号土坑

土層説明（ＡＡ′）

1 褐灰色土：粘土質，マンガン粒多量，淡黄色粒少量含む。
2 灰黄褐色土：粘土質，マンガン粒多量，淡黄色粒・ブロック少量含む。

第 11 号土坑

土層説明（ＡＡ′）

1 旧耕作土
2 灰 色 土：粘土質，酸化鉄，白色粒多量含む。
3 暗灰黄色土：粘土質，酸化鉄，マンガン粒多量含む。
4 黒褐色土：粘土質，マンガン粒多量含む。
5 灰褐色土：粘土質，酸化鉄，マンガン粒多量含む。
6 黒褐色土：粘土質，酸化鉄，淡黄色粒，マンガン粒少量含む。
7 黒褐色土：粘土質，酸化鉄，マンガン粒多量，淡黄色粒，焼土粒・ブロック少量含む。
8 灰 色 土：粘土質，酸化鉄，淡黄色粒・ブロック，マンガン粒少量含む。

● ＝ 土器

0 2m 1/60

第51図　第７～11号土坑

第７号土坑（第51図）

第２区の76－87・88グリッドに位置する。南側を第11号溝跡、調査区との境付近をピット31・33に切られている。ピット32・34との新旧関係は不明である。また、本土坑は直接切り合い関係のない第１・２号掘立柱建物跡内に位置するが、新旧関係は不明と言わざるを得ない。北側は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された範囲の長軸は最大1.96m、短軸は1.21mを測る。平面プランは、楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大0.07mと浅い。立ち上がりは緩やかであり、底面はやや凹凸がみられた。覆土は黒褐色土による単一層であったが、自然堆積と思われる。

出土遺物がないため、本土坑の時期は不明であるが、重複する遺構との新旧関係から古墳時代前期か、第11号溝跡より古い古墳時代後期と思われる。

第８号土坑（第51図）

第２区の76・77－88・89グリッドに位置する。北東部を第２号掘立柱建物跡と第12号溝跡、調査区との境付近をピット37～39に切られており、同所でピット40を切っている。ピット40は単独ピットとしたが、本土坑に伴う可能性もある。南側は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された範囲の長軸は最大3.02m、短軸は2.36mを測る。平面プランは、楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大0.2mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第53図）で図示可能なものは、土師器丸胴甕の口縁部（８－１）のみである。覆土上層から出土した。口縁部は開きが小さく、やや受け口状を呈する。調整は、内外面ともに横ナデである。

本土坑の時期は、重複する第２号掘立柱建物跡と第12号溝跡より古い古墳時代後期と思われる。

第９号土坑（第51図）

第２区の75－88グリッドに位置する。直接切り合い関係のない第１号掘立柱建物跡内に位置するが、新旧関係は不明と言わざるを得ない。北側は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、径1.35m前後の円形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大0.21mであったが、土層断面を観察した調査区境の壁面では0.3mであったことが確認された。立ち上がりは緩やかであり、底面は凹凸がみられ、中央付近がやや高い。覆土は、ほぼ水平に堆積していたが、自然堆積と思われる。

出土遺物に図示可能なものはないが、古墳時代後期の土師器有段口縁坏と甑口縁部の小片が出土している。

本土坑の時期は、古墳時代後期と思われる。

第10号土坑（第51図）

第３区の72－86グリッドに位置する。北東部でピット61を切っている。

径0.9m前後の円形を呈する。確認面からの深さは、最大0.18mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面は北側にやや傾斜する。覆土はほぼ水平に堆積していたが、自然堆積と思われる。

出土遺物は（第53・54図）は、土師器壺（10－１～５）がある。すべて同一個体であり、覆土上層から出土した。10－１は胴部中段から底部までの部位であり、その他は10－１と接合関係の認められなかった胴部中段の破片である。胴部は半球形を呈するが、器壁が一定でないため、凹凸が目立ち、全体的に

いびつである。底部はやや上げ底である。調整は、外面がハケメ後にヘラミガキを施しているが、胴下部はハケメが残る。内面は摩耗が著しいため図示できなかったが、おそらくハケメ調整である。外面に赤彩が施されているが、大半が剥落している。

本土坑の時期は、古墳時代前期と思われる。

第11号土坑（第51図）

第3区の71－87・88グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は、みられない。南側は、調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された範囲の長軸は最大1.55m、短軸は0.56mを測る。平面プランは、楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大0.17mであったが、土層断面を観察した調査区境の壁面では0.27mであったことが確認された。立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ平坦であった。覆土は、中層に焼土粒・ブロックを含むが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物がないため、本土坑の時期は不明と言わざるを得ない。

第12号土坑（第52図）

第3区の69・70－85グリッドに位置する。南側で第8号住居跡、東側で第13号土坑を切っている。また、所々で単独ピットと重複するが、新旧関係は不明である。北東部は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された範囲の長軸は最大2.52m、短軸は1.28mを測る。平面プランは、長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大0.22mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は、上層から中層まではレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われるが、下層はブロックを含んでおり、埋め戻された可能性が高い。

出土遺物（第54図）は、古墳時代後期以降の須恵器短頸壺（12－1）、甕（12－2）、古墳時代前期の土師器壺（12－3）があるが、すべて流れ込みと思われる。

12－1は、須恵器短頸壺の胴上部片である。調整は、外面が回転カキ目、内面はロクロナデである。12－2は、須恵器甕の胴下部片である。調整は、外面がタタキ、内面はあて具痕を残す。須恵器の産地は、12－1が不明、12－2は末野産である。12－3は、土師器壺の底部である。平底である。調整は、外面がハケメ、内面はヘラナデである。

出土遺物に伴うものがないため、本土坑の時期は不明であるが、重複する遺構との新旧関係から古墳時代後期以降としか言えない。

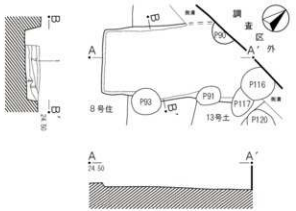
第13号土坑（第52図）

第3区の69・70－85グリッドに位置する。西側を第12号土坑に切られており、単独ピットとも重複するが、新旧関係は不明である。

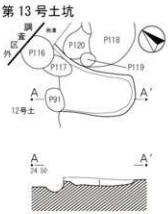
正確な規模は不明であるが、検出された範囲の長軸は最大1.22m、短軸は0.82mを測る。平面プランは、隅丸長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大0.11mと浅い。立ち上がりは緩やかであり、底面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土はブロックを多量含んでおり、埋め戻されていた。

出土遺物がないため、本土坑の時期は不明であるが、重複する遺構との新旧関係から第12号土坑より古い古墳時代後期以降としか言えない。

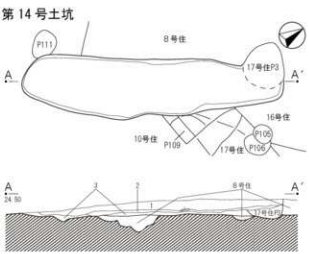
第 12 号土坑



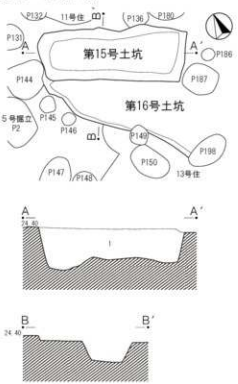
第 13 号土坑



第 14 号土坑



第 15・16 号土坑



第 12 号土坑
土層説明（B B′）
1 黒 色 土：粘土質。マンガン粒多量、淡黄色粒、白色粒少量含む。
2 灰 色 土：粘土質。マンガン粒多量、黒色土、白色粒少量含む。
3 灰 色 土：粘土質。マンガン粒多量含む。2層より明るい。
4 褐灰色土：粘土質。淡黄色粒・ブロック、灰色土、マンガン粒多量含む。

第 13 号土坑
土層説明（A A′）
1 黒褐色土：粘土質。淡黄色粒・ブロック、マンガン粒多量含む。埋め戻し。

第 14 号土坑
土層説明（A A′）
1 黒褐色土：粘土質。白色粒多量、淡黄色粒、マンガン粒少量含む。
2 黒 色 土：粘土質。淡黄色粒、白色粒少量含む。
3 灰褐色土：粘土質。黒色土、マンガン粒多量、淡黄色粒少量含む。

第 15 号土坑
土層説明（A A′）
1 黒褐色土・淡黄色シルト混合層：埋め戻し。

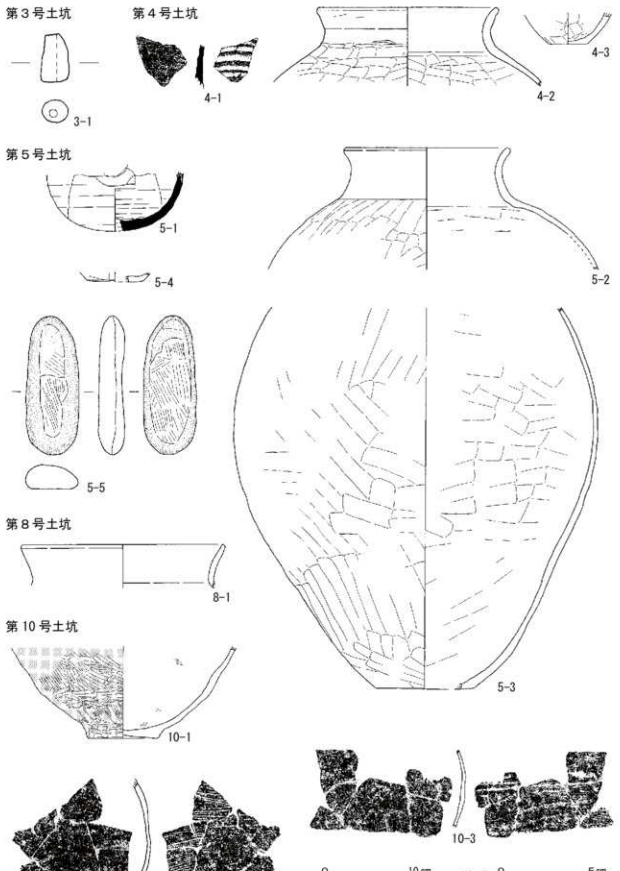
0 2m
1/60

第52図　第12 ～ 16号土坑

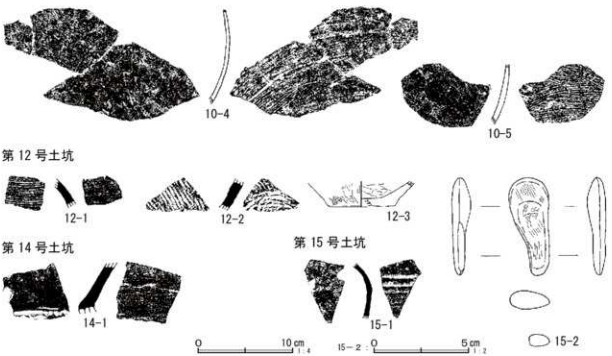
第14号土坑（第52図）

第３区の70－86・87グリッドに位置する。多くの住居跡と重複するが、本土坑が最も新しい。土坑としたが、溝跡としても良いかもしれない。

規模は長軸4.17m、短軸0.96mを測る。平面プランは、隅丸長方形に近い。確認面からの深さは、最大0.2



第53図　土坑出土遺物（１）



第54図　土坑出土遺物（2）

第19表　土坑出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
3-1	第3号土坑	土錘	最大長(2.6)cm、最大幅(1.5)cm、孔径0.95cm。重量(3.5)g。完形。							
4-1	第4号土坑	須恵器長頸瓶	−	−	−	AB	灰白色	B	頸部片	産地不明。外面自然釉付着。
4-2	第4号土坑	土師器 甕	(19.2)	(8.4)	−	ABCDHIN	橙色	B	口～胴40%	口縁部外面輪積痕有。
4-3	第4号土坑	土師器 甕	−	(3.35)	(4.2)	ABDHKN	黒褐色	B	底部30%	
5-1	第5号土坑	須恵器 鉢	−	(6.7)	−	ABFHN	灰色	B	胴～底20%	南比企産。外面自然釉付着。
5-2	第5号土坑	土師器 甕	(17.6)	(12.9)	−	ABDEHN	にぶい黄橙色	B	口～胴40%	内外面摩耗顕著。胴部内面調整。
5-3	第5号土坑	土師器 甕	−	(40.4)	10.3	ABDEHN	にぶい黄橙色	B	胴～底40%	内外面摩耗顕著。
5-4	第5号土坑	土師器 甕	−	(1.0)	(6.1)	ABEHIK	黒褐色	B	底部25%	
5-5	第5号土坑	砥石	最大長14.7cm、最大幅5.65cm、最大厚2.8cm。重量309g。完形。砂岩。二面使用。							
8-1	第8号土坑	土師器 甕	(21.6)	(4.7)	−	ABDHIN	にぶい黄橙色	B	口縁部30%	内外面摩耗顕著。
10-1	第10号土坑	土師器 壺	−	(9.8)	7.8	ABEHIN	橙色	B	胴～底30%	外面赤彩剥落。内面摩耗。10-2～5同一。
10-2	第10号土坑	土師器 壺	−	−	−	ABEHIN	にぶい橙色	B	胴中段片	外面赤彩剥落。内外面摩耗。10-1·3～5同一。
10-3	第10号土坑	土師器 壺	−	−	−	ABEHIN	褐灰色	B	胴中段片	外面赤彩剥落。内外面摩耗。10-1·2·4·5同一。
10-4	第10号土坑	土師器 壺	−	−	−	ABEHIN	灰黄褐色	B	胴中段片	外面赤彩剥落。内面摩耗。10-1～3·5同一。
10-5	第10号土坑	土師器 壺	−	−	−	ABEHIN	にぶい橙色	B	胴中段片	外面赤彩剥落。内外面摩耗。10-1～4同一。
12-1	第12号土坑	須恵器相脚壺	−	−	−	ABEN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	産地不明。
12-2	第12号土坑	須恵器 甕	−	−	−	ABL	褐灰色	B	胴下部片	末野産。
12-3	第12号土坑	土師器 壺	−	(2.7)	(7.2)	ABDEHIKN	にぶい橙色	B	底部30%	外面摩耗顕著。
14-1	第14号土坑	須恵器 甕	−	−	−	ABFN	灰色	B	頸部片	南比企産。外面自然釉付着。
15-1	第15号土坑	須恵器 瓶	−	−	−	ABF	灰白色	B	胴上～中片	南比企産。外面自然釉付着。
15-2	第15号土坑	磨石	最大長5.2cm、最大幅2.15cm、最大厚0.95cm。重量12.5g。完形。粘板岩。							

mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第54図）で図示可能なものは、古墳時代後期以降の須恵器甕の頸部片（14－1）のみであり、流れ込みの可能性もある。調整は、内外面ともにロクロナデである。外面に自然釉が付着している。南比企産である。

出土遺物に時期を特定できるものがないため、本土坑の時期は不明であるが、重複する第17号住居跡より新しい平安時代と思われる。

第15号土坑（第52図）

第3区の68・69－85・86グリッドに位置する。南側で第16号土坑を切っており、単独ピットとも重複

するが、新旧関係は不明である。

規模は長軸2.35m、短軸0.9mを測る。平面プランは、長方形を呈する。確認面からの深さは、最大0.66mと深い。立ち上がりは鋭角であり、底面は凹凸がみられた。覆土は黒褐色土と淡黄色シルトによる単一層であり、埋め戻されていた。

出土遺物（第54図）で図示可能なものは、古墳時代後期以降の須恵器瓶（15－１）、古墳時代前期と思われる磨石（15－２）があるが、いずれも流れ込みと思われる。

15－１は、須恵器瓶の胴上部から中段にかけての破片である。調整は、内外面ともにロクロナデである。外面に自然釉が付着している。南比企産である。15－２は、小振りの磨石である。片端が石鉢状を呈する。両面に擦痕がみられた。

出土遺物に伴うものがないため、本土坑の時期は不明であるが、重複する遺構との新旧関係から古墳時代後期以降としか言えない。

第16号土坑（第52図）

第３区の68・69－85・86グリッドに位置する。北側を第15号土坑に切られており、南側で第13号住居跡を切っているが、東側は確認面の都合から立ち上がりを検出できなかった。また、所々で単独ピットとも重複するが、新旧関係は不明である。

正確な規模は不明であるが、検出された範囲の長軸は最大2.73m、短軸は１mである。平面プランは、いびつな長方形であろうか。確認面からの深さは、最大0.07mと浅い。立ち上がりは西側がやや緩やかであるが、その他は鋭角であった。底面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、黒褐色土による単一層であり、自然堆積と思われる。

出土遺物がないため、本土坑の時期は不明であるが、重複する遺構との新旧関係から古墳時代後期以降としか言えない。

5　ピット

ピットは、計224基と多数確認された。第１～３区全面に分布するが、第２区75～77－88・89グリッド、第３区67～71－85～87グリッドに集中し、特に後者では住居跡群に混じって多数検出された。これらのピットの中には、柱筋を捉えきれなかった掘立柱建物跡や柵列跡になる可能性もある。時期を特定できるものは少ないが、概ね確認された遺構の年代幅に収まると思われる。各ピットの計測値などについては、第20表を参照のこと。なお、表中の長短軸に（）が付くものは現存長、深さに（）が付くものは、重複する遺構の底面から確認された数値を示す。

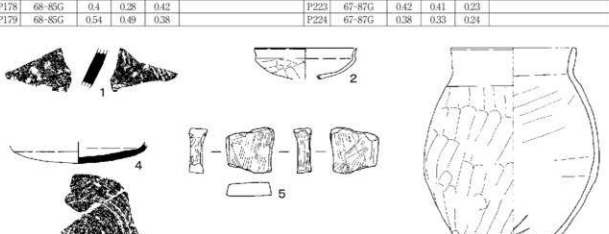
出土遺物（第55図）で図示可能なものは、古墳時代後期以降の土師器、須恵器、石製品がある。この他にも古墳時代前期の土師器が若干出土したが、小片であり、図示不可能であった。

１は、古墳時代後期以降の須恵器甕の胴下部片である。ピット71出土である。調整は、内外面ともにヘラナデであるが、外面は横位、内面は斜位に施されている。内面はあて具痕が残る。末野産である。２は、古墳時代後期の土師器坏蓋模倣坏である。ピット98出土である。小振りで短い口縁部がやや外反し、体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は中央を欠くが、丸底と思われる。調整は、口縁部から体部の内外面が横ナデ、底部の外面はヘラ削りである。３は、全形の分かる土師器丸胴甕である。ピット

第20表　ピット計測表

No	位　置	長(m)	短(m)	深(m)	備　考	No	位　置	長(m)	短(m)	深(m)	備　考
P1	87-86G	0.39	0.32	0.26		P68	71-85･86G	0.58	0.47	(0.12)	3住より新。
P2	86-86G	0.51	0.36	0.05	P3と新旧不明。	P69	71-86G	0.25	0.23	0.12	
P3	86-86G	0.58	0.45	0.07	P2と新旧不明。	P70	71-86G	0.3	0.26	0.11	
P4	82-86G	0.41	0.38	0.25		P71	71-86G	0.32	0.31	0.18	
P5	82-86G	0.24	0.19	0.1		P72	71-86G	0.45	0.43	0.22	
P6	82-86G	0.23	0.19	0.13		P73	71-86G	0.4	0.34	(0.38)	3住より新。16溝より古。
P7	82-86G	0.45	0.34	0.19		P74	71-86G	0.4	0.39	0.19	
P8	82-86G	0.24	0.23	0.07		P75	71-86G	0.4	0.36	0.14	
P9	82-86G	0.47	0.35	0.36		P76	71-86G	0.61	0.49	(0.26)	8住より新。
P10	81-86G	0.72	0.46	0.13		P77	71-86G	0.24	0.23	(0.07)	8住より新。
P11	81-86G	0.45	0.27	(0.05)	5･7溝より古。	P78	71-87G	0.4	0.36	0.12	
P12	80-86G	0.37	0.31	0.23	5溝より新。	P79	71-87G	0.41	0.35	0.24	
P13	80-81-86G	0.33	0.21	0.11		P80	70-71-87G	(0.29)	(0.42)	0.19	
P14	81-82-87G	0.44	0.36	0.18	4溝に伴う？	P81	71-87G	0.46	0.4	0.2	16溝より古。
P15	81-87G	0.34	0.31	0.29	4溝に伴う？	P82	71-87G	0.36	0.35	0.17	
P16	81-87G	0.65	0.33	0.24	4溝に伴う？	P83	71-87G	0.46	0.46	0.19	
P17	81-87G	0.29	0.29	(0.09)	2土と新旧不明。	P84	71-87G	0.5	0.45	0.32	
P18	81-87G	0.3	0.3	0.15	2土と新旧不明。	P85	71-87G	0.35	0.3	0.18	
P19	79-87G	0.47	0.38	(0.21)	4溝より古。	P86	71-87G	0.44	0.39	0.28	
P20	78-87G	0.36	0.25	0.19	10溝と新旧不明。	P87	70-85G	0.25	0.2	0.27	
P21	78-87G	0.73	(0.54)	0.36		P88	70-85G	0.41	0.24	0.41	8住より新。
P22	78-87･88G	0.28	0.26	(0.11)	6土と新旧不明。	P89	70-85G	0.47	0.44	0.45	8住より新。
P23	77-88G	0.42	0.29	0.14		P90	70-85G	(0.41)	(0.2)	(0.1)	12土と新旧不明。
P24	77-88G	0.57	0.45	0.16		P91	70-85G	0.39	0.29	0.24	12･13土と新旧不明。
P25	77-88G	0.44	0.39	0.35		P92	70-85G	0.58	0.54	(0.37)	8住より新。
P26	77-88G	0.55	0.45	0.1		P93	70-85G	0.47	0.41	0.39	12土と新旧不明。
P27	77-88G	0.4	0.35	0.22		P94	70-85･86G	0.4	0.32	(0.09)	8住より新。
P28	76-88G	(0.7)	(0.41)	0.24	12溝と新旧不明。	P95	70-86G	0.5	0.43	(0.19)	8住より新。
P29	76-77-88G	0.59	0.52	0.46	11溝、P30と新旧不明。	P96	70-86G	0.75	0.55	(0.42)	8住より新。P97と不明。
P30	76-88G	(0.26)	0.23	(0.1)	11溝、P29と新旧不明。	P97	70-86G	0.38	0.23	(0.17)	8住より新。P96と不明。
P31	76-88G	0.63	0.39	0.18	7土より新。	P98	70-85･86G	0.63	0.4	(0.59)	8住より新。16住より古。
P32	76-88G	0.83	0.4	(0.12)	7土と新旧不明。	P99	70-86G	0.48	0.38	(0.1)	8住より新。17住より古。
P33	76-88G	(0.27)	(0.38)	0.33	7土より新。	P100	70-86G	0.55	0.48	(0.2)	8住より新。
P34	76-88G	(0.7)	0.45	0.12	7土と新旧不明。	P101	70-86G	0.57	0.52	(0.2)	8住より新。P102と不明。
P35	76-88G	0.33	(0.26)	0.26	2掘立より古。	P102	70-86G	0.29	0.25	(0.1)	8住より新。P101と不明。
P36	76-88G	0.53	0.38	0.22	12溝と新旧不明。	P103	70-86G	0.55	0.49	(0.14)	8住より新。16･17住より古。
P37	76-88G	(0.26)	(0.13)	0.29	8土より新。	P104	70-86G	0.63	0.5	(0.11)	8住より新。16･17住より古。
P38	76-88G	(0.2)	(0.25)	0.28	8土より新。	P105	69-70-86G	0.31	0.28	不明	8住より新。16･17住より古。
P39	76-88G	0.3	0.22	(0.06)	8土より新。	P106	69-70-86G	0.44	(0.3)	0.16	8住より新。16･17住より古。
P40	76-88･89G	(1.19)	(0.24)	(0.1)	8土より古。伴う？	P107	70-86･87G	(0.54)	0.38	0.17	8住より古。
P41	76-88G	0.69	0.55	0.16	11溝と新旧不明。	P108	70-86･87G	0.67	0.53	(0.24)	8住より新。17住･14土より古。
P42	75-76-88G	0.44	0.33	0.19		P109	70-86･87G	0.65	0.6	(0.05)	10･17住より古。
P43	75-88G	(0.75)	0.44	0.11		P110	70-71-87G	0.66	0.42	0.37	
P44	75-88G	0.32	0.3	0.09		P111	70-87G	0.46	0.35	不明	14土より古。
P45	75-76-88G	0.41	0.35	0.11		P112	70-87G	0.37	0.35	0.27	10住と新旧不明。
P46	76-88G	0.33	0.27	0.11		P113	70-87G	0.35	0.33	0.15	10住と新旧不明。
P47	76-88･89G	0.38	0.34	0.11		P114	70-87G	0.67	0.63	0.33	10住と新旧不明。
P48	76-88･89G	0.37	0.35	0.28		P115	70-71-87G	0.42	0.39	0.22	
P49	75-88･89G	0.4	0.39	0.23	14溝と新旧不明。	P116	69-70-85G	0.5	(0.48)	(0.21)	12･13土、P117と新旧不明。
P50	75-88･89G	0.29	0.29	0.34	14溝と新旧不明。	P117	69-85G	(0.36)	0.31	0.15	12･13土、P116と新旧不明。
P51	75-88G	0.46	0.3	0.32	14溝と新旧不明。	P118	69-85G	0.92	0.78	0.75	P119～121と新旧不明。
P52	75-88G	(0.55)	0.59	0.05		P119	69-85G	0.23	0.21	0.35	P118･120と新旧不明。
P53	75-88･89G	0.57	0.5	0.36	11溝と新旧不明。	P120	69-85G	(0.46)	(0.41)	0.14	P118･119･121と新旧不明。
P54	75-89G	0.29	0.26	0.14		P121	69-85G	(0.29)	(0.12)	0.19	P118･120と新旧不明。
P55	75-89G	0.31	0.3	0.18		P122	69-85G	0.35	(0.17)	0.2	
P56	72-85G	0.39	0.32	(0.26)	3住より新。	P123	69-85G	0.6	0.57	(0.31)	11住より新。P124･125と不明。
P57	71-72-85G	0.42	0.31	(0.25)	3住より新。	P124	69-85G	0.53	0.49	(0.45)	11住より新。P123･125と不明。
P58	72-85G	0.58	0.55	(0.21)	3住より新。	P125	69-85G	0.56	(0.42)	(0.09)	11住より新。17溝より古。
P59	72-86G	0.3	0.3	0.31		P126	69-85G	0.41	0.35	(0.11)	11住より新。
P60	72-86G	0.34	0.29	0.22		P127	69-85G	0.42	0.3	(0.13)	11住より新。17溝より古。
P61	72-86G	(0.6)	(0.3)	0.21	10土より古。	P128	69-85G	0.46	0.45	0.53	P129と新旧不明。
P62	72-86G	0.5	0.42	0.26		P129	69-85G	0.44	0.41	0.1	P128と新旧不明。
P63	72-87G	0.36	0.36	0.27		P130	69-85G	0.34	0.2	0.05	
P64	72-87G	0.42	0.39	0.2		P131	69-85G	0.4	0.38	0.34	
P65	72-87G	0.69	0.47	0.23		P132	69-85G	0.42	0.35	0.24	11住より新。17溝より古。
P66	72-87G	0.52	0.48	0.16		P133	69-85G	0.43	0.35	不明	17溝より古。
P67	71-85G	0.48	0.41	(0.13)	3住より新。	P134	69-85G	0.55	0.53	(0.19)	11住より新。

No	位　置	長(m)	短(m)	深(m)	備　考	No	位　置	長(m)	短(m)	深(m)	備　考
P135	69-85G	0.29	0.29	0.48	11住より新。	P180	68-69-85-86G	0.58	0.55	0.32	17溝より古。P181と不明。
P136	68-69-85G	0.4	(0.35)	0.14	17溝より古。15土と不明。	P181	68-85-86G	0.49	0.45	0.32	17溝より古。P180・185と不明。
P137	69-70-85G・86G	0.65	0.33	(0.29)	16・17住より古。P138・140不明。	P182	68-85-86G	0.43	0.35	0.14	17溝より古。
P138	69-70-85G	0.61	0.5	(0.29)	17住より古。P137と不明。	P183	68-85G	0.43	0.31	0.35	P184と新旧不明。
P139	69-86G	0.53	0.48	(0.09)	16住より古。P141と不明。	P184	68-85・86G	0.54	0.49	0.48	P183と新旧不明。
P140	70-86G	0.44	(0.34)	(0.14)	16・17住より古。P137・141不明。	P185	68-86G	0.39	0.24	0.1	P181と新旧不明。
P141	69-70-86GG	0.44	(0.3)	(0.1)	16・17住より古。P140・141不明。	P186	68-86G	0.22	0.19	(0.37)	13住より新。
P142	69-86G	0.32	0.32	(0.06)	16・17住より古。	P187	68-69-86G	0.54	0.48	(0.31)	13住より新。
P143	69-86G	0.43	0.39	0.41	17住と新旧不明。	P188	68-86G	0.25	0.21	0.42	
P144	69-85・86G	0.66	0.55	0.69	16土と新旧不明。	P189	68-86G	0.35	0.34	0.31	13住より新。
P145	69-86G	0.26	0.25	0.1		P190	68-86G	0.6	(0.43)	0.36	13住より新。5掘立と不明。
P146	69-86G	0.23	0.21	0.03		P191	68-86G	0.29	0.29	0.34	13住より新。5掘立と不明。
P147	69-86G	0.71	0.45	0.09	17住との新旧不明。	P192	68-86G	0.45	0.35	(0.3)	17溝より古。
P148	69-86G	0.42	0.36	0.19	13住より新。5掘立と不明。	P193	68-86G	0.62	0.38	0.34	17溝より古。14住と新旧不明。
P149	69-86G	0.32	0.29	(0.16)	13住より新。16土と不明。	P194	68-86G	0.59	(0.43)	0.66	14住より新。
P150	69-86G	0.64	0.42	(0.1)	13住より新。	P195	68-86G	0.39	0.33	(0.81)	13住より新。P196と新旧不明。
P151	69-86G	(0.39)	0.5	不明	13住より新。17住、5掘立不明。	P196	68-86G	(0.39)	(0.29)	(0.28)	13住より新。P195と新旧不明。
P152	69-86G	0.29	0.25	(0.19)	13住より新。	P197	68-86G	0.59	0.42	0.15	14住より新。
P153	69-86・87G	0.51	0.45	(0.3)	10住、P154と新旧不明。	P198	68-69-86G	0.68	0.38	(0.13)	13住より新。16土と不明。
P154	69-87G	(0.39)	0.38	(0.12)	10住より古。	P199	68-69-86G	0.81	0.39	(0.09)	13住より新。P200と不明。
P155	69-86G	0.35	0.33	0.33	17住と新旧不明。	P200	68-86G	0.5	0.4	(0.2)	13住より新。P199と不明。
P156	69-86G	0.36	0.32	0.24		P201	68-86G	0.48	0.42	(0.26)	13住より新。
P157	69-86G	0.27	0.21	0.18		P202	68-86・87G	(0.42)	(0.52)	(0.18)	6住より新。12住より古。
P158	69-87G	0.47	0.46	(0.15)	10住、P159・160と新旧不明。	P203	68-86・87G	0.62	0.5	(0.55)	6住より新。12住より古。
P159	69-87G	(0.75)	(0.68)	(0.18)	10住、P158・160と新旧不明。	P204	68-86・87G	(0.22)	0.43	(0.35)	6住より新。12住より古。
P160	69-87G	(0.48)	0.45	(0.11)	10住、P158・159と新旧不明。	P205	68-69-87G	0.39	0.33	(0.26)	1住より新。12住より古。
P161	69-87G	0.28	0.23	0.1	10住と新旧不明。	P206	68-87G	0.39	0.3	(0.45)	1住より新。12・13住より古。
P162	69-87G	0.74	0.55	0.27	9・10住と新旧不明。	P207	68-87G	0.95	0.52	(0.49)	1・12・13住より新。
P163	69-87G	0.21	(0.17)	0.12	9・10住と新旧不明。	P208	68-86・87G	0.25	0.24	(0.19)	12住より古。
P164	69-87G	0.36	0.29	0.24		P209	68-87G	0.18	0.16	(0.07)	1住より新。12住より古。
P165	69-87G	0.34	0.27	0.09	1住より新。	P210	68-87G	0.34	0.31	(0.32)	1住より新。12住より古。
P166	68-69-85G	(0.47)	(0.18)	0.06		P211	68-87G	0.31	0.26	(0.32)	1住より新。12住より古。
P167	68-85G	(0.54)	0.35	0.23	11住より新。P168と不明。	P212	68-87G	0.33	0.26	(0.25)	1・2住より新。12住より古。
P168	68-85G	0.17	0.15	0.09	11住より新。P167と不明。	P213	68-87G	0.43	0.37	不明	1・2住より新。12住より古。
P169	68-69-85G	0.5	0.46	0.31	17溝より古。	P214	68-87G	0.49	0.43	(0.15)	12住より古。P215と不明。
P170	68-85G	(0.23)	(0.4)	0.26		P215	68-87G	0.63	0.52	(0.41)	12住より古。P214・216と不明。
P171	68-85G	0.36	0.27	0.13		P216	67-68-87G	0.48	0.43	(0.32)	12住より古。P215と不明。
P172	68-85G	(0.4)	(0.18)	0.08		P217	67-68-86G	(0.55)	0.43	(0.39)	6・14住より新。
P173	68-85G	0.74	(0.22)	0.31		P218	67-87G	0.47	0.43	(0.26)	6・15住より新。
P174	68-85G	0.44	0.43	0.31		P219	67-87G	0.4	0.34	(0.26)	15住より新。
P175	68-85G	0.47	0.41	0.27	5掘立、P176と新旧不明。	P220	67-87G	(0.51)	(0.26)	(0.38)	15住より新。
P176	68-85G	(0.26)	0.47	0.37	P175と新旧不明。	P221	67-87G	0.71	(0.53)	(0.26)	7・15住より新。
P177	68-85G	0.24	0.22	0.22		P222	67-87G	0.4	0.27	(0.23)	7・15住より新。
P178	68-85G	0.4	0.28	0.42		P223	67-87G	0.42	0.41	0.23	
P179	68-85G	0.54	0.49	0.38		P224	67-87G	0.38	0.33	0.24	



第55図　ピット出土遺物

第21表　ピット出土遺物観察表

番号	出土ピット	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	ピット71	須恵器　甕	－	－	－	ABHLN	灰白色	B	胴下部片	末野産。
2	ピット98	土師器　坏	(10.8)	(3.3)	－	ABEHIKN	橙色	B	25%	
3	ピット154	土師器　甕	13.2	22.4	7.1	ABCDHIKN	にぶい褐色	B	60%	内面・外面一部摩耗顕著。
4	ピット159	須恵器　坏	－	(2.3)	(13.7)	ABHLN	灰白色	B	体～底20%	末野産。
5	ピット208	砥　石	最大長(4.8)cm、最大幅(5.1)cm、最大厚(1.9)cm。重量(59.5)g。両端欠。凝灰岩。四面使用。							

154出土である。口縁部の開きが小さく、直立に近い。胴部は大きく膨らみ、中段に最大径を持つ。底部は平底である。調整は、口縁部が内外面ともに横ナデ、胴部は摩耗が著しいが、外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。胴下部内面にヘラによる刻みが施されている。4は、奈良時代の須恵器坏の体部から底部までの部位である。ピット159出土である。大型で底部中央が出っ張る。調整は、内外面ともにロクロナデであるが、内面はヘラナデも施されている。底面は全面回転ヘラ削りが施されている。末野産である。5は、砥石である。ピット208出土である。両端を欠くが、全面に線状痕がみられた。凝灰岩製である。

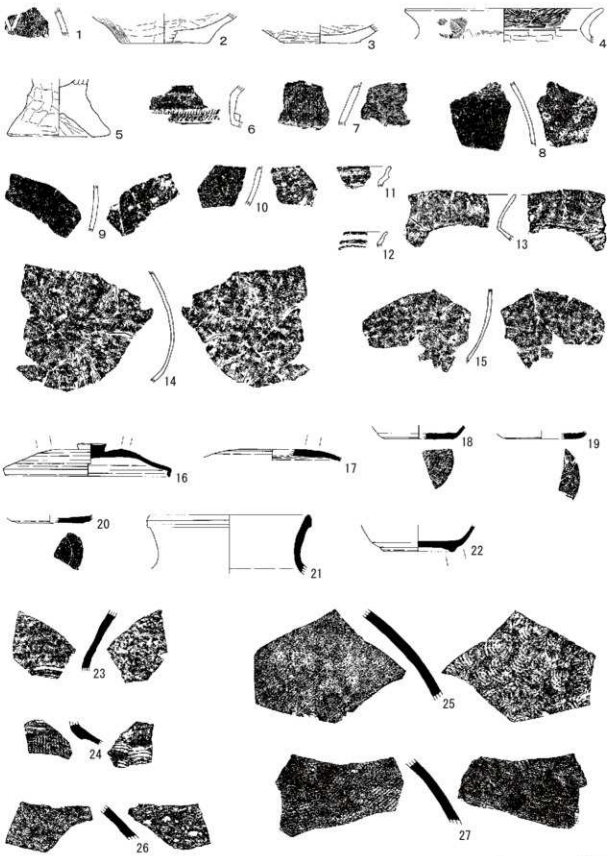
6　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、弥生時代中期後半から古墳時代前・後期、奈良・平安時代、近世まで幅広く検出されている。最も多いのは古墳時代後期の遺物であり、出土位置は竪穴住居跡などが多数検出された第3区が多い。なお、本報告では弥生時代と近世の遺構は確認されていない。

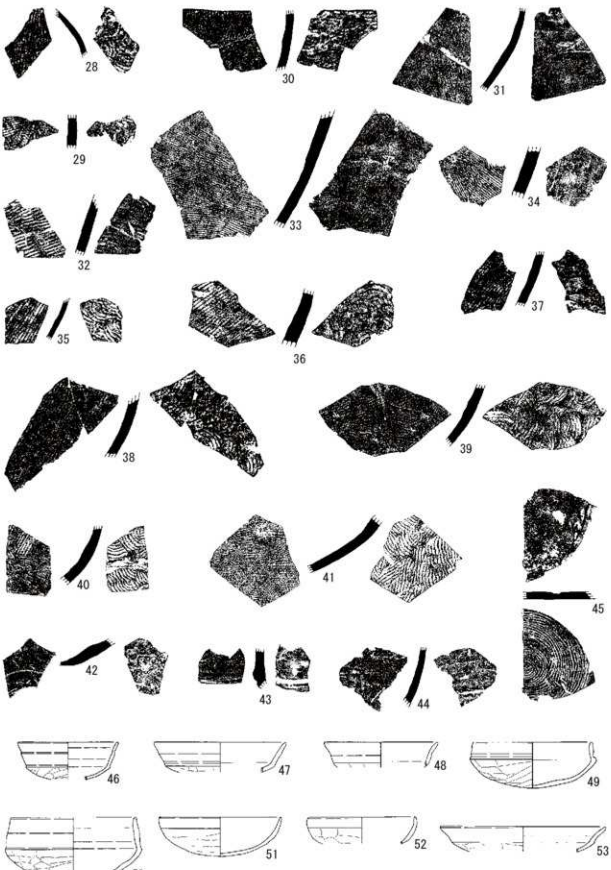
出土遺物（第56～58図）は、弥生時代中期後半の弥生土器壺（1）、古墳時代前期の土師器壺（2・3・6～10）、台付甕（4・5・11～15）、古墳時代後期以降の須恵器蓋（16・17）、坏（18～20）、短頸壺（21）、高台付椀（22）、甕（23～42）、瓶（43～45）、土師器坏（46～52）、皿（53）、甕（54～58・60・61）、鉢（59）、近世の磁器椀（60）、陶器擂鉢（61）、瓦質土器焜炉（62）がある。

1は、弥生時代中期後半の弥生土器壺の胴上部片である。外面はＬＲ単節縄文地に鋸歯文が描かれている。内面は、横位のヘラナデ調整が施されている。

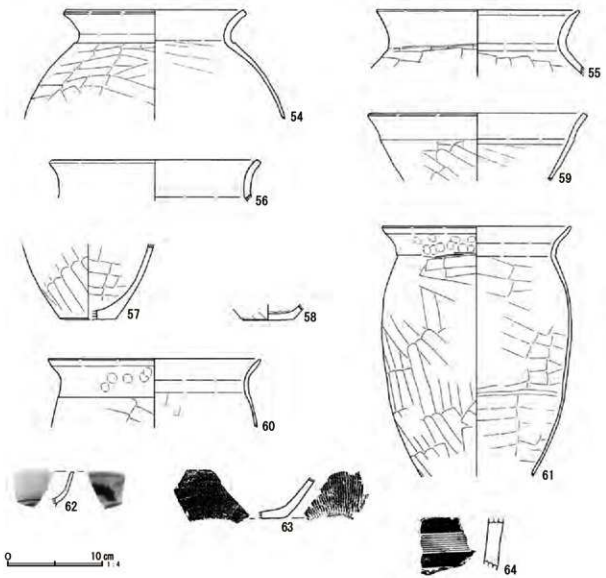
2～15は、古墳時代前期の土師器である。2・3・6～10は、壺である。2・3は底部であり、6は頸部から肩部にかけて、7は頸部、8は胴上部、9は胴部中段、10は胴下部の破片である。8～10は同一個体である。2・3は、いずれもやや上げ底である。調整は、2の外面上位がヘラミガキ、下位はハケメとヘラナデが併用されているが、雑に施されている。内面はヘラナデである。3の外面は粗いヘラミガキ、内面はヘラナデである。6は頸部下位に突帯が巡る。頸部の無文部上位で屈曲する箇所が縦位、中段は横位のヘラミガキが施されており、下位の突帯にはヘラによる斜位の刻みが施文されている。突帯下の肩部は、縦位のハケメが施されている。内面は頸部の屈曲する上位が縦位、下位は横位のヘラミガキ、肩部は横位のヘラナデが施されている。7は内外面ともにハケメ調整であるが、外面は縦位、内面は上位が横位、下位は斜位に施されている。同一個体の8～10は、胴上部外面に細沈線で波状文、複数の平行沈線が巡る。以下の無文部は、縦・斜位のヘラミガキが施されている。内面は横・斜位のハケメ調整が主体となるが、中段のみ横・斜位のヘラナデが施されている。4・5・11～15は、台付甕である。4は口縁部から頸部まで、5は接合部から台部までの部位、11・12は口縁部から頸部まで、13は口縁部から肩部まで、14は胴上部から下部まで、15は胴部中段から下部までの破片である。14・15は同一個体である。4は断面形がくの字状を呈する。調整は、外面がハケメ後に横ナデ、内面は口縁部がハケ



第56図　遺構外出土遺物（1）



第57図　遺構外出土遺物（2）



第58図　遺構外出土遺物（3）

メ、頸部はヘラナデが施されている。5は台部がハの字に開く。器壁が分厚く、胎土が粗い。調整は、内外面ともに粗いヘラナデである。11・12は、S字甕である。器壁が薄い。調整は、いずれも内外面ともに横ナデである。13は断面形がくの字状を呈する。器壁が薄い。調整は、内外面ともにハケメであるが、外面は口縁部が斜位、肩部は縦位、内面は口縁部が斜・横位、肩部は斜位に施されている。同一個体の14・15も器壁が薄い。調整は、内外面ともにハケメであるが、外面は横・斜位、内面は横位に施されており、内面はハケメ後、所々に横位のヘラミガキも施されている。

16～61は、古墳時代後期以降の土器である。16～45は、須恵器である。蓋・坏・短頸壺・高台付椀は奈良・平安時代のものであるが、甕と瓶は古墳時代後期以降としか言えない。

16・17は、蓋である。16は残存状態が良く、つまみを含む全形の分かる個体であるが、17はつまみと口縁部を欠く。調整は、いずれも内外面ともにロクロナデであるが、天井部に回転ヘラ削りが施されている。18～20の坏は、すべて口縁部を欠く。調整は、内外面ともにロクロナデである。底面は18・20が回転糸切後外周ヘラ削りであるが、19は手持ちによるヘラ削りが施されている。21は、短頸壺の口縁部

第22表　遺構外出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	第3区	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIKN	黄褐色	B	胴上部片	中期後。内外面摩耗顕著。
2	第3区	土師器　壺	－	(3.2)	(9.4)	ABEKN	にぶい黄橙色	B	底部25%	古墳前。
3	第3区	土師器　壺	－	(2.0)	(8.6)	ABCDHIKN	橙色	B	底部25%	古墳前。
4	第3区	土師器台付甕	(21.0)	(3.65)	－	ABDHIK	にぶい黄橙色	B	口～頸20%	古墳前。
5	第2区	土師器台付甕	－	(6.1)	10.9	ABEHIN	橙色	B	脚～台80%	古墳前。
6	第3区	土師器　壺	－	－	－	ABEHIKN	灰黄褐色	B	頸～胴部片	古墳前。
7	第3区	土師器　壺	－	－	－	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	頸部片	古墳前。
8	第3区	土師器　壺	－	－	－	ABDHIKN	にぶい橙色	B	胴上部片	古墳前。№9-10同一個体。
9	第3区	土師器　壺	－	－	－	ABDHIKN	にぶい橙色	B	胴中段片	古墳前。№8・10同一個体。
10	第3区	土師器　壺	－	－	－	ABDHIKN	にぶい橙色	B	胴下部片	古墳前。№8-9同一個体。
11	第3区	土師器台付甕	－	－	－	ABEIKN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	古墳前。
12	第3区	土師器台付甕	－	－	－	ABDEIK	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	古墳前。
13	72-87G	土師器台付甕	－	－	－	ABHIN	にぶい褐色	B	口～肩部片	古墳前。
14	72-87G	土師器台付甕	－	－	－	ABEHIKN	外黒褐　内赤褐	B	胴上～下片	古墳前。№15同一個体。
15	72-87G	土師器台付甕	－	－	－	ABEHIKN	外黒褐　内赤褐	B	胴中～下片	古墳前。№14同一個体。
16	第2区	須恵器　蓋	17.8	3.45	7.5	ABFN	灰色	B	80%	奈良・平安。南比企産。
17	第3区	須恵器　蓋	－	(1.2)	(6.9)	ABFN	灰色	B	天～体20%	奈良・平安。南比企産。
18	第2区	須恵器　坏	－	(1.45)	(7.2)	ABFN	黄灰色	B	体～底20%	奈良・平安。南比企産。
19	第2区	須恵器　坏	－	(0.85)	(8.2)	ABDFN	明オリーブ灰色	B	底部20%	奈良・平安。南比企産。
20	第3区	須恵器　坏	－	(0.9)	(7.0)	AFHN	黄灰色	B	底部20%	奈良・平安。南比企産。
21	第2区	須恵器短頸壺	(16.8)	(6.3)	－	ABDEHL	にぶい黄橙色	B	口～肩15%	奈良・平安。末野産。酸化焔焼成。
22	第3区	須恵器高台付椀	－	(2.85)	(7.8)	AFHN	褐灰色	B	体～高60%	奈良・平安。南比企産。
23	69-87G	須恵器　甕	－	－	－	ABFN	灰色	B	頸部片	南比企産。内面自然釉付着。
24	第3区	須恵器　甕	－	－	－	ABFH	灰白色	B	肩部片	南比企産。№28・30・38・39同一個体。
25	第2区	須恵器　甕	－	－	－	ABL	外灰白　内黒	B	胴上部片	末野産。外面上位自然釉付着。
26	第2区	須恵器　甕	－	－	－	ABL	灰色	B	胴上部片	末野産。外面自然釉付着。
27	第2区	須恵器　甕	－	－	－	ABFN	外褐灰　内灰	B	胴上部片	南比企産。
28	第3区	須恵器　甕	－	－	－	ABFH	灰白色	B	胴上部片	南比企産。№24・30・38・39同一個体。
29	第3区	須恵器　甕	－	－	－	ABDL	黄灰色	B	胴中段片	末野産。
30	第3区	須恵器　甕	－	－	－	ABFH	灰白色	B	胴中段片	南比企産。№24・28・38・39同一個体。
31	第2区	須恵器　甕	－	－	－	ABEFN	褐灰色	B	胴下部片	南比企産。
32	第2区	須恵器　甕	－	－	－	ABEN	橙色	B	胴下部片	産地不明。
33	第2区	須恵器　甕	－	－	－	ABL	灰色	B	胴下部片	末野産。
34	第2区	須恵器　甕	－	－	－	ABL	褐灰色	B	胴下部片	末野産。
35	第3区	須恵器　甕	－	－	－	ABDFN	浅黄色	B	胴下部片	南比企産。
36	第3区	須恵器　甕	－	－	－	ABFN	褐灰色	B	胴下部片	南比企産。
37	第3区	須恵器　甕	－	－	－	ABFN	灰色	B	胴下部片	南比企産。
38	第3区	須恵器　甕	－	－	－	ABFN	灰白色	B	胴下部片	南比企産。№24・28・30・39同一個体。
39	第3区	須恵器　甕	－	－	－	ABFK	灰白色	B	胴下部片	南比企産。№24・28・30・38同一個体。
40	第2区	須恵器　甕	－	－	－	ABHL	黄灰色	B	胴下部片	末野産。
41	第2区	須恵器　甕	－	－	－	ABL	灰色	B	胴下部片	末野産。
42	第3区	須恵器　甕	－	－	－	ABHN	黄灰色	B	胴下～底片	産地不明。底部内面自然釉付着。
43	第3区	須恵器長頸瓶	－	－	－	AB	灰白色	B	頸部片	産地不明。外面下位自然釉付着。
44	第2区	須恵器　瓶	－	－	－	ABDN	灰白色	B	胴下部片	産地不明。
45	第2区	須恵器　瓶	－	－	－	ABFN	灰色	B	底部片	南比企産。
46	第2区	土師器　坏	(10.6)	(3.95)	－	ABDEHN	明黄褐色	B	40%	古墳後。内外面摩耗顕著。
47	68-88G	土師器　坏	(14.0)	(3.2)	－	ABDHIN	橙色	B	口～体25%	古墳後。外面やや摩耗。
48	69-87G	土師器　坏	(12.0)	(2.7)	－	ABEHIK	暗灰黄色	B	口～体25%	古墳後。
49	83-87G	土師器　坏	12.8	4.85	－	ABEH	にぶい褐色	B	80%	古墳後。内外面やや摩耗。
50	第3区	土師器　坏	(13.3)	(6.25)	－	ABEHIKN	黒褐色	B	30%	古墳後。
51	第3区	土師器　坏	(13.0)	4.2	－	ABDHIK	にぶい黄橙色	B	25%	古墳後。内外面摩耗顕著。
52	第3区	土師器　坏	(11.4)	(2.85)	－	ABK	橙色	B	口～体20%	古墳後。内外面やや摩耗。
53	第2区	土師器　皿	(17.5)	(2.7)	－	ABHIKN	橙色	B	口～体15%	古墳後。内外面摩耗顕著。
54	第2区	土師器　甕	(19.3)	(11.75)	－	ABEHN	褐色	B	口～胴25%	古墳後。胴部内面摩耗顕著。
55	第2区	土師器　甕	(21.4)	(7.0)	－	ABDHKN	橙色	B	口～胴20%	古墳後。
56	第2区	土師器　甕	(22.4)	(4.4)	－	ABEHI	橙色	B	口縁部20%	古墳後。
57	第2区	土師器　甕	－	(8.0)	(5.8)	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴～底60%	古墳後。
58	第3区	土師器　甕	－	(1.7)	5.4	ABDHIK	にぶい褐色	B	底部100%	古墳後。
59	第3区	土師器　鉢	(23.2)	(7.2)	－	ABCDHIKN	橙色	B	口～体15%	古墳後。内面摩耗顕著。
60	第2区	土師器　甕	(22.4)	(7.3)	－	ABEHK	明赤褐色	B	口～胴15%	奈良。胴部内面摩耗顕著。
61	第2区	土師器　甕	(20.0)	(26.5)	－	ABDEHIKN	にぶい赤褐色	B	口～胴35%	奈良。胴部内面やや摩耗。
62	第2区	磁器　碗	－	－	－	－	－	－	口～体部片	近世。肥前系。
63	第2区	陶器　擂鉢	－	－	－	－	－	－	体～底部片	近世。堺・明石系。
64	第1区	瓦質土器　焙炉	－	－	－	ABK	－	B	胴部片	近世。在地系。

から肩部までの部位である。調整は、内外面ともにロクロナデである。22は、高台付椀の体部から高台部までの部位である。体部がやや内湾し、高台が短い。調整は、体部内外面がロクロナデであるが、外面は高台部を挟んで体部と底面に回転ヘラ削りが施されている。23～42は、甕である。23は頸部、24は肩部、25～28は胴上部、29・30は胴部中段、31～41は胴下部、42は胴下部から底部にかけての破片である。24・28・30・38・39は、同一個体である。調整は、23が内外面ともにロクロナデ、24は外面がタタキ、内面はあて具痕が残る。胴上部以下の25～28・30・31・37～39は内外面ともにヘラナデ、29・32～36は外面がタタキ、内面はヘラナデ（29・32～34）とあて具痕を残すもの（35・36）がある。40・41は外面にタタキ後回転カキ目が施され、内面はあて具痕が残る。42は胴下部外面が回転ヘラ削り、底面は手持ちヘラナデ、内面は横位のヘラナデである。内外面がヘラナデ調整のものは、すべて外面にタタキ、内面にあて具痕が残る。43～45は、瓶である。43は長頸瓶の頸部、44は胴下部、45は底部の破片である。調整は、43・44が内外面ともにロクロナデ、45は内面が手持ちヘラナデ、底面は回転カキ目が施されている。須恵器の産地は、21・25・26・29・33・34・40・41が末野産、32・42～44は不明、その他は南比企産である。21のみ酸化焔焼成である。23の内面、25の外面上位、26の外面、42の底部内面、43の外面下位に自然釉が付着している。

46～61は、土師器である。坏・皿、甕の54～58、鉢の59は古墳時代後期、甕60・61は奈良時代のものである。46～48は、有段口縁坏である。46は小振りで深身、47・48は扁平化しており、浅身である。46・47は口縁部が逆ハの字状に立ち上がるが、48は口縁端部がやや外反する。いずれも体部と底部の境に稜を持つが、48はやや弱い。いずれも底部を欠くが、46は丸底、その他は平底に近いと思われる。49・50は、坏身模倣坏である。50は深身で椀としても良いかもしれない。口縁部が内傾し、体部と底部の境に明確な稜を持つ。底部は50が中央を欠くが、丸底と思われる。51・52は、北武蔵型坏である。短い口縁部が51はやや外に開き、52は内湾する。体部と底部の境にある稜が弱い。底部は52が大半を欠くが、丸底と思われる。53は器形が坏蓋模倣坏に似るが、やや大型で扁平化していることから皿とした。口縁部が大きく外反し、体部と底部の境に弱い稜を持つ。底部を欠くが平底に近いと思われる。坏・皿の調整は、口縁部から体部の内外面が横ナデ、底部外面はヘラ削りである。54～58は、甕である。54～56は丸胴甕、57・58は長胴甕である。丸胴甕は、口縁部から胴部中段までに収まる部位である。口縁部の開きが小さく、胴部が大きく膨らむ。54は口縁端部に凹みが巡り、55は内面に段を持つ。長胴甕は、胴下部から底部までに収まる部位である。底部は平底である。59は、鉢の口縁部から体部までの部位である。最大径を持つ口縁部がやや外反し、端部に凹みが巡る。体部は底部に向かってほぼ直線的に下る。甕・鉢の調整は、口縁部が内外面ともに横ナデ、胴部及び体部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。60・61は、奈良時代の長胴甕である。60は口縁部から胴上部まで、61は口縁部から胴下部までの部位である。器壁が薄い。いずれも口縁部の断面形がくの字とコの字の中間的な形状を呈し、61はやや受け口状を呈する。胴部は上位が膨らむが、口径とあまり変わらず、下位に向かってすぼまる。調整は、口縁部が内外面ともに横ナデと指オサエ、胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。61は胴部内面中段付近に輪積痕が残る。

62～63は、近世の遺物である。62は、肥前系磁器椀の口縁部から体部にかけての破片である。63は堺・明石系陶器擂鉢の体部から底部にかけての破片である。64は在地系瓦質土器焜炉の胴部片である。

Ⅴ　調査のまとめ

藤之宮遺跡の報告は、今回で二回目となる。本報告地点東側には平成19年度報告地点があるが、今回の報告地点も前回と同じく、遺構の密度が濃く、激しく重複していた。また、表土掘削にあたっては、本遺跡一帯で基準となる遺構確認面まで掘り下げてしまうと古墳時代後期以降の遺構が無くなってしまうため、従来の遺構確認面よりやや上で留めたが、多くの遺構は覆土が浅くなってしまう傾向にあった。遺構の密度が濃く、重複が激しいこと、また遺構の覆土が浅い点は、この遺跡の特徴とも言える。

本報告地点では、古墳時代初頭から奈良・平安時代までの遺構・遺物が検出された。弥生時代と近世は遺物のみ検出されたが、弥生時代は前回報告地点で中期後半と思われる方形周溝墓が１基、近世は東側に隣接する諏訪木遺跡で検出されていることから本遺跡内外に遺構が所在することが明らかとなっている。また、前回の報告地点では中世の火葬跡が１基検出されているが、本報告地点では遺構・遺物とも中世は検出されていない。今回の報告は、前回の成果をほぼトレースする内容となっているが、ここで検出された古墳時代初頭～前期、後期～末、奈良・平安時代の集落について簡潔に述べてみたい。

古墳時代初頭～前期の遺構は、住居跡７軒、土坑１基である。すべて第３区からの検出であるが、第２区では遺構外出土遺物があることから調査区外に同段階の遺構があるかもしれない。第７号は一部のみの検出で遺物がなく、同段階の遺構とも重複していなかったため古墳時代初頭か前期か判別がつかないが、その他の住居跡は出土遺物や重複する遺構との新旧関係、主軸方向などからみると、その変遷は、以下のとおりとなる。

第２号住居跡　→　第１号住居跡　→　第４・５号住居跡　→　第３・６号住居跡

古墳時代初頭～前期は、前回の報告地点でも９軒検出されており、本遺跡では集落のみ検出されているが、東側に隣接する諏訪木遺跡や南側に隣接する前中西遺跡では方形周溝墓も検出されている。本遺跡を含む周辺一帯では、古墳時代初頭～前期という限られた期間でも時期を変えて居住だけでなく、墓地としても利用されていたことが明らかとなっている。

古墳時代後期～末の遺構は、住居跡８軒、掘立柱建物跡４棟、溝跡11条、土坑７基である。住居跡は第３区、掘立柱建物跡は第２区東側から第３区西側にかけて、溝跡は第１・２区、土坑は第２・３区から検出された。なお、多数検出されたピットの大半は、同段階に属する可能性が高い。

住居跡は、出土土器からすべて７世紀代に相当する。各住居跡の時期は、第８・12号が７世紀中頃、第９号が７世紀末～８世紀初頭、第13・15号が７世紀前半と思われ、第10・11・14号は遺物が少ないが第10号が７世紀後半、第11・14号は７世紀中頃を前後する時期と思われる。掘立柱建物跡は、第２・３区から各２棟検出された。第１・２号と第３・４号は、ほぼ同所で重複することから時期差を持つことは明らかである。遺物のないものが多いため、具体的な時期を特定するのは困難であるが、重複する遺構との新旧関係や主軸方向などからみると、第１号は７世紀末～８世紀初頭、第２号は７世紀後半、第３号は７世紀中頃、第４号は７世紀前半と思われる。溝跡は、走行する方向から、①北西から南東方向へ走るもの（第７・８・11・12号）、②蛇行するもの（第２・５号）、③北東から南西方向へ走るもの（第１・９・６・13号）の３つに分類でき、新旧関係を基に変遷を辿ると、③→①→②となる。遺物がないものが多いため具体的な時期を特定するのは困難であるが、第６号からは本報告では検出例の少ない土

師器坏身模倣坏、第７・８・12号からは７世紀中頃の土師器が出土していることから、時期は③が６世紀末～７世紀前半、①は７世紀中頃前後、②は７世紀後半以降と思われる。土坑は、第５号からまとまって遺物が出土している以外に時期を特定できるものがない。第５号の時期は、出土遺物と重複する遺構との新旧関係から７世紀前半と思われる。

上記をまとめると、古墳時代後期～末の遺構の変遷は、以下のとおりとなる。

６世紀末～７世紀前半：第13・15号住居跡、第４号掘立柱建物跡、第１・９・６・13号溝跡、第５号土坑

７世紀中頃：第８・11・12・14号住居跡、第３号掘立柱建物跡、第７・８・11・12号溝跡

７世紀後半：第10号住居跡、第２号掘立柱建物跡、第２・５号溝跡

７世紀末～８世紀初頭：第９号住居跡、第１号掘立柱建物跡

前回の報告地点では、住居跡は中期との過渡的なものも含めて７軒、掘立柱建物跡３棟、溝跡11条、土坑11基が検出されており、これらの時期は５世紀後半から８世紀初頭までである。今回の報告地点では７世紀代が主体となるが、前回報告の年代幅に収まる。

奈良・平安時代の遺構は、住居跡２軒、掘立柱建物跡１棟、溝跡６条、土坑２基である。住居跡と掘立柱建物跡は第３区、溝跡は第２・３区、土坑は第２・３区から検出された。これらの遺構は、軸がほぼ東西南北に合う。住居跡２軒は第３区ほぼ中央で重複しており、あまり時期差がないが、出土遺物から第16号が８世紀後半、第17号は９世紀初頭と思われる。そして、両住居跡を第５号掘立柱建物跡と第14号土坑が切っており、さらに第５号掘立柱建物跡を第17号溝跡が切っていることから、これらの遺構は９世紀初頭以降に位置付けられる。第２区で検出された溝跡３条（第３・４・10号）は、すべて同一方向に走ることから同時期と思われ、第４号の出土遺物から９世紀後半と考えたい。なお、第４号では、東端に設けられた土坑状の掘り込み底面に細長い板が並んで敷かれていたが、水場として利用したものであろうか。また、第４号では形象埴輪が１点出土しているが、これは本遺跡の東側に所在する上之古墳群の影響によるものと思われる。第３区で検出された第15・16号溝跡は重複しており、第15号が第16号より新しいが、その位置からいずれも住居跡か掘立柱建物跡に付随するものと思われる。

前回の報告地点では、住居跡５軒、掘立柱建物跡３棟、溝跡６条、土坑５基、井戸跡３基が検出されており、これらの時期は８世紀中頃から９世紀中頃までであることから、本報告地点の第４号溝跡は最も新しい時期に位置付けられる。また、第５号掘立柱建物跡や第17号溝跡、第14号土坑も同時期の可能性が考えられる。同段階の集落は、東側に隣接する諏訪木遺跡の北西部で９世紀代を主体とした集落が確認されており、本遺跡の奈良・平安時代の集落は諏訪木遺跡の集落とはやや距離があるが、同一の集落と捉えて良いかもしれない。

以上、紙数の都合もあり、簡潔に述べた。本遺跡の広がりについては、東限は前回の報告地点で把握できていたが、今回の報告では概ね西限を把握することができたと言える。今後は南北に集落がどこまで広がっているかを把握することが課題となる。

引用・参考文献

熊谷市遺跡調査会　2001『諏訪木遺跡』

2013『上之古墳群・諏訪木遺跡』
2016『前中西遺跡Ⅹ』
熊谷市教育委員会　1979『中条条里遺跡調査報告書Ⅰ』
1983『めづか』
2002『前中西遺跡Ⅱ』
2003『前中西遺跡Ⅲ』
2007『諏訪木遺跡Ⅱ・上之古墳群第２号墳』
2008『藤之宮遺跡』
2009『前中西遺跡Ⅳ』
2010『西城切通遺跡』
2010『前中西遺跡Ⅴ』
2011『前中西遺跡Ⅵ』
2012『前中西遺跡Ⅶ』
2013『前中西遺跡　西別府館跡　王子西遺跡　立野遺跡』
2013『前中西遺跡Ⅷ』
2016『前中西遺跡Ⅺ』
2017『諏訪木遺跡Ⅲ』
2018『中西遺跡Ⅰ』
2018『前中西遺跡Ⅻ』
2019『中西遺跡Ⅱ』
2020『諏訪木遺跡Ⅳ』
2020『諏訪木遺跡Ⅴ　上之古墳群第３・４号墳』
熊谷市前中西遺跡調査会　1999『前中西遺跡』
2014『前中西遺跡Ⅸ』
埼玉県遺跡調査会　1971『横塚山古墳』
埼玉県教育委員会　1984『池守・池上』
1988『埼玉の中世城館跡』
㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1982『池上西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第21集
1991『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集
1993『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集
2002『北島遺跡Ⅴ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第278集
2002『池上／諏訪木』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第283集
2003『北島遺跡Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集
2004『古宮／中条条里／上河原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第298集
2007『諏訪木遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第336集
2008『諏訪木遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第351集

写 真 図 版

図版1

第1区全景（南から）

第2区全景（西から）

図版２

第２区全景（西から）

第２区全景（東から）

第３区全景（東から）

第１・２号住居跡

第５号住居跡

第１号住居跡遺物出土状況

第６・14号住居跡

第３・４号住居跡

第７・15号住居跡

第３号住居跡遺物出土状況

第８号住居跡

図版４

第８号住居跡カマド

第９号住居跡遺物出土状況２

第８号住居跡遺物出土状況

第10号住居跡

第９号住居跡

第11号住居跡

第９号住居跡遺物出土状況１

第12号住居跡

第12号住居跡カマド

第13号住居跡

第12号住居跡遺物出土状況1

第13号住居跡遺物出土状況

第12号住居跡遺物出土状況2

第16号住居跡

第12号住居跡遺物出土状況3

第16号住居跡カマド

図版６

第17号住居跡

第２号掘立柱建物跡

第17号住居跡カマド

第３号掘立柱建物跡

第17号住居跡遺物出土状況

第４号掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡

第５号掘立柱建物跡

第１号溝跡

第３号溝跡

第２号溝跡

第４号溝跡

図版８

第４号溝跡遺物出土状況１

第４号溝跡板敷出土状況（北から）

第４号溝跡板敷出土状況（真上から）

第４号溝跡遺物出土状況２

第４号溝跡板敷出土状況（東から）

第４号溝跡遺物出土状況３

第５・６号溝跡

第７号溝跡

第８号溝跡遺物出土状況１

第８号溝跡遺物出土状況２

第８号溝跡

第９号溝跡

図版 10

第10号溝跡

第13号溝跡

第11・12・14号溝跡

第15・16号溝跡

第17号溝跡

第３号土坑

第４号土坑

第１号土坑

第４号土坑遺物出土状況

第２号土坑

第５号土坑

図版 12

第５号土坑遺物出土状況

第９号土坑

第６号土坑

第10号土坑

第７号土坑

第11号土坑

第８号土坑

第12号土坑

第13号土坑

ピット154遺物出土状況

第14号土坑

72−87グリッド遺物出土状況

第15・16号土坑

82−87グリッド遺物出土状況

ピット14〜16

作業風景

図版 14

第１号住居跡　第10図１

第１号住居跡　第10図２

第２号住居跡　第11図１

第２号住居跡　第11図２

第３号住居跡　第13図２

第３号住居跡　第13図１

第５号住居跡　第14図１

第６号住居跡　第15図１

第６号住居跡　第15図２

第９号住居跡　第23図26

第13号住居跡　第29図14

遺構外　第56図2

第13号住居跡　第29図15

遺構外　第56図3

第15号住居跡　第31図15－7

遺構外　第56図4

第10号土坑　第53図10－1

遺構外　第56図5

第12号土坑　第54図12－3

遺構外　第56図6

図版 16

第２号住居跡　第11図８

第８号住居跡　第19図12

第８号住居跡　第19図１

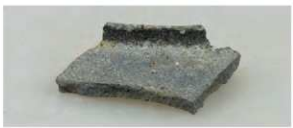
第８号住居跡　第19図13

第８号住居跡　第19図２

第８号住居跡　第19図14

第８号住居跡　第19図３

第８号住居跡　第19図15



第８号住居跡　第19図４

第８号住居跡　第19図11

第８号住居跡　第19図16

第８号住居跡　第19図17

第８号住居跡　第20図18

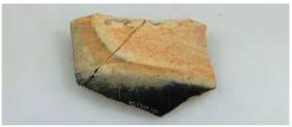
第８号住居跡　第20図19

第８号住居跡　第20図20

第８号住居跡　第20図21

第８号住居跡　第20図22

第８号住居跡　第20図24


第９号住居跡　第22図６

第９号住居跡　第22図７

第９号住居跡　第22図８

第９号住居跡　第22図９

第９号住居跡　第22図10

第９号住居跡　第22図11

第９号住居跡　第22図12

第９号住居跡　第22図13

図版 18

第９号住居跡　第22図14

第９号住居跡　第22図15

第９号住居跡　第22図16

第９号住居跡　第22図17

第９号住居跡　第22図18

第９号住居跡　第22図19

第９号住居跡　第22図20

第９号住居跡　第22図21

第９号住居跡　第22図22

第９号住居跡　第22図23

第９号住居跡　第22図24

第10号住居跡　第24図1

第12号住居跡　第27図2

第12号住居跡　第27図3

第12号住居跡　第27図4

第12号住居跡　第27図5

第12号住居跡　第27図6

第12号住居跡　第27図7

第12号住居跡　第27図8

第12号住居跡　第27図9

第12号住居跡　第27図10

第12号住居跡　第27図11

第12号住居跡　第27図12

図版 20

第12号住居跡　第27図13

第12号住居跡　第27図20

第12号住居跡　第27図21

第12号住居跡　第27図14

第13号住居跡　第29図1

第12号住居跡　第27図15

第13号住居跡　第29図2

第13号住居跡　第29図3

第12号住居跡　第27図16

第13号住居跡　第29図4

第12号住居跡　第27図17

第13号住居跡　第29図5

第12号住居跡　第27図18

第12号住居跡　第27図19

第13号住居跡　第29図6

第13号住居跡　第29図７

第13号住居跡　第29図８

第13号住居跡　第29図９

第13号住居跡　第29図10～12

第14号住居跡　第31図14－１

第15号住居跡　第31図15－１

第15号住居跡　第31図15－２

第15号住居跡　第31図15-3

第15号住居跡　第31図15-4

第16号住居跡　第33図７

第４号溝跡　第46図４－２

第４号溝跡　第47図４－42

第４号溝跡　第47図４－42内面

第４号溝跡　第47図４－43

図版 22

第４号溝跡　第47図４－44

第４号溝跡　第48図４－45

第６号溝跡　第48図６－１

第７号溝跡　第48図７－１

第７号溝跡　第48図７－２

第８号溝跡　第48図８－１

第８号溝跡　第48図８－２

第８号溝跡　第48図８－３

第８号溝跡　第48図８－４

第８号溝跡　第48図８－５

第８号溝跡　第48図８－６

第８号溝跡　第48図８－７

第８号溝跡　第49図８－８

第８号溝跡　第49図８－９

第８号溝跡　第49図８－10

第８号溝跡　第49図８－11

第12号溝跡　第49図12-3

第13号溝跡　第49図13-1

第４号土坑　第53図４－２

第５号土坑　第53図５－１

第５号土坑　第53図５－２

第５号土坑　第53図５－３

図版 24

第８号土坑　第53図８－１

ピット98　第55図２

ピット154　第55図３

遺構外　第57図46

遺構外　第57図47

遺構外　第57図48

遺構外　第57図49

遺構外　第57図50

遺構外　第57図51

遺構外　第57図52

遺構外　第57図53

遺構外　第58図54

第１号住居跡　第10図８

第10号住居跡　第24図３

第16号住居跡　第33図１

第16号住居跡　第33図２

第16号住居跡　第33図３

第16号住居跡　第33図５

第16号住居跡　第33図６

第16号住居跡　第33図11

第16号住居跡　第33図12

第16号住居跡　第33図13

第17号住居跡　第35図１

図版 26

第17号住居跡　第35図2

第17号住居跡　第35図3

第17号住居跡　第35図4

第4号溝跡　第46図4－1

第4号溝跡　第46図4－3

第4号溝跡　第46図4－4

第4号溝跡　第46図4－5

第4号溝跡　第46図4－6

第4号溝跡　第46図4－7

第4号溝跡　第46図4－8

第4号溝跡　第46図4－9

第4号溝跡　第46図4－10

第13号溝跡　第49図13－2

第16号溝跡　第49図16－2

第17号溝跡　第49図17－1

第17号溝跡　第49図17－2

ピット159　第55図4

遺構外　第56図16

遺構外　第56図17

遺構外　第56図21

遺構外　第56図22

遺構外　第58図60

遺構外　第58図61

図版 28

第１号住居跡　第10図６・７
第２号住居跡　第11図５～７
第３号住居跡　第13図５
第８号住居跡　第20図27
第12号住居跡　第27図23・24
第15号住居跡　第31図15－５・６
第５号掘立柱建物跡　第40図５～７
遺構外　第56図１

第２号住居跡　第11図３・４
第３号住居跡　第13図３・４
第８号住居跡　第20図28
第10号土坑　第53・54図10-２～５
遺構外　第56図７～15

第８号住居跡　第19図５～10・29
第９号住居跡　第22図１～５
第10号住居跡　第24図２
第12号住居跡　第27図１
第16号住居跡　第33図８・９
第17号住居跡　第35図５・６

第17号住居跡　第35図７～10
第５号掘立柱建物跡　第40図４
第４号溝跡　第46図４－11～23

第４号溝跡　第47図４－24～41

第５号溝跡　第48図５－１
第12号溝跡　第49図12－１・２
第16号溝跡　第49図16－３
第４号土坑　第53図４－１
第12号土坑　第54図12－１・２
第14号土坑　第54図14－１
第15号土坑　第54図15－１
ピット71　第55図１
遺構外　第56・57図23～31

図版 30

遺構外　第57図32～45

第１号住居跡　第10図９

第１号住居跡　第10図10

第15号土坑　第54図15－２

第１号住居跡　第10図11

第１号住居跡　第10図12

第５号土坑　第53図５－５

第８号住居跡　第20図25

第13号住居跡　第29図16

ピット208　第55図５

第８号住居跡　第20図26
第12号住居跡　第27図22

第４号溝跡　第48図４－46（左）
第３号土坑　第53図３－１（右）

第４号住居跡　獣骨片

第４号溝跡　第48図４－47

第９号住居跡　第23図25

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふじのみやいせきに
書　　名	藤之宮遺跡Ⅱ
副 書 名	熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書ⅩⅢ
巻　　次	—
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第42集
編 集 者 名	松田　哲
編 集 機 関	埼玉県熊谷市教育委員会
所 在 地	〒360－0107 熊谷市千代329番地　熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062
発行年月日	西暦2021（令和３）年3月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 (°′″)	東緯 (°′″)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
藤之宮遺跡	熊谷市上之2022番地4 地先ほか	11202	093	36° 08′ 54″	139° 24′ 16″	20130513 ～ 20130920	1,100	区画整理 街路築造 工事

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特　記　事　項
藤之宮遺跡	集落 祭祀 墓	弥生時代中期	－	弥生土器	古墳時代初頭から平安時代までの集落が同一箇所で激しく重複している状況が確認された。
		古墳時代初～前期	住居跡　7軒 土坑　1基	土師器、石器	
		古墳時代後期～末	住居跡　8軒 掘立柱建物跡4棟 溝跡　11条 土坑　7基	須恵器、土師器 土製品、鉄製品 石製品、埴輪	
		奈良・平安時代	住居跡　2軒 掘立柱建物跡1棟 溝跡　6条 土坑　2基	須恵器、土師器 灰釉陶器	
		近世	－	磁器、陶器 瓦質土器	
		時期不明	土坑　6基 ピット群		

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第42集
藤之宮遺跡Ⅱ
－熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書ⅩⅢ－
令和３年３月19日発行
発行／埼玉県熊谷市教育委員会
印刷／大屋印刷株式会社